

---

# 魔法少女と呼ばないで

どり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女と呼ばないで

### 【Nコード】

N9563S

### 【作者名】

どり

### 【あらすじ】

厄災を逃れて、こっちの世界に逃げ込んできた僕、ヤーコブ・ラバ。残された力で魔法少女を作り、彼女の力を借りて厄災に立ち向かわなければならない。公園で見つけた少女、佑衣に助けを求めて・・・「お前のようなダニは殺す！」え、僕はダニ？・・・どうやったら、この娘と共に世界を助けにいけるんでしょう。

## 1・「ダニは殺す」(前書き)

初めて章管理というものを使ってみました。どこを書き込むと、どう反映されるのか、実際使ってみないとわからないものです。はは、こうなるのかあ。

## 1. 「ダニは殺す」

僕は倒れ込んでいた。もう、残された力はほとんどない。

最後の力は、残しておかなければならない。そこまで使ってしまったら、本当にもうおしまいだ。

後ろを振り向く。追っ手が来ている様子はない。

なんとか、門は塞が<sup>ゲートウェイ</sup>っているようだ。

でも完全に閉めることは出来ない。完全に閉めてしまったら、もう二度と開くことが出来なくなる。

いつかはまたこの門を使つて、あっちの世界に帰っていかなければならない。

それに門に少し隙間があることで、あっちの世界の力が、ぼくに少しずつだけど、力を与えてくれている。

この力を蓄えていけば、一気に解放することが出来れば、もしかすると追っ手をやつつけることも出来るかも知れない。

でも今は、まず逃げることに。

この近くで、身を隠して、そして最後の力を与えることが出来る少女を見つけることが出来れば・・・

ぼくはゆっくり立ち上がると、芝生を横切った。

これはたしか、”公園”と呼んでいる施設のようだ。

ちょうどいい具合に、門は茂みの影になって、人目に付かない位置になっていた。

有り難い。騒がれなくて済む。

もともと門は簡単に言えば、<sup>リング・オブ・フォース</sup>力場の環だ。

それなりの力の持ち主が見れば、光って見えるけれど、その力がなければ、風景のちょっとした歪みでしかない。まず気付かれることはない。

公園には人影はなかった。柱の上にあつた時計を見る。短い針は11を差している。

あつちの世界とそんなに時差はないようだ。そうすると、今はお昼前というところだろう。

「あの子・・・」

やっと一人、長いすに腰掛けている少女を見つけた。

長い黒髪、白い服装。短めのスカート。

たしか、学生という階級に属している服装だったと思う。

僕に気が付いたのか、こつちを向いた。大きな瞳。無関心そうな様子。

さつと隠したのは何だろう。この刺激的な臭い・・・たしか、煙草とかいうものか。

このまま騒ぎ立てないで、僕の話聞いてくれればいい。そして力に同意してくれれば・・・

「あ、あの・・・」

これだけしか言えなかった。次の瞬間、彼女は消えた。

いや、素早い動きに僕は全く付いていけなかった。

のど元に彼女の手が入る。そのまま、後ろに押し倒されて、芝生にたたきつけられた。

何が起こったのか、わからない。

ただ咳き込んでいるだけの僕を、彼女は踏みつけた。

「げ、つこ、ごぶっ」

腹をめいっぱい踏みつけられて悶絶する。

彼女は攻撃の手を休めない。右足の靴が僕のものど元にはいった。

両手で彼女の右足を掴むけど、力を込められて、首の骨が軋む。

「や、止めて……」

そう呻く、僕の耳に彼女の声が入った。

「ダニは殺す」

ダ、ダニ……って、僕のことですか？

僕は彼女を見上げた。

すらりと伸びた右足の遙か上方で、相変わらず冷たい無表情な瞳で僕を見下ろしている。

思わず起きあがろうとした。

彼女の右足に力が入る。い、息ができない。

「お前、何者だ？」

僕の正体を、こっちの世界の住民ではないことを一目で見破るなんて、彼女こそ何者なんだ。

「な、なぜわかったんだ！？」

「そんなこと、誰だってわかるわよ。イヌともウサギともハムスターともつかない格好と大きさ、それでなおかつ日本語を操る動物なんて、絶対にいるはずないわ」

え？だって日本語じゃないと、通じないんでしょ？ここは。

それに愛玩動物の代表としてその三つから特徴的なポイントを合体させた、絶対の自信作なんですけど。

可愛らしい部分だけ持つてきて、合成させれば、ほら、すごく・・・

「・・・ね、かわいいでしょ？」

いきなり、彼女の脚が僕を蹴りつける。

「ぶぶぐ！」

「バカは死ねばいいわ！」

彼女の脚がぼくの胃を直撃した。

「いくら可愛い部分って言ったって、合体すれば気持ち悪いだけよ！日本語しゃべっていいのは、人間だけ！そんなこともわからないのなら、現代社会を生きてく資格ないわよ！」

彼女は思う存分、僕を蹴りつけた。

「もう一回聞かわよ。お前は何者？」

彼女はいつの間にか、右手にナイフを持っていた。それを僕の顔の前に突き出す。目が笑っていない。

「返事が気に入らない場合、即座にこれ突き立てるわよ。覚悟はいいわね？」

・・・いいわけないんですけど。

あっちの世界から、たった今来たこと。

こっちの世界の情報が少なく、愛玩動物の姿になっていれば怪しまれないで済むと思っていたこと。

いくつかの特徴を取り入れれば、もっといいんじゃないかって・

・（「バカ！」と言だけ）

日本語は魔術道具マジックアイテムの力で話せること。

こっちの世界では、魔法と呼ばれるような力があること。

でも、その力は今はほとんど使い果たしていること。

僕は彼女に説明した。

説明に納得したかどうかはよくわからないけれど、とりあえずナイフは刺さってこなかった。

「その姿になったっていったわね。他の姿にも変えられるの？」

「で、できます。けど、その力を使ったら、もう、本当に残りの力がなくなります。」

そしたら、当分魔法は使えないし、その力を授けてやってもらうことも……」

アワワ。まだそこまでしゃべるのは早いかも……

「どうも変なこと、考えているみたいね。まあ、いいわ。とにかく、その変な姿を変えなさい。」

人間の姿になって。日本語をしゃべる以上はそうしてよ。このままじゃ人目につくわ」

それは……彼女の言うとおりだと思った。僕は呟くように呪文

を唱える。

身体に付けてある、いくつかの魔法道具が呪文に同調して、力を發揮する。

黄色い光がうつすらと全身を包む。その光が消えると、ぼくは普通の人間の姿になった。

「・・・あんた、シヨタコン？それともコナン君好き？」

言われて、慌てて自分を見る。・・・これ、小学生？

身長も彼女より小さい。服装もそれに合わせたような半袖、半ズボン。・・・魔力が足りない！

もう本当にすっからかんだっただ。普通サイズになるような呪文だったのに、力がそこまで及ばなかったんだ。

「まあいいわよ。さっきよりはまともよ。」

じゃあ、ベンチでも座って、あんたの話、もう少し聞かせてくれる？」

ほっとして彼女の後ろを付いていこうとした。

「ぶっ！」

不意に彼女の右肘が僕の腹部に入った。苦い液体が口の中一杯になる。

「急にあたしの後ろに立たないで。反射的に防衛するから」

・・・そ、そうなんですか。って、あんたこそ、一体何者なんですか！？

## 1・「ダニは殺す」（後書き）

ひょいと閃いた話がどんどん展開してしまうことがあります。これでもそんな経緯でできてきたお話。閃きだけに最後までいけるかどうかわかりませんが、頑張ります。頑張らないと、佑衣に張っ倒される・・・

えっと、ダニ君（笑）の考えとしゃべりがごっちゃでわかりにくいとのご意見がありまして、ちよっと修正入れました。これでどうでしょうか。ご意見、感謝申し上げます。

## 2・阿坂居 佑衣（前書き）

ヒロイン 佑衣。

この子の性格、おもしろいわあ。どんどん破壊的にならないかなあ。

”ゆい”が先に出てきて、「うーん、名字・・・」て考えたとき、  
”あさかい”が出てきて、漢字変換。たぶん、もとは”あさかい”。  
い”。

## 2・阿坂居 佑衣

「あたし？あたしは阿坂居あさかい 佑衣ゆい。この近所に住んでる、ごく普通の中学生です」

「ごく普通？なんか、違和感があるんですけど？」

「あたしのことなんて、どうでもいいわよ。あんたが問題なの、あんたが！」

「はあ、まあ、確かに。こつちの世界の住民ではないですからねえ。」

佑衣さんと同じベンチに腰掛ける。

間を1m以上開けたのは、どつちのせいだ？

傍目は女子中学生と小学生男子児童。珍妙な取り合わせに見えただらう。

幸い、公園に他の人は見あたらなかったけど。

佑衣さんは隠し持っていた煙草を取り出すと火を付ける。

「さっきの話はわかったことにするから、あたしの質問に答えて。」

まず、あんたの名前は？あたしも名乗ったんだから、教えなさいよ」

「ヤーコブ・ラバ・オフエンバッフです」

あ、あの一、名前で吹き出すの、止めてください。

「やーこぶ・・・なんか、言にくい。らばでいいわ。らばで。で、らばはどうしてこつちの世界にくることになったの？」

なんか、名前でバカにされているような気もするんですけど。

”村”<sup>ヴァレッジ</sup>が襲われた。父と母とみんなが住んでいた村。

長老の言いつけどおりに、魔法道具を持って脱出した。僕一人だけで。

追っ手に追いかけられた。長老に言われた場所に逃げた。そこには”門”<sup>ゲートウェイ</sup>があった。でもそこも追っ手に襲われた。慌てて、門をくぐったら、ここに来ていた。

「ふーん、略奪かあ。その道具が目的なのかな。で、みんなはどうなったの？」

わからない。こちらにくるなり、門を閉じた。

こっちにこれない代わりに、あっちにもいけない。

みんなの知らせはない。生きているとも死んでいるとも。

でも逃げるとき、火事を見た。悲鳴を聞いた。みんな、無事とは思えない・・・

「弱者は襲われる定めだからね。で、これからどうするの？」

力を貯めて、門をもう一回開ける。

あっちに行ったら、みんなの消息を確かめる。

もし、無事じゃなかったら、復讐してやりたい・・・

佑衣さんは吸い終わった煙草の火を消すと、茂みにポイと投げ捨てた。

「そうね、そういう気持ちはわかんなくもないけど、頑張つて。じゃあね」

「・・・ちょ、ちょっと！それだけ！？」

おっかしいなあ。予想と違うんですけど。

普通、可哀相ねとか同情するわとかあって、手助けするとか、戦いの先頭に立つとか、  
後方支援するとかになりませんか？  
もうちょっとこっちの世界の人は、情け深いって思ってたんですけど・・・

佑衣さんがあつという間に僕の目の前に立っていた。

僕の胸ぐらを掴む。身長差で僕の靴が浮く。

「なんかぶつぶつぶやいてたけど、それってあたしが優しくないとて言ってますん？」

「い、言ってますん。全然、そんなこと、言ってますん！」

フンという目で僕を見る。

「蹴りが入らなかつただけ幸運だと思つてよね」

はい、運が良かったと思つてます・・・って、なんか、違つてません？

「そもそも、どうしてあたしがあんたの問題に介入しなきゃなんないのよ。あ・ん・た・の問題でしょ？」

「そ、そりゃそうですね。追っ手がこっちの世界に乱入してくると・・・」

佑衣さんはやれやれという顔をした。

「それでもあたしじゃなくて、警察とか自衛隊とかの出番でしょ」

「はあ、そうですね。言われるとおり。でも、やっぱりみんなで世界平和を・・・」

僕の言葉を聞いた途端、佑衣さんの端正な顔がゆがんだ。

「世界平和なんて反吐が出る。人類が滅んだって、あたし、全然構わないんだから！」

え、ってあなたも人類なのではないですか？

あの、言ってることが無茶苦茶に聞こえるんですけど・・・

もう頭の中が混乱しきっているとき、都合良く12時のチャイムが鳴った。

それと同時に僕のお腹が鳴る。腹時計、ナイスに正確。

そういえば、今日は朝からの逃亡劇で、何も口にしていなかったのだ。

そう思うと、急にお腹が減ってきて、痛いぐらい。

「あ、あの、人類の問題はいいですけど、お昼、食べさせてもらえませんか？」

僕は食べるものは何も持ってないし、こっちのお金も持ってないんです」

彼女は、冷やかな目でしばらく僕を見つめていたが、携帯を取り出した。

「……もしもし、魔来子<sup>まきこ</sup>さん？ 佑衣です。ええ、今日は学校お休みで……

お昼をお願いしたいのです。それとお客様を一人、お連れして、ええ、お昼、はい、宜しくお願いします」

話し終わると、相変わらず冷やかな目で言う。

「いい、お昼は用意してあげるけど、食べ終わったら、とっとと帰ってね。」

あ・た・し・を、あんたの問題に、巻き込まないでよね。いい？」

は、はい。僕もそう思い始めてます。

どうせ魔法をお願いするんだったら、もう少し性格のいい娘がいいなあ。

この娘、確かに器量はいいけど、性格がちよっと……

やばい！このつぶやき癖を何とかしないと！青ざめた直後だった。

バキッ！

背中に跳び蹴りが入った。僕は前につんのめる。顔面制動で着地。血が、鼻血が……

「信じられない。人にダメメシを甘えておいて、なおかつ性格が悪いとか言う……！？」

佑衣さんがあきれかえった声で言う。

「いきなり蹴りを食らわせるってことの方が信じられないんですけど！」

口の中で血の味を感じながら、僕は叫んだ。

「お客様のお昼ご飯、いらなくなりましたってことでいいかしら」

佑衣さんは携帯を取りだしてみせる。

「すみません。すみません。そんなこと、思ってます。

佑衣さんが優しいから、こんなお願いだってできるんです。ちよっと口が滑っただけです。ごめんなさい」

くそ、なんて、なんて、性格が。。。い子なんだ！（怖くて伏せ字にします）

僕は心の中で半泣きになりながら、彼女の後をついていった。

## 2・阿坂居 佑衣（後書き）

らばの名前は次回紹介。

分かる人は、今回笑っておいてください。

### 3・魔来子さん（前書き）

魔来子さん、登場。

魔来子さんもいいキャラクターです。

佑衣とどっちがいいって聞かれたら、  
．．．怖くて返事できません。

### 3・魔来子さん

佑衣さんの家は公園のそばだった。

公園から道を横断して、大きな塀、その玄関で彼女はインターホンを鳴らす。

「……佑衣とお客様1名、ただいま帰りました」

ゴトゴトいいながら玄関が開いた。

彼女について中にはいると、そこは公園？

いや、樹木が生い茂っている。外の公園よりも緑が深い。

石版が敷き詰められている小道を歩いていく。石の間にも緑の苔がびっしり詰まっている。

葉の間からこぼれてくる太陽の光がなんだか天上からの光の道に見える。

小鳥のさえずりも聞こえてくる。

町中とは思えないような場所を通り抜けると、そこには2階建ての一軒家が建っていた。

小さな窓。頑丈そうな白い壁。

その家の玄関には、白いブラウス、黒のロングスカート、黒い長エプロンをかけた、

茶髪の女性が立っていて深々とお辞儀をする。

「お帰りのさいませ、佑衣お嬢様」

彼女の名前は魔来子さん。佑衣さん付きのメイドだそうだ。掃除、洗濯、風呂、食事の用意、当然魔来子さんの勤め。

「食事は母屋の方に、シェフ、ソムリエ、パティシエがおりますので、私は給仕だけですわ」

魔来子さんは微笑んで訂正してくれる。

その他、佑衣さんを日常的にお世話しているのだそうだ。佑衣さんが小さい頃から、彼女の面倒をみているらしい。それこそ、オムツの取り替えとか・・・？

「そんなことは言わなくていい！」

「あら、お嬢様、恥ずかしがり屋さんですこと」

そう言えばまだ魔来子さん、年齢を聞いていなかった。

「うーん、そうだなあ、魔来子さん、30まではいつていないと思うけど・・・」

ダンッ！！

魔来子さんの足が床を強く踏んだ。

「佑衣お嬢様、このお客様、ちょっと失礼なところがございますわね」

魔来子さんの目が冷たい。佑衣さんが氷なら、魔来子さんはドライアイス並。

佑衣さんより、怖い。心の底から、恐怖が湧き上がってくる。

「ごめんなさい、25、いえ、20です。じゅ、十代と言っても通用するんじゃないかな、ははは」

「あら、いやだ。さすがに十代は無理ですけど、25ということでほほほ」

いつの間にか、脇にべつとりと冷や汗をかいていた。

食堂に通じるドアのところで立ち止まる。

ちよっとお待ちを、と言うと、魔来子さんの瞳に赤い光が当てられる。

ピツという短い音がすると、ドアが開いた。

「な、何なんですか？これ」

「この家ではセキュリティシステムが部屋毎にあります。網膜パターンを認証することでキーとしております」

「はあ、もしかして、ものすごい家なんでしょうか、こっ」

「犬小屋よ」

佑衣さんは吐き捨てるように言った。

でも、全然犬小屋なんてもんじゃなかった。

連れて行かれた食堂の中央のテーブルは長さ5mもあるような立派なもの。

しかも、佑衣さんとはくはその5mも離れての場所に座った。

テーブルには銀の洋食器が数多く並んでいる。

どれを使ったらいいのかわからない・・・

「外側から使えばいいんですよ」

そして、食事の内容もものすごく立派なものだった。

次から次に出される料理。最後に出てきたそれはとてもとても甘いお菓子。

「こ、こんなごちそうは食べたことがないです」

あつちの世界では、もっと質素で淡泊な食べ物ばかりだった。そして、横にある真つ赤な色の液体がなんだかおいしそうだ。

「ぶ、ぶふええ！なんだ、これ、お酒ですか？」

「あら、ワインはお口に合いませんでしたか？」

魔来子さんは笑って、水を持ってきてくれた。ふと見ると、そのワインを、佑衣さんはごくごく飲んでいる。

「佑衣・・さん、おいしいんですか、それ？」

「こんなもの、水とかわんないわよ」

い、いやー、全然違うと思うけどなあ。

食事が済み、後片づけも終わると、魔来子さんが僕の隣の椅子に座る。

「私はブラックコーヒー、佑衣様には甘いカフェオレ、ラバ様にはお茶でいかがですか？」

出されたのは、緑色の温かい飲み物。緑茶というんだそうだ。恐る恐る飲んでみると・・・

これはいける。村で飲んでいた飲み物と変わらない。

よし、これからは緑茶をお願いしよう。

え・・・？今、魔来子さん、僕のことをなんて言った？

「どうして、僕の名前を・・・？」

魔来子さんはあらつという顔をすると、悪戯っぽく微笑んだ。

「申し訳ございません。お嬢様の周辺は常時音声モニターさせていただいております」

「はあ？なんですか？それ」

「お嬢様の周辺の音をこちらで聞いていると言っことです。

誘拐事件に巻き込まれた場合を想定して、状況把握を行っております。

犯罪の可能性がないと判断された部分は自動的に消去されておりますが、

ラバ様とお話しになった部分は消去されておりませんので、聞くことが出来ました」

「つ、つまり、僕と彼女の話はこっちで聞かれていて、蹴飛ばされたところとか、全部・・・」

「はい、効果音入りでしたので、それはまあリアルでございましたが」

魔来子さんはニツコリ微笑む。いえ、微笑む内容ではないと・・・

「つまり、あたしにはプライベートはない！」

佑衣は空になったカフェオレのカップをドンとテーブルに置く。

「お嬢様、小さいときからずっとお話ししてきたつもりですが、お嬢様の安全を最優先と考えて、私たちは行動しております。

ですから、今日のように学校をズル休みされても、こっそり煙草をお吸いになっても何も言いませんでした。

時にはお嬢様も自分の時間を持ちたいのでしょうと・・・」

「持ちたい！普通の女の子のような時間を持ちたい！」

急に佑衣さんは立ち上がると、叫んだ。

「あたしは、寂しい！！あたしはあ・・・」

彼女の叫びは途中で切れた。

佑衣さんは崩れ落ちるようにテーブルに突っ伏した。

よく見れば、軽い寝息を立てている。

「まあ、あれほどワインをがぶ飲みすれば、こうなるかあとは思ってたのですが・・・

いくら飲み慣れているとは言っても、まだ中学生ですから」

あ、あんた、魔来子さん、思ってたのなら、止めなさいよ・・・

「ちょうど都合良くお嬢様がお休みですから、ラバ様、ちょっとお話ししましょうか」

そう言つと、魔来子さんは僕のそばに座った。

彼女の端正な横顔、でもその目は真剣だ。



### 3・魔来子さん（後書き）

参考文献：「新・凍りついた瞳」 椎名篤子 集英社刊

いえ、目標は、「楽しく、明るく、元気良く」！  
忘れるな、忘れるな。

#### 4・魔法少女（前書き）

やっと魔法少女の説明。時間かかるなあ、やっぱり。

#### 4・魔法少女

「お嬢様とお話した内容、教えていただけませんか？  
音声モニターの確認もしたいですし」

僕は佑衣さんにしたのと同様の話を魔来子さんにも話した。  
魔来子さんは時々、モニターされた時の話と比較しているようだ。  
もちろん、うそは付いてない。つく必要もない。

「なるほど、お話はだいたい分かりました。でも、お話しになって  
いないところがありますね」

え？驚く僕の顔をのぞき込む魔来子さん。

「なぜ、お嬢様に声をおかけになったのか。声をかけてどのように  
するおつもりだったのか。」

力を授けて何かしてもらおうということではありませんでしたか？」

なぜそこまでわかるんですか？

呆然としている僕の前で、魔来子さんは片眼鏡モノクルを取り出した。

それを目にかけると、空中に指を遊ばす。

と、いきなり、僕の声が空中に響いた。

『……残りの力がなくなります。』

そしたら、当分魔法は使えないし、その力を授けてやってもらうこ  
とも……』

「す、すごい！魔来子さんは大魔法使いだったんだ！」

僕は仰天した。片眼鏡は魔法道具で、ふらふらした指の動きは印を結んでいたんだ。

聞こえなかったけど、呪文も唱えていたのだろう。

でないと、精霊の力を借りて、過去から僕の声をやみがえらすなんてことができるはずがない。

僕の声聞いて、魔来子さんはほえみを浮かべる。

「これは魔法ではなく、科学でございますわ」

ぽかんとする僕の顔を見て、魔来子さんは説明してくれる。

「片眼鏡をかけることで、中央コンピュータと接続が確立します。その結果、仮想端末が片眼鏡の画面上に出現します。」

サーバには佑衣お嬢様周辺音声モニターのデータが保存されております。

仮想端末を操作することで、音声データの再生が指示できます。

パラメトリック・スピーカーは通常、私の耳にセットされており、すが、

指向性を緩めることで、ラバ様の耳にも入るようにいたしました」

はあ？なんですって？

「全然わかんないんですけど、要は魔来子さんが魔法使いなんですね。」

すごい、すごい。杖も何も使わないのにこんな魔法が使えるのは、よほどの魔法使いなんですよ」

魔来子さんは苦笑する。

「はい、ではそういうことで。でも、この魔法は、この敷地内でしか使えないんですけどね。」

片眼鏡という形式上、電波の届く範囲が狭いものですから。で、先ほどの質問にお答え願いませんか？」

魔来子さんの瞳は僕を睨んでいる。ウソは許さない、そんな雰囲気は僕に伝わってきた。

「あ、あの・・・実は、彼女に魔法少女になってもらおうと・・・考えていたのです」

僕は恐る恐る小声で言った。

「魔法少女・・・いったい、それはどのようなものなんでしょうか」

魔法少女・・・僕も実際には見たことはない。もうはるか昔の話・・・らしい。

こちら側の人間でも、特に魔法の能力が高い少女がいるという話。その娘にあつちから持つてきた魔法道具を使いこなすことが出来れば、

門をこちら側から完全に封鎖することも、

あるいはあちら側の世界に行つて、魔法力を発揮することも、悪を征伐して、世界を救済することもできるという、なんかすごい話。

あくまで伝説なんだけど。

「大変なお仕事のようなんですけど、どうしてそれを佑衣様に？」

「彼女は強そうだし、能力高そうだし・・・でも魔法能力はわからないけど・・・いいかなって・・・」

ずっと魔来子さんは身を乗り出してきた。

「それだけなんですか？」

近距離に迫った彼女の顔に僕は腰が引ける。

「はい？」

「お嬢様を選ぶわけはそれだけなんですか？」

あ・・・いや・・・なんかなあ？よくわからないけど・・・  
それだけだと思うけど・・・

「そんなに強い子じゃないんですけどね・・・」

魔来子さんが呟いた。

・・・それって、どういう意味なんですか？聞こうとしたとき、  
横で声がした。

「やだ」

佑衣さんの声に、僕は横を向く。

いつの間にか目覚めていた佑衣さんが、ふくれっ面をしていた。

「あたしがそんな力、持つてるなんて全然思っただけ、もし持  
つてたとしても、  
なんで世界の救済なんてことをしなきゃならないの？」

彼女は椅子の上であぐら座り。短いスカートから奥が見えそう。

「あたしは人助けなんてごめん。

自分のことさえ満足に出来ない女の子がいったい何が出来るっていうの？

しかも、あんたの世界のことじゃない。あたしは何も出来ない、か弱い女の子です」

か、か弱い……意味、違うと思うんですけど……

「まったく、お嬢様ったら……そうですね。ラバ様、……ないんですか？」

え？僕と佑衣さんは魔来子さんを見る。

「頑張るんでしょう？世界のために。

なら、ご褒美というか、なんかお返しがあってもいいんじゃないですか？

伝説のお話しには、そういう部分はないんですか？」

えっと……あの後、どうなったわけ……あ、そうか。

「願い事……願い事が叶ったっていう、話があります」

「ねがいごと……ですか」

「はい、どんな願い事かは分かりませんが、伝説では願い事が叶ったっていう……」

佑衣さんのつつこみがくと思った。

”そんな願い事なんて、知ったこっちゃないわ！”とか・・・でも、こなかった。

彼女はじっと考え込んでいた。

「願い事・・・・・・・・願い事が・・・・・・・・かなう・・・・・・・・」

そう呟きながら。

そんな彼女を見て、魔来子さんが微笑む。

「お嬢様、今すぐ答えを出さなくても、よろしいんじゃないですか？  
もっとじっくり考えて答えを出してはどうですか？」

「一つだけ、決めたわ」

佑衣さんが僕を見つめて、言った。

「ラバ、お前を雇うこと」

#### 4・魔法少女（後書き）

うわあ、ラバの名前の由来。書くの忘れてました。

元ネタはジャック・オッフェンバック（フランス語読み）

ドイツ語読みでオッフェンバッハもあり、らしい。

作曲家。「天国と地獄」が有名な。

ドイツ人で、名前がヤーコプ・レヴィ・エーベルスト。

のち、フランスに帰化、という人です。

で、二つくっつけて、ヤーコプ・レヴィ・オッフェンバッハ。

では正直だなあと思ったので、少し変えて、

ヤーコプ・ラバ・オッフェンバッフ。

二つの国を動いている点とか、「天国と地獄」というあたりが、ラバ君のイメージだなあ、って感じで。

## 5・契約（前書き）

第1部、ここまで。

主要キャラの紹介のつもりが、意外に長くなった？

## 5・契約

や、雇う・・・雇われちゃうんですか、僕。

「食う物もない、金も無し。どうせ寝るところも無いんでしょう。だったらいつそのこと、ここで生活する。どう？悪くない話でしょう」

確かに彼女の言うとおりだ。僕にはこっちの世界に、何のあてもない。

それにここには他にもメリットがある。

あの、”門”がすぐそばにあることだ。

何者かがこっちに来るかどうか、見張っていることができる。

それに”門”から漏れてくる、あっちの世界の力。

少しずつだけど、この力は、僕の魔法力を充填してくれている。

たっぷり貯めれば、小学生サイズじゃなくて、僕本来の大きさに戻ることもできる。

魔来子さんがポンと両手を打った。

「もし、お嬢様が魔法少女になる決心をしたとき、

ラバ様がおそばにいないと、支障が発生すると思いますから、それは良い判断ですわ」

魔来子さんはまた、あの片眼鏡を付けると、空中に印を結ぶ。

ちょっと失礼と席を外して、すぐ戻ってきた彼女の手には2枚の紙。

「こちら、契約書でございます。ここにラバ様のご署名をお願いします」

無造作に渡されたペンで、署名をした。何にも考えないで、あつ

ちの世界の本名で。

僕に続いて、佑衣さんも署名する。

「これで、雇用契約が成立でございます。

一応、私が佑衣様付きの首席のメイドでございますから、ラバ様もそのつもりで。

要は私の言うこともきいてよね、なんですけど」

ま、まあ、そりゃそうかな。

ここでの先輩なんだし、こっちの世界のことも、いろいろ教えてもらわないと困るし。

なんと言っても年長者だし。

あっちの世界でも、『長老の言うことを聞かない奴は若死にする』なんて意味のことわざもあるぐらいだ。

ゾクッ！急に背筋にふるえが走った。

「ラバ様、私、長老と呼ばれるほどの歳ではございませんが！」

ドライアイスの冷気が僕を包んでいる。

もちろん、その発生源は魔来子さんだ。

「す、すみません。僕、また呟いていたんですね。ごめんなさい」

今度やったら、どうしてあげようかしら、と言わんばかりの目。

平謝りで、ようやくその視線から僕を解放してくれた。

「では、お嬢様、今日の学校の宿題がメールで届いておりますので、自習お願いできますか？」

私は、ラバ様にこの家の説明をしていますので」

僕たち三人は食堂を出る。

そのまま、前にある階段を上っていく佑衣さんに、魔来子さんが声をかける。

「お嬢様、ちゃんと勉強くださいな」

「はいはい、音声モニター、赤外線センサー、圧力センサー、二酸化炭素チェック、などで

居眠りしていても、わかりますわよ、ですね。もう、何回も聴かされてます」

魔来子さんはニツコリ微笑む。

「ご理解いただけていて嬉しいですわ。では頑張ってください」

僕は階段を上っていく佑衣さんをぼーっと見ていた。

白い太股、短いスカートからチラチラ見える白い下着・・・

急に踵を返した佑衣さんが、ダダダッと階段を駆け下りてくる。

その勢いで、僕のお腹に彼女の右膝が・・・ゲ、ゲエッ！！

お、お昼の、おいしい料理が、苦い、酸っぱい液になって、駆け上って・・・必死で逆流を止める。

「ラバ！あんた、今、いやらしい目であたしを見てたでしょ！

あんたはね、正直に顔にでるんだから、わかるのよ！！

いい、ご主人様に対して、今度そう言う目をしたら半殺しだからね！覚えておきなさいよ、この南京虫！！」

も、もう既に半殺し状態ですけど・・・

ダニから南京虫に昇格しましたね、ボク・・・なんて、冗談言

える余裕、ないです……

「お嬢様のこと、許してくださいね。ちょっとワガママなんですけど、慣れれば可愛いって思えてきますから」

はあ……慣れる前に、身体が壊れないことを祈ってます。

「ですから、契約書にも一筆、『ご主人様の悪戯には苦情を申し立てない』を加えさせていただいております」

「え……そんなこと、何にも聞いてないです！」

「あら、そうでしたか？ 言い忘れましたかしら、ほほほほ」

僕は青ざめる。この調子だと、あの契約書には、まだまだいろんな事が書かれていそうだ。

しまった。署名をする前にすっかり中身を読むんだった。

ま、読んだところで、魔来子さんのことだ。丸め込まれるか、脅かされるかしているような気もするけど。

そう、ため息をつく僕を、魔来子さんはドアの前に立たせる。

ピツと赤い光が僕の目を射抜く。

続いて反対側の目も同様に。

「これでラバ様の網膜パターンが登録されましたので、セキュリティを通過できるようになります。

お嬢様や私は全権レベルですけど、ラバ様はとりあえずノーマルレベルで」

まあ、ノーマルレベルでも基本的な場所には入れるらしい。

1階の食堂、給仕室、浴室、隣の洗濯室、応接室。

「地下にはセキュリティレベルの高いコンピュータールームやサーバーセクションがありますが、

まず立ち入ることはありませんから。では2階をご案内します」

階段を昇る。

正面は魔来子さんの部屋。その隣が佑衣さんの部屋。  
反対側が僕の部屋になるそうだ。

ちよつと覗いてみる。

ベッドと机。これだけ。

「空き部屋でしたから。これから買い出しに言って、衣装や備品を用意しますわ」

カーテンを開けてみる。意外に小さい窓。

「窓ガラスは鉄線入りで放射線遮蔽用です。実は壁にも鉛及び鉄板が入れてございます。

素子への放射線障害を防止するためです。

壁も厚み50cmのコンクリートですから、簡単には破壊できませんけどね」

はあ、嚴重なんですね……って、意味は半分もわかんないけど。

窓の外を眺める。あの公園だ……近くの子供達だろう、お母さんと一緒に遊んでいる様子が見える。

「そう言えば、一つ聞きたいことがあるんですけど……佑衣さんのご両親は？」

## 5・契約（後書き）

終わらなかった。もう1話続きます。

魔来子まきこさんの由来・・・必要ないよね？（笑）  
多那香たなか 魔来子まきこ。

そのまんまやん。（笑）

まあ、腕力、知力、押し、全て強そうなイメージから。  
って、本人がそうかどうかは知りません。

## 6・両親（前書き）

これでホントに1章完了。ご苦労様でした。

一番楽しかったのは、セキュリティシステム考えてた時。（笑）  
端折ったけど、地下の非常用発電機とか燃料、酸素発生器、地下水  
貯水システム、免震減震装置。衛星通信システムとかもあるよ（笑）

## 6・両親

「ご両親でございますか？……  
もちろんご活躍なされておりますが、こちらにはほとんど不在でございます」

お父さんは世界を股にする、大経営者。簡単に言うと、大金持ち。  
お母さんは国際政治家。

佑衣さんが生まれた直後から、お母さんも世界を動き回っているそう  
だ。

おかげで佑衣さんはビデオメールや写真でしか、二人を見たことが  
ないらしい。

「親子なのに、会ったことがない……んですか？」

「はい、ほとんどないと思います。小さい頃から付いている私に、  
そのような記憶がないのですから」

魔来子さんがこの家に潜り込んだ（原文のママ）のは、佑衣さん  
がまだ小さい頃。

身寄りがなかった魔来子さんには、住み込みのメイドというのは魅  
力的だったらしい。

そして、ちょっと前に生まれた佑衣さんの面倒を見る役になったの  
だそうだ。

子守りなんて簡単、簡単と嘗めていた彼女は、たちまち後悔するこ  
とになったそうだ。

佑衣さんは夜泣きが酷く、また極端に抱っこをせがむ赤ちゃんだ  
っ  
たらしい。

寝入ったと思って抱っこから下ろそうとすると、すぐに起きて泣き

わめかれたとか。

「内緒ですが、お漏らしも酷うございましたよ。何度と無く、メイド服に被害を被りました」

それでも彼女は長年、根気よく佑衣さんの面倒を見た。

佑衣さんも魔来子さんのことを、「お母さん」と呼ぶようにさえなつたらしい。

「でも、いつかは疑問に思いますよね。

私が本当のお母さんではないことや、本当の両親はちゃんというのに、どうして会えないかってこと・・・」

小さい頃はいつか会える、いい子にしていれば、きっといつか会いに来てくれる、

そう思つて、佑衣さんは一生懸命にいい子になっていたらしい。

勉強でも運動でも一番。

積極的に学校行事に参加して、クラス委員長も務めるような優等生。そしてビデオレターで、それを自慢げに報告して、「今度は、いつ会えますか？」と付け加えていたそうだ。

でも待たされ過ぎた希望は怒りに変化する。

ある日、佑衣さんは激しい癇癢を起こした。

両親が送ってきた誕生日プレゼントを破壊し、ゴミ箱に投げ捨てた。おひな様の人形も、クリスマスのぬいぐるみも、玩具も、泣きながら、全部たたき壊したそうだ。

それは彼女なりの不満の吐き方。SOS信号。

そして、それでも両親と会えなかった彼女は、絶望に陥った。

「もう学校にも行かないで、ずーっとぼんやりしていられました。

何もする気がおきないと言って。

そんな、小学生が言う言葉ではありませんでしたわ。

このまま自殺するんじゃないかって、毎日見張ってありました」

私立女学校だったのも幸いし、出席日数はごまかしが利いたそう  
だ。

優等生だった過去とお金の力も借りて、エスカレーター式に中学生  
になった佑衣さんは、

すっかり無関心、そしてやっかいごとには拳で答えるようになって  
いたらしい。

「私のやり方がまずかったのだとよく悩みました。

確かに小さい頃からサバイバル術や、格闘技、戦闘技術など教えて  
いたのも事実でございますから」

そ、それかあ。佑衣さんの動きがおそろしく素早いのも、

蹴りやパンチが急所を捕らえるのも、全部魔来子さんのせいなのか  
あ！

「煙草は教えておりません。飲酒は・・・私も少々、嗜みますので、  
その影響かも知れません」

僕は窓の外を見た。

夕方が近くなつて、少し赤みがかかった景色に変わってきていた。

あの公園では、両親に手をつながれた子供がブランコのように遊ん  
でいる。

きつと目を輝かして、じゃれているのだろう。

悪戯をして、叱られても、嬉しそうな笑顔を浮かべているのだろう。  
佑衣さんにはそんな記憶もない。

あるのは魔来子さんと二人だけの記憶。

あつちの世界、”村”のことを思い出した。

あつちだって、もちろん、病気や怪我で亡くなる人がいる。戦いだってケンカだってある。

でも、子供だけのところは、村全体の子供として、みんなで面倒を見る。

その子は決してひとりぼっちになんてならない。

村中が家族で、仲間で、友達なんだ。

「素敵な村だと思いますわ」

・・・村だった、かもしれません。

「佑衣さんには、仲間とか、友達とかはいないんですか」

「あまり、そのような話は最近は聞きません。中学生になってからは、まったく聞いておりません。

友達とかいれば、もう少し違うのかなあとも思いますけど」

「中学校ではどんな様子なんでしょうか」

「さあ、音声モニターは学校内では作動しないようにしております。

他の子のプライバシー保護という理由です。

お嬢様もまったく学校のことはお話しにならないので・・・」

ぱつと魔来子さんは表情を輝かせた。

「そうだ、ラバ様、明日、学校へ佑衣様と一緒に行って、様子を見ていただけませんか？」

私では目立ちすぎますし、なにより佑衣様が警戒しますので。  
ラバ様ならではの良い方法、思いつきましたから」

な、なんか悪い予感がする。

でも、魔来子さんには逆らえないんでしょうね。きっと、契約書に  
書いてあるんでしょうね。とほほ。

急にルンルンし始めた魔来子さんを見て、僕はため息をついた。

そしてもう一つ、夕食の後、部屋に入った僕は、そこにおいてあ  
る小学生サイズの服にため息をついた。

「早く大きくなりたい……………」

## 6・両親（後書き）

次から第2章に入ります。

書きたいこと、書いてる状態ですみません。

楽しんで書いてますので、一生懸命読んでください。（笑

## 7・悪夢（前書き）

前の話が結構シリアスになってしまいましたので、反省。  
今回はドタバタギャグテイストにチャレンジ。  
できるかな？

## 7・悪夢

村から外れた森の中。僕は草むらの陰に隠れていた。その向こうには追っ手の影。

声高に叫ぶ声。僕を捜しているのか。

「3騎、・・・いや、5騎」

ここで追っ手をまけば、村に帰ることが出来るかも知れない。そうすれば、みんなの安否が確かめられる。と、遠くで吠え声がした。

「あれは・・・・・・ヤバい！軍用犬だ！」

フェルゼンシュタイン伯爵の犬ども。

人間を掴まえ、喉頸をかみ切るという噂。

僕は必死で走り出す。気が付いたのか、犬どもの声が一段と高くなつた。

倒れた大木をかくぐり、藪をかき分ける。

でも、犬どもの声がどんどん大きくなってくる。

くそ、逃げ切れないのか！？

でも、この茂みの向こうに、“門”があるはず。

そこまでもう少しだ。そこまで行けば、あっちの世界に逃げられる・  
・・・

「きゃあー！」

そこに立っていたのは、長い黒髪の若い女性。

大きな瞳をめいっばい開いて、僕を見つめている。

「ゆ、佑衣さん！」

どうして佑衣さんがここに？

しかも、何で白い下着姿なんだ！？

「あ、あたし、ラバ君のことが心配で……」

はあ？今、彼女はなんて言っただ？僕のことが心配？  
いや、とにかく、今は逃げなきゃ！

後ろの犬の吠え声はどんどん大きくなっている。

その後ろ、追っ手達の声も聞こえる。

僕は彼女の手を取ると、走り出した。

ダメだ、犬の方が速い！これじゃあ、二人ともおしまいだ。

「佑衣さん、これ、もって逃げて！あっちに門がある！」

僕は彼女に魔法道具の入った袋を投げる。

「僕が奴らを引き寄せる。その隙に門から逃げて！」

「ラバ、だめ！あなたを置いていけない！」

彼女を置き去りにして、僕は門とは逆方向に走った。

あいつらが僕を見つけやすいように出来るだけ音を立てて、  
いざとなったら、声だつてあげてやる！

だから、佑衣さん、できるだけ逃げて。

ガサガサッという音がした。

いきなりズボンの裾が何かに掴まえられた。  
僕はつんのめるように倒れる。  
獣の体臭が僕に覆い被さってくる。

「こいつら、くたばれ！」

脚にかみついた奴を蹴飛ばし、かぶさってきた奴ははね飛ばす。  
でも、立ち上がったところをさらに別の奴に襲われた。  
そいつが僕ののど元に食らいついてくる。  
必死になってそいつの牙からのがれようとする。

「ラバ・・・ラバ！」

遠くで佑衣さんの声。

（畜生！・・・佑衣さん、逃げて、逃げてくれ！！）

喉に強烈な痛みが走った！そして、目の前が暗くなる・・・

僕は目を覚ました。

ここは・・・こつちの世界。あの家の、僕の部屋。  
ほとんど荷物のない、がらんとした部屋だけど、誰にも追いかけられることのない、安全な部屋。

「ゆめ・・・夢だったのか。でも、なんていう夢なんだ・・・」

全身が汗びっしょりになっていた。心臓が激しく鼓動している。

「こっちに逃げてきたときの恐怖の記憶なんだ……」

いや、少しずつ違う。まず、フェルゼンシュタインの犬の奴らには追いかけれなかった。

兵士どもだけだったから、逃げ切ることが出来た。

それに……佑衣さんがいるはずがない。

逃げきった後で、こっちの世界に来て出会っているのだから。

「しかも……下着姿、ってのは、どういことなんだ？」

思い出すと……リアルな記憶。肌にピッタリと張り付いた薄い白の下着。

……え？ということは、僕は見ている？なぜだ？

なんか、記憶が混乱してるぞ。

夢の中で犬にかまれた首に手を当てる。痛みが走る！夢じゃない！

僕はそつと首を触った。包帯の感触。首に怪我をしたのは事実のようだ。

でも、犬どもじゃない。あいつらなら、確実に相手の喉をかみ切る！こんな、包帯なんかで済むはずがない。

これは、首の痛みから、夢で犬を登場させたと思った方がいいようだ。

そうだ、昨日、こっちの世界へ逃げてきて、佑衣さんと魔来子さんに会って、

そつ、契約をして、ここに住み込むことになって、眠ったんだ。

じゃ、今朝から思い出そう。今朝は、目覚めたら、目の前に魔来子さんが立っていたんだ。

でも、その魔来子さんは半分透明で、僕は腰が抜けるほど驚いたん

だっけ………。

？

？

？

「ラバ様。これは立体映像です。ホログラム

ラバ様が目を覚ましましたら、再生するようにセットしております。私と佑衣様は訓練室で早朝訓練を行っております。お着替えの後、お越し下さい」

そう告げると、魔来子さんの姿は消えた。

すげー、やっぱり本物の魔法使いは違うなあ。

そう思いながら、僕は魔来子さんが用意してくれた服を着た。黒いズボン、白いシャツに黒の蝶ネクタイ。

これが僕の制服だそうだ。

シンプルだけど動きやすい。悪くない。

僕は魔来子さんの言う、訓練室へ降りていった。

## 7・悪夢（後書き）

意外にラバ君の夢が格好良くて、長話。

## 8・お人形

訓練室は板の間の部屋で、雑多にいろんな物が置いてある。その中央で、佑衣さんは制服、魔来子さんはメイド姿で立っていた。いや、立っているじゃなくて、戦っていた。

佑衣さんの右足の蹴りが飛ぶ。

軽くなされる、と反対の脚で、後ろ回し蹴り。

ギリギリのところ、魔来子さんの顔をかすめる。

すこしだけ体勢を崩した魔来子さんの足下に、佑衣さんが脚払い。魔来子さんは軽いステップで、それをかわしていく。

佑衣さんが正拳を打ち出す。

難なくかわす魔来子さん。

今度は突き出した拳を、そのまま横に。

甲の側で、ヒットを狙う。

かろうじてかわすものの、少し頬をかすっている。

魔来子さんの顔に笑みが浮かんだ。

佑衣さんの方は真剣そのものだ。

踏み込んでくる佑衣さん。

魔来子さんは少しだけバックステップを踏むと、佑衣さんの伸びきった右手を引く。

ちよっと前にバランスを崩す、そこへ魔来子さんが低い姿勢で踏み込む。

両手の掌底で、佑衣さんの腹部を打つ。

「う、ぐ！」

たまらず崩れ落ちた佑衣さんに声をかける。

「お嬢様、上達されましたわね。あそこで裏拳打ちがくるとは思っ  
ていませんでした」

「だめ、魔来子さんの掌底、相変わらず破壊力抜群ね」

そう言いながら、二人は僕に気が付くと、近づいてきた。  
激しい運動で、二人とも汗びっしょりだ。

「お嬢様、くれぐれも、頭は冷静に。くれぐれも暴走させないよう  
に」

「はい、わかっております」

そう言いながら佑衣さんはタオルを頭からかぶっている。

「本当に、わかっておられるんだか……」

魔来子さんは微笑む。

二人の会話に僕が口を挟む。

「朝から、こんな訓練をしてるんですか」

「いつ、いかなる条件でも戦闘能力を維持する必要がありますので」

でも、どうして、二人とも、制服なんですか？

「たしかに、柔道着とか体操着とかありますが、それで日常生活

を送られる方、みえますかしら」

い、いや、柔道着で生活してたら、変な人ですね。

「お嬢様で言えば、制服、私ですとこのメイド服が一番よく着る服装です。

つまり、戦闘の可能性が一番高い姿での、訓練、というだけのことですが」

はあ、まあ確かにそのとおりなんでしょうけど、

スカートの短い佑衣さんはいざ知らず、ロングスカートの魔来子さんは、動きにくいんでしょうね。

「あたしへのハンディキャップということよ」

佑衣さんは汗を拭きながら言う。

汗を吸った白い制服は、すっかり透けていて、彼女の下着を透かしている。

その姿は、色っぽくて、美しい。僕はすっかり見とれていた。いきなり胸ぐらを捕まれる。

「また、スケベモード全開であたしを見てるだろ？半殺しだって、前に言わなかったっけ？覚えが悪い？」

お、覚えてますよ。頭が忘れたって、ストマック胃が覚えています。

膝を見るたびに、胃が痙攣するんですから……

魔来子さんが割って入ってくれた。

「お嬢様、シャワーとお着替えを。朝食の用意もすぐにできますから」

「はい・・・」

佑衣さんは僕を放すと、訓練室を出ていった。

「ふう・・・お嬢様もまあ・・・」

魔来子さんはそう呟くと、僕に向かって、

「改めまして、おはようございます。昨日の話、覚えてらっしゃいますか？」

あー、佑衣さんの学校での様子を見てきて欲しい、っていうのでしたね。

「はい、それでございますが、ラバ様は変身できますよね？」

あー、まあたいていの物になら多分・・・

「はい」

「大体、これぐらいの大きさになっていただいて、お嬢様に持っていたくとして。」

それで一日、お嬢様の様子を見てきていただきたいのですが」

そう言いながら、魔来子さんが示したのは、親指と人差し指を一杯に広げた長さ。

「お人形と言うことにすれば、お嬢様もそんなに警戒しないかと・・・」

「その大きさの人形って事ですか……」

「人形ですから、しゃべるとばれてしまいます。」

「そうそう、言葉を発したら、魔法が解ける、ってのはどうですか？」

「な、なんか、楽しそうにみえるんですけど。魔来子さん、なんかたくらんでませんか？」

「とりあえず、ちょっとやってみますよ」

僕は呪文を唱える。魔法波長が高まり、黄色い光が全身を包むと・

目の前の巨大な魔来子さんがしゃがみ込んできて、小人サイズの僕を手に取った。

「はい、私のイメージどおりの出来上がりですわ。これに、持ちやすいように……」

そう言いながら、金属製の輪をカチツと僕の首に嵌める。その輪には長い紐がついている。

「もし、この状態で元のサイズに戻るようなことがあれば、どうなるのか、わかりますよねえ？」

（え？……元の大きさだと、その輪は僕の首に食い込んできて……）

え、ええ？えええっ！？し、死んじゃいますよ！？）

思わず、声を出しそうになって、慌てて黙り込む。

「絶対に声を出さないように一生懸命に頑張ってくださいね。」

そうそう、本体がラバ様だってわかったら、お嬢様のお怒りも大変でしょうから、ばれないようにお願いします。ではラバ様をお嬢様にお渡ししますから」

（ちよっ、ちよっと、魔来子さん！あんだ、やっぱり怖い人だ！  
――！！（泣））

## 9・「キモカワイい」(前書き)

なんか、ラバ虐めの話になってきたゾ？大丈夫か？作者。

## 9・「キモカワイい」

僕は佑衣さんのカバンにぶら下がって、学校へ行った。

佑衣さんは同じ制服の子たちと挨拶したり、肯いたりしてる。

（なんだ、とことん無視ってわけでもないなあ）

よかった。安心できる材料が一つはあった。

人形になった僕を見た佑衣さんの反応は、

「なにこれ、きもい」

魔来子さんは苦笑してる。

「妙にリアルって言うか、変に似てるのが気持ち悪い。ほんとにこんなの、学校に持って行かなきゃダメなの？」

佑衣さんの指先が僕の身体を撫で回す。

（ひ、ひいい、く、くすぐりたい！）

必死で声をこらえる。

「盗聴マイクとか無線機とか仕込んであると思ったけど、そんな感触ないわねえ。ほんとにただの人形みたい」

「そう言ったでしょう？お嬢様、私が一晩で作った力作です。是非、お持ち下さい」

「魔来子さんがそう言うのなら・・・わかったわ」

魔来子さんは微笑む。

その微笑みの半分は、僕に向けられたものようだった。

授業態度は可か不可かって、とこかな？

授業の大半、彼女はぼーっと窓の外を見ていた。

でも、当てられた時は、さっと答えを出していた。しかもほとんど正解のようだった。

先生も分かっているのだろう、あまり彼女のことは気にしていないみたいだった。

だから、余計に授業には力入らないのかなあ。  
要するに、「なんで、こんな授業受けなきゃなんないの？」みたいな態度。

学校に来ていない間にたまった答案用紙も返してもらっていたけど、ほとんど満点のようだった。

それを見ても、ニコリともしない佑衣さんというのは……。

「佑衣、学校出てきたの、ひさしぶりじゃない？」

一人の生徒が声をかけてきた。

そう言えば、休み時間でも佑衣さんは外を見てた。

そんな態度からか、おしゃべりする友達も見えていなかったけど、

この子はそんな佑衣さんの壁をスルーしてきた。

「そう、あたし、病弱だから、いつも病気なの」

（そ、そうなんですか？佑衣さん）

そう思って、彼女の顔を見ると、少し微笑んでいる。

彼女なりのうち解けた冗談らしい。

案の定、言われた友達は笑い転げている。

「やだ、佑衣ったら。そんなわけないのに。どっかの公園にフけてモク吸ってたんでしょ」

（よ、よく知ってる。結構仲のいい友達なんだ）  
言われた佑衣さんはただ、微笑んでいるだけ。

「佑衣、その人形、なに？」

その子が僕を見つけたようだ。

「うん、うちのメイドさん手作り人形。  
新しく来た召使いがモデルなんだけど、妙に似てて気持ち悪いの、見る？」

佑衣さんがその子の手に僕を渡す。

「うわあ、ホント、キモイけど、変に可愛いところもあるし、キモ力  
ワいっての？」

その子の手が僕を引っ張り回す。  
そ、そんなに引っ張ると、千切れちゃう！

「可愛いなあ？そう思えないけどね。でも世界にこれ1個だけと思  
うと、ちよっと貴重品かな、なんてね」

「ね、佑衣、あたしの人形と交換しない？携帯につけるやつ。  
あたしのは市販品で、そんな手作りの価値なんか無いけど、仲良し  
の記念にはなるよね。どう？」

（え・・・僕、交換されちゃうの？ちょっと待ってよ）  
佑衣さんは思案顔。

「うん・・・・・・・・いいよ」

（ええ？ちょっと、作戦が違う！魔来子さん、どうしょおー！？）

「あ・・・・・・・・やっぱり、止めとく」

そう言っていると、佑衣さんは僕を取り返してくれた。

（よかった・・・・・・・・僕の悲鳴がわかったんだろうか？）

「せっかく、うちのメイドさんが一生懸命作つたのを黙って人にあげちゃうってのも、  
すつごく失礼な気がするから、彼女の了解を得てからならね。ごめんね」

佑衣さんの説明に友達も肯いてくれた。

佑衣さんは取り返した僕を、掌の中に置いていた。  
そつと両手を開くと、佑衣さんは僕を見つめていた。じつと。  
彼女の真剣なまなざしに、なんだかドキドキしてくる。

「可愛いかなあ・・・・・・・・絶対にキモカワいいだね・・・・・・・・  
ちよつとは可愛いけどさ。」

本物も、もうちよつと格好良かったらいいのにね・・・・・・・・」

佑衣さんは微笑みながら呟く。

（それって・・・・・・・・どういうことなんでしょうか？佑衣さん）  
声に出して聞くことは出来なかった。

そして、それからもう一つの苦しみが僕に加わった。  
お腹が痛い。

原因も分かつてる。下腹部の排出要求が高まってきた。  
おしっ。したい！

朝からしてないんだ。我慢にも限界がある。  
意識すると尿意が酷くなるので、極力気を逸らそうとするけれど、  
それにも限度がある。

（佑衣さんがどっかにいって、その隙に輪っかを外してトイレに駆け込む・・・）

そんな甘い目論見もアツサリかわされる。  
佑衣さんは僕を彼女の左手に結わえてしまった。

取られると思ったわけでもないだろうに、左手の虜になった僕には、  
どうしようもない。

（ここで漏らしたら、人形が暖かい液体を出したら、いくらなんでも変だって気が付くだろう。  
いや、問答無用で彼女のナイフがきらめくような気がする。そうになったら、僕の首が・・・）

（早く帰りましょう！）

僕は念を彼女に強く送る。

その甲斐あってか、ようやく下校時間になったとき、僕がホッと一息ついたとき、

「ちよつとつきあつてよ」

## 10・チカラ（前書き）

佑衣さん、悪くないんだけど、だから友達いないんだよね、って話。

力は正義なのかもしれないけど、使い方が悪いだけなんだろうかと。それとも力そのものが悪いんだろうか。

・・・たぶん、永遠に答えはなし。

## 10・チカラ

佑衣さんの机を取り囲んでいるのは、女生徒3人。  
いかにもいじめっ子風なのはお約束か？

「いつもお休みだから、なかなか捕まらないしね」

「たまに来て、さっさと逃げちゃうし」

佑衣さんは相手にせず、って態度。

「だって、お話ししたくないもん」

「うっさいな！」

バンと机をたたく。

その音で、周りの生徒が驚いてこっちを見てる。

「このまま、来てよ」

相手の声に佑衣さんは立ち上がる。

「佑衣、先生、呼ぼうか？」

そう小声で言うのは、さっきの女生徒。

「いい、あたしなりの解決法で行くから」

そう佑衣さんは言い切る。

周りの生徒達が見つめる中、佑衣さんは教室を出た。

「気に入らないんだよ！」

「あんた達の気に入るかどうかなんて、知ったこっちゃないわ」  
相手の熱い口調に対して、佑衣さんは冷静。

「先生のお気に入りだっという気になるんじゃないわ！」

「あんたの欲求不満のはけ口にするんじゃない」

「あたしたちのタバコ、チクったのはあんただろ！」

「吸わなきゃいいじゃない」

かみ合わない口げんかが続いている。

体育館の裏。

まあ、”村”にもいたけど、こういうのってどうして、徒党を組むんだろう？

一人じゃ弱いから、だと思ってただけだなあ。こっちでも一緒かあ。

レベルは低いけど、悪意のこもった言葉は心には刃物。

これで魔力を込めていたら、相手に本当のダメージが残る。

（魔力がなくなったって、言霊はきつついからなあ・・・）

僕の心配をよそに、佑衣さんは相手の攻撃をひよいひよいかわして、ダメージを食らわないようだ。

でも、下手な鉄砲でもたくさん打っていれば、少しぐらいは当たる。

佑衣さんの心にも少しずつダメージが残っていく。

その証拠に、僕を握りしめている左手が、だんだんと汗ばんでいく。

佑衣さんのダメージは、親のことを言われたとき、魔来子さんのことを言われたとき、

そして、友達のことを言われたとき。

さすがの彼女もだんだんと冷静さを失ってくる。

「もういいかげんにしてよ。帰る」

「まだ用が済んでない。

あんたみたいなお嬢様は、ちょっと傷つけてやれば、すぐ泣いて、謝るようになるのさ。覚悟しなよ！」

そう言つと、取り出したのはナイフ。

（止めるよ、お前ら、ナイフは止める！）

心で叫ぶしか、僕には方法がない………トイレも間に合わなくなるじゃないか！

いや、トイレはいいけど、違う、漏れそうなのはよくないけど、僕は佑衣さんの戦闘能力を身をもって知っている。

こいつらの身のこなしを見ると、絶対にかないっこない。そんな奴らが、凶器なんか使ったら、どういう反撃を食らうか、わかんないぞ！

お前ら自身のためだ、ナイフは捨てる！そう叫びたかったんだ。

勝負はあっさりついた。

僕の予測どおり、本気の佑衣さんにはかなうはずはなかった。

一人ははね飛ばされて目を回していた。

もう一人は、腹に膝を食らって、胃の内容を大地に戻していた。そして最後の一人は、手首をねじり上げられて、持っていたナイフを簡単に奪われていた。

「どお、ナイフを突きつけられる気分は？」  
いいはずがない。

佑衣さんは左手で相手の頭を押さえつけて、ナイフを相手の目の前、数センチというところに突き付けている。  
相手の視界には、ナイフしか見えないだろう。

「やめて、やめてえ！」

「下手に動くと、眼球が傷ついて、失明するわよ」

佑衣さんの冷静な声に、かえって相手は恐怖に駆られたようだ。

「わかったから、なんでも聞くから、だから助けて！」  
涙と冷や汗を流している。

「もうあたしにちよっかい出さない、あたしの周りにも出てこない、友達にも手を出さない、

もしでしたら・・・」

佑衣さんの右手がゆっくりと動いた。

「ひ、ヒイ！」

真ん丸に開かれた、目のほんの数ミリ手前で切っ先は止まった。  
佑衣さんが左手を離すと、相手はぺたんと地面に座り込んだ。  
地面にはじわりと液体が広がっていく。恐怖のあまり、漏らしてしまっただろう。

佑衣さんは持っていたナイフを投げ捨てる。

「うちのメイドさんが教えてくれたんだよね。  
二度とちよっかい出させなくする一番いい方法は、相手に恐怖心を  
植え付けることだって」

鞆を拾い上げると、立ち去る。  
騒ぎを聞きつけたのだろう、何人かの女生徒が遠巻きで見っていた。

その中には、昼間、佑衣さんとしやべっていた、あの女生徒もいた。しかし、佑衣さんが近づくと、彼女は数歩、後ろに下がった。瞳にあるのは、恐怖の色。

それを見ると、佑衣さんは何も言わず、足早で離れた。

誰にも顔を見られないように、少し伏せて、前髪で隠しながら。でも、左手の僕のアングルからは丸見え。

「う・・・・・・・・うく・・・・・・・・」

小さな嗚咽を漏らしながら、佑衣さんは小走りしていた。

僕を持った左手で、時折、目をこすりながら。

僕にも彼女の温かい液体がふりかかっていた。

## 11・人形昇天（前書き）

なんか、おもしろいの多い章になってしまいました。  
お食事中の方、申し訳ありません。

って、そんな奴、いねーよ！

## 11・人形昇天

「ねえ、ラバ、やっぱりあたしって変だよな」

ここは家。部屋に帰った佑衣さんは着替えの最中。机の上に置かれた僕に話しかけている。

小さくなった僕を人形だと信じ切っている。

で、でもね、佑衣さん、もう、僕は限界。

下腹部の痛みは限界。妙なプライドが最後の防波堤になっているだけ。

佑衣さんが目を離したら、何とかして、トイレに行きたい。

もう首のことなんかどうでもいい。とにかくトイレ。

でも、どういう訳か、佑衣さんは僕を離さない。

今だって、僕を正面から見つめながら囁いてくる。

「自分と友達を守りたいだけなのに、結局、その友達まで怖がらせてるなんて、あたし、何やってるんだろうね。だから、一人になっちゃうのかなあ。あたしって、何やっても駄目な子だよな・・・」

白い下着姿の佑衣さん。

くりつとした大きな瞳。愛らしい唇。可愛いな・・・

僕に余裕があったら、いつまでもこうして見ていたい、そう思った。でも、もう、ダメだ。イタイ・・・

「なに、これ？」

佑衣さんが僕を手取る。

ごめん、もう限界です・・・

じわっと暖かいモノが下半身を濡らしてる。

佑衣さんの目に不審の影。

「あんた……人形じゃなくて、もしかしてホンモノ？」  
佑衣さんの目がきつくなった。

「魔来子さん！」

佑衣さんの声に呼応するように、魔来子さんが現れる。  
といつても、例の立体映像ってやつだ。半透明に光ってる。

「はい、お嬢様」

「ラバはどこよ？」

急な質問に面食らったようだ。取り繕った笑顔を浮かべる。

「え、ええつとお出かけかと思いますが……」

「すぐに来て、来なさい！」

「は、はい、お嬢様」

魔来子さんの映像が消える。

ああ、これがガクなんだ。ホントの魔法なら、あそこからスッと現れるのに……

パタパタつと音がして、魔来子さんが飛び込んできた。

「この人形、これ、何よ！」

「は、わ、私が作りました……」

「汗かいたり、おしっこ漏らしたりするように作つたの!？」

「は、はあ？」

佑衣さんの質問に魔来子さんも面食らっている。

「まさか、こいつ、本物のラバじゃないよね？」

「い、いえ、そのようなことは……」

もう、魔来子さんもしどろもどろ。

ぼくはもう佑衣さんのなすがまま。

「じゃあ、首引っこ抜いたって、いいわよね！」

佑衣さんがそう言い放って、僕の首に手をかけたのと、

魔来子さんがその手元に飛び込んだきたのと、

僕が悲鳴を上げたのが、同時だったと思う。

そして、その直後、三人のど真ん中で魔法が解けた。

強烈な首の痛みでぼくは記憶がふっとんでいった……

そうか、首の傷はそのときの……

ドアにノックがあって、魔来子さんが入ってきた。

「お目覚めになられたのですね。よろしかったですわ」

手に持ってきたお茶とお菓子の用意を手早くおこなう。

「あの後、覚えがないでしょうけど、大変でしたのよ」

普通サイズに戻った僕は、佑衣さんにのしかかるように倒れ込んだそうだ。

もう、その時には首の輪っかは吹っ飛んでいたのだけれど、瞬間的に首を締め付けられた僕は、気を失っていたらしい。

のしかかられた佑衣さんは、僕をはねのけようともがいていたけど、

すぐに自分の身体を濡らす生暖かい液体に気がついた。

「や、やだ、ラバ、い、いや、いやああー！ー！」

取り乱した彼女の悲鳴は最後には絶叫になっていたそうだった。

魔来子さんは気を失っている僕をシャワーできれいにし、部屋に担ぎ込み、傷の手当てをしてくれたそうだった。

「お気に入りだったのに、この下着、気に入ってたのに・・・」

そのあいだ、放心状態の佑衣さんはそうつぶやいて座り込んでいたそうだった。

その佑衣さんをお風呂で必死にきれいにしたのだそうだった。

「もちろん、下着は全部処分になってしまいましたわ。

こんなことになった下着なんか、二度と見たくないとおっしゃいますので」

どうしてやろう、ラバの野郎、どうしてやろう、

佑衣さんはそう言っていたそうだった。

「お嬢様にはその後で、たっぷり謝っておきました。もう二度とこのようなことはいたしません。

ラバ様にもよく言い聞かせておきます。お嬢様のプライベートをのぞき見るようなことはさせません、と」

あ、あれ・・・？

なんか、僕が首謀者のようになっていませんか？

そ、そんな、それだと次、佑衣さんに会ったとき、僕は半殺し、いや地獄を見ることになるんじゃないですか？

「私、考えました」

な、何か、いい対策あるんですか？

「今度やるときは、是非おむつを着けていただければ、今回のような事態にはならず・・・」

「絶対にやるもんかー!!」

せつかくの魔法の力をこんなことに二度と使わない！

こんな事のためにこっちの世界に来たんじゃない！

・・・佑衣さんの下着姿はちょっとうれしかったけど。

できることなら、もっとしっかり見ておきたかったな・・・

## 11・人形昇天（後書き）

えー、第2章の学園編、これにて  
有り難うございました。

引き続きまして、第3章「魔法力」をお送りいたします。  
なにとぞ、引き続いてのご愛顧を。

12・「あつちの世界」(前書き)

ああ、笑いが入ってない。  
マジな話で終わりそうだ。

## 12・「あっちの世界」

その日の夕食の後。僕たちは紅茶を嗜んでいた。

僕にはミルク、佑衣さんはブレンダー入り。魔来子さんにはレモンのティー。

紅茶の甘い香りが食堂に満ちて、ゆったりとしたひととき。

佑衣さんは昼間の出来事をまだ怒っているようで、あまり僕の方を見ない。

時折目が合えば、フツと横を向いて口を尖らせている。

「さて、ラバ様、これからお話しを伺いたいのですが。あちらの世界のことです。

そもそも、ラバ様はどのような理由でこちらの世界にくることになったのか、

あちらに帰ってどうなさりたいのか、そろそろ教えていただきたいのですが。

仮にお嬢様が魔法少女として、あちらの世界に行くとして、いったいどのような世界なのか、

事前に知識を得とつございます」

魔来子さんのいうとおりだ。仮に佑衣さんが魔法少女になったとしても、

その力をなんに使うのか、知る権利が彼女にはある。知らなくちゃならない。

そして、その力を使う”あっちの世界”が、いかに”こっちの世界”と異なるのか。

ほんの少しだけ暮らした僕でさえ、こっちの世界がいかに平和か、よく分かった。

あつちの世界を正直に話せば、彼女は魔法少女になることを断るかもしれない。

だから、今まで話したくなかった。

でも、もう話さなくちゃいけない時期が来たようだ。

佑衣さんが選ぶことができるために。

僕はあつちの世界のことを話し始める。

できるだけ感情を込めないで。

？

？

？

あつちの世界の簡単な絵は、一つの巨大な島。

中央には高原と、それを取り巻く高い山脈。

この山脈のおかげで、中央高原は外からの侵入が出来なくなっていて、独自の文化を持っていた。

それが”村”。

村と言ってるけど、それなりの人口や町並みができている。

その独自の文化というのが、”魔法”。

自然が厳しい分、精神面での充実を図ってきた結果がそれだ。

村の川は南に流れていて、そこにあるのが、ジェロルアンステイツル大公の国。

この国は比較的平和な国で、村と交流がある唯一の国だ。

村の東にあるのが、フェルゼンシュタイン伯爵の国。

一応、形ではジェロルアンステイツル大公に従っているけど、こっそり軍勢力を強化していたりして、領土の野心が高い。

村の支配を狙っているのも、この国だ。

中心をおさえれば、南にも西にも行きやすくなるから。

もしかすると、魔法の力も欲しがっているのかも知れない。

西にある国はドニ。

今まではこの三つの国が、村を中心にドーナッツ状に睨み合っていた。

だから、大規模に軍隊が動くことはなかった。

どっかが動けば、残りの国が後ろを衝けたから。

それでも小競り合いはあったけど。

でも、西に大災害が起きた。

西の国に大きな被害が起きて、戦争なんて出来る状態じゃなくなってしまった。

これをチャンスと思って、東の国が南の国に攻め込んだ。そして、その魔の手は村にも及んできた。

空から”竜” 空中軍の兵士達が山脈を越えてやってきた。

竜の兵士達は重火器は持っていないけど、剣や槍、弓矢を持っている。

村も同じような武器で戦ったけど、東の兵士達の方が戦いに慣れていた。

魔法も使ったけど、東の軍勢も魔法で防御してた。

あつちにも魔法使いがいるらしい。

その頃の戦いは一進一退だった。

そして、東の”獅子” 地上軍がやってきて、戦いが不利になる頃、長老が僕を呼びだし、魔法道具を持たせると、”門”に行くように命じた。

僕はみんなと戦いたかったけど、命令に従った。

追っ手の兵士達から必死で逃げながら、僕は門に向かった。

”・・・門の向こうは、平和な世界がある。

そこに魔法道具を持って行って、敵に奪われるな。

そして、あっちの世界で、魔法少女を見つけて、こっちの世界に連れ帰れ。

さすれば、村は復活し、前のような平和と繁栄を謳歌するであろう・

・・・”

この長老の言葉を信じて。

前にも言ったけど、その後、どうなったかはわからない。

一刻でも早く戻って行って、みんなの安否を確かめたい。

もし、必要なら、復讐を果たしたい。

？

？

？

「三国鼎立状態ですね。一番安定系です」

「武器は剣、槍、弓矢。現代兵器の敵ではないわ。ただ空中兵力は脅威だけど」

「政治体制と言い、イメージは中世。日本史なら新しく江戸時代初期というあたりですわ」

佑衣さんと魔来子さんは、額をつきあわせて相談している。

片眼鏡を掛けた魔来子さんが両手の指を動かすと、空中にはイメージの絵ができあがる。

さらに兵力の比較表まで。

あ、だいたいその地図、あってますよ。

でも、現代兵器って何のことなんですか？

「でも、多勢に無勢という言葉もあります。

あつちで味方がいなければ、最悪この三人で戦うという可能性も考えておかない」と

「魔法少女というけど、どのくらい戦闘能力があるのかしら。

話を聞く限り、どうも魔法の方が、兵器より分が悪そうなんだけど」

二人は僕の方を振り向いた。

「では、次に魔法についてお話し下さい。いったいどのような魔法があつて、それはどうやって使うのか、を」

あ、それは………あはははは。(汗

僕は力無く笑った。

## 12・「あつちの世界」(後書き)

3章はあつちの世界と魔法の説明が目標。

あと、佑衣さんの揺れ動く心が書けたら、いいな。

### 13・魔法道具（前書き）

魔法の説明の回・・・のはずなんです  
が、誰かさんが不勉強で、説明になりません。  
（泣）

### 13・魔法道具

「え、ええつと……魔法は、……良く知らないんです」

ああ……バラしてしまった。僕の最大の秘密を。  
案の定、二人はあつけにとられた顔で僕を見ている。

「あ、あの……魔法の国の出身者で、その国の期待を背負ってきた人が、魔法を良く知らない……  
と、今おっしゃいましたか？」

はあ……おっしゃいました、いえ、いいました。

「ら、ラバ、お前、このブタ野郎！  
佑衣さんが立ち上がった罵る。」

「お嬢様、お気持ちは理解できますけど、それはあまりにお下品な  
「だめ、そんな上品な言い方じゃあ、こいつに通じない！こんなし  
よんべん漏らし野郎には！」

ああ、やつぱり根に持つてるんですね。それ……

「よくわかんないというおまえが、あたしに魔法少女になれたの、  
村を助けに行くだのよく言えたわね！  
無責任にもほどがある！日本一、いや世界一の無責任野郎！」

「表現は別にして、内容については私も同じ気分でございますわ。  
ラバ様、一体どのような考えなんですか？」

えっと、まず説明させてください。

村の魔法学校には行つてました。ですから、最低限の魔法なら使えます。

でも、そこで教わったことは、魔法道具も呪文もきつかけに過ぎないということなんです。

「きつかけ……ですか？」

ベテランの魔法使いになると、道具も呪文もなしで、魔法の発動が可能なんです。

例えば、炎の魔法ですが、簡単なので、僕でも出来るんですけど。こつやつて、掌を上に向けて念じるだけで……

ポツと掌の上に小さな炎が点火する。

そのとたん、いきなりシュツと四方から白い煙が襲いかかってきた。

たちまち、真っ白になる僕。その煙で炎は一瞬のうちに消える。なんですか、これは……対抗魔法ですか……？

風が巻き起こると、白い煙はたちまち消えていく。

「ラバ様、気を付けて発動させてくださいね。」

この建物の中では、赤外線センサーが常時監視していて、温度変化に異常があれば、

自動消火システムが起動します」

はい……気を付けます。僕の知らない不思議な魔法で一杯でしたね、この家は。

で、ですから、魔法道具や呪文はまだ魔法に慣れていない人が速やかに発動できるようにするものなんです。

それから、我がオツフェンバッフ家というのは……

「なに、そのオツフェンバッフって？」

「ラバ様の名字ですわ。ヤーコブ・ラバ・オツフェンバッフです」

「あ……すっかり忘れてた」

いいですよ。僕の名前なんて……しょんべん垂れでも……  
・好きなように呼んでください。

うう、話が進まない。

で、そのオツフェンバッフ家というのは、村の中でも魔法使いの名門なんです。

「その、名門が、魔法を知らんのかい!？」

「ラバ様、言ってることが滅茶苦茶に聞こえますが……」

つ、つまり、名門ということは、生まれつきの素質が強いので、特に呪文とか覚えなくても、発動できてしまったんです。

魔法のイメージを脳裏に浮かべるだけで、魔法が使えてしまうんです。

だから、体系的には勉強してないんです。

「つまり、できるものだから、学校での勉強はおサボりになっていたと……」

あ……、そう言われると返す言葉が……

「お嬢様、出来るからと言って学校を休むとこういう人になるんで

すよ。ご理解いただけました？」

「わかりましたわ。反省します」

僕も一緒に反省します……で、でも、こういう事態になるなんて、思ってたかったです。

村と切り離されて、たった一人で、魔法を使うようになるなんて……

「危機管理能力に甘さがあると表現させていただいてよろしいでしょうか。

どういう事態になるか分からない以上、最悪のケースに備えて用意をしておく、

それは村のように敵が存在する場合、当然のことと考えますが、いかがでしょう」

はあ……。魔来子さん……。ぐうの音も出ません。

「とにかく、ラバ様の今までの話をまとめましょう。

お嬢様が魔法を使うと仮定した場合、当然素人ですから、魔法道具を必要とする。

呪文については、ラバ様が不勉強なため、不明ではあるものの、脳裏に魔法のイメージを浮かべることで発動できるのではないか、後はお嬢様の資質次第ではないかと私は考えておりますが、こんなところでしょうか」

す、すげえ……。しゃべった本人がまとめられないのに、しっかりまとまってる。

「じゃあ、ラバ、あんたがあっちから持ってきたっていう魔法道具、

見せてよ」

僕は、あつちの世界から肌身離さず持ってきた、古ぼけた小さな箱を取り出した。

魔法の封印を外すと、蓋を開ける。

その中には光輝く金のリング・・・ではなくて、

紋章が入った古ぼけた指輪が2個と、アンクレットが1つ。

いかにも年代物ではありそうだけど、ちょっと古めかしい。

「これが・・・魔法少女の道具なんですか？なんか、期待とはちよっと違いますね。」

なにを期待していたのか知りませんが、これがそうなんです。

とはいえ、僕も初めて見たものですけど、ちよつとなあ・・・

「では、お嬢様、ちよつと試しにつけてみてくださいな」

佑衣さんもちよつと不服そうな顔をしていたけど、両手の薬指と、左の足首に装着した。

・・・何も起きない。

「やっぱ、呪文が必要なのかなあ？・・・」

「ラバ、やっぱり一度、死んでみる？お前がわからないのに他の誰がわかるかあ！！」

14・「あたしじゃない・・・？」（前書き）

予定では佑衣さんが魔法少女になるはずだったのですが、  
どっかで横道に・・・大丈夫か？>作者

ま、こっちの方がおもしろそうだからということ。

14・「あたしじゃない・・・？」

テーブルの上には、佑衣さんが外した魔法道具が転がっている。

「どうにもならない道具なんて、ただのオモチャよ！」

彼女の叫びも。でも、そのとおりなんだ。いったいどういうことなんだろう？

公園で、初めて見たときに感じた感覚は、『彼女だ！』。

でも、実際に装着しても何もおこらないだなんて。

僕の勉強不足が原因なんだろうか？彼女の力不足なんだろうか？それとも、なにか他に原因があるんだろうか？わからない。

「でも、これからどうするかですわね。

魔法力なしであっちの世界に突入するということもあり得ますが、少人数で未知の世界に侵入する危険を考えれば、少しでもパワーアップしておきたいものです。

それとも、魔法少女が見つからなかったということで、何もしないでおきますか？」

魔来子さんが指輪をもてあそびながら話す。

なにもしないなんて。一刻も早くあっちの世界へ戻りたい。

でも、そのためには佑衣さんに魔法少女になってもらわないと・・・

・・・

もし、ホントに彼女がなかったら、なれなかったら・・・

「取り損ねたアイテムがあるとか、聞き忘れたキーワードがあるとかというのが、

ゲームの世界ならお約束ですけど、そんなこともなさそうですし。このままだとゲームオーバーですわね」

佑衣さんも黙っている。さっきまで「あたしのせいじゃないわよ」って怒ってたのに。

僕を見る目にあるのは、哀れみ？同情？それとも期待？

僕は黙った。無力感が襲う。どうすれば、いいんだろう？

不意に小さいけど、ピリツとした感覚が走った。

こ、これは……魔法使いの感触！

長老や力を持った魔法使いの近くにいと、身体の中に不思議な電流が走ることがあった。

それと似ている。

”門”をくぐって、魔法使いが来たのだろうか。それは……敵か、味方か？

で、でも……なんか、不思議な感触。

不安定、ふらふらして落ち着かない。なんか、初心者の魔法使いみたいな感じ。

僕はようやく、そこで佑衣さんの目に気がついた。

魔来子さんをじっと見ている。

僕も、慌てて魔来子さんを見た……えっ？

魔来子さんが、薄い青い光に包まれていた。

「ど、どうして魔来子さんが……？」

「いえ、ちょっと悪戯心で指輪を嵌めてみましたところ……こ

のようなことに・・・いったいこれはどういうことでございましょう?」

残りの魔法道具も付けてもらった。不安定だった感触が安定する。

「え、えつと何か魔法を・・・」

「では、先ほどのラバ様の魔法を、見よう見まねですけど・・・」

そう言つと、魔来子さんは掌を差し出した。手のひらの上には、小さな炎。

そして、また消火の白い煙が吹き上げる。

でも、その煙が消えた後でも、掌の炎は消えていない。よく見れば、炎の周りを光の球体を取り囲んでいる。

すごい。炎は攻撃系魔法で、球体は防御系魔法。

その両方を一度に発動させるなんて、初心者のできることじゃない。もしかすると、魔来子さんはカガクという名の魔法使いだと思つていたけれど、

本当の魔法使いなのかもしれない。

「いえ、決してそのようなことはございませんわ」

そう言う魔来子さんの表情が、どこか得意げに見えるのは気のせいにか?

僕は魔来子さんに見せる魔法を、彼女はどんどん吸収していった。魔法学校で習った基本的な魔法だけど、でもそれを実践することで、彼女は魔法のこつを覚えたようだ。

「ラバ様がおっしゃっていた魔法のイメージというのがわかってき

たようです」

「これなら、もっと強力な魔法だって、すぐに使えるようになりますよ！」

ぼくは大喜びで叫んだ。

大魔法使いかどうかわからないけど、強力な魔法使いには違いない。もしかすると、村の長老にだって匹敵するかもしれない。

魔来子さん一人でだって、東の国の軍に勝てるかもしれない。

僕と二人で行って、村のみんなを救出することも、万が一の時には復讐することだって、

それどころか逆に東の国を滅ぼすことも夢じゃない。

これだったら、なんだってできそうだ。

僕の頭の中がそのことだけになっていたときだった。

ドカツ！

浮かれまくっていた僕は、背中を思いっきり蹴飛ばされた。

ガツンと食料保管庫の扉に顔面をしたたか打ち付ける。

痛むおでこを押さえながら振り向くと、

「ちょっと待ってよ！」

佑衣さんだ。泣き出しそうな顔をしている。

「あたしは無視？あたしはどうすればいいのよ！あたしが魔法少女じゃないの！？」

呆然としてみている僕に、一言。

「ラバのバカ！！」

彼女はそう言い残すと、部屋を出ていった。

あ、あの、魔来子さん、僕はいつたい、いつ、佑衣さんの尻尾を踏んだんでしょうか？

「なにか、彼女の気に障るようなことを言いましたか？僕」

僕の質問に魔来子さんは大きくため息を吐いた。

「ラバ様、魔法どうのこうの以前に人の心を勉強すべきだったかも知れませんかえ・・・」

## 15・ひとりぼっち（前書き）

♪ ラアバは喜び庭駆け回り、佑う衣はベッドで一人泣く。  
歌になっちゃいました。

## 15・ひとりぼっち

僕の額に絆創膏をあてながら、魔来子さんは言う。

「少しはお嬢様のお気持ち、考えてくださいな。

最初、お嬢様は嫌がったはずです。トラブルを持ち込むなって。

それがどういう風の吹き回しか、やる気が少しでてきたようです。願い事という言葉に惹かれた感じがしましたけど。

ところが、今回の件で、自分が魔法少女になれないとわかってしまいました。

その気になっていたところに、拒否通知を受けたようなものです。そうですね。そのとおりです。」

「ラバ様で例えましょうか。子供の時、家族旅行に行くつもりでワクワクしていたら、

急に親の都合で取りやめになった。どういうお気持ちになりますか？」

経験ありますよ。怒りましたねえ。泣いて怒って、何かにあたってました。

「どうやって機嫌を直されました？」

その時はお母さんが慰めてくれて、お父さんも次は行こうなって、言ってくれて・・・

「では、今の失意のお嬢様に、ラバ様は何か、声を掛けられましたか？」

優しい声の一つもありましたか？

それを素直に受けるかどうかは別にして」

・・・いいえ。

僕は浮かれまくってました。魔来子さんがすごい魔法使いだって。佑衣さんのこと、こればっちも考えてませんでした。

・・・そうか。彼女のこと、真っ先に考えるべきでした。彼女の気持ちを思いやるだけの考えがありませんでした。

「やっと佑衣様の尻尾、わかったみたいですネ」

彼女にすまないという気持ちになってきました。

でも、どうやって謝ったら、機嫌を直してくれるんでしょうか。

「それぐらいは、ご自分で解決するように宿題としましょうか。少しぐらいは自分で考えた言葉でないと、相手は納得してくれませんかからね。」

ヒントを一つだけ。どんなに不器用でも、心からの言葉なら、きっと相手の心に響きますよ。

それが優しい言葉なら、拒否はありませんよ」

そう言って、魔来子さんは微笑んでくれた。

。

。

。

とは言われてもなあ・・・。

魔来子さんは後であがっていきと言って階下に残った。

僕は佑衣さんの部屋の前。ドアをノックする。

えっと、心からの声を・・・

「佑衣さん、入るよ。さっきはごめん・・・ブッ！」

ドアを開けた途端に、飛んできたのは枕。顔面直撃。

佑衣さん、固い枕が好みなんですネ。

「お前なんかなあ……どっか行っちゃえ。村でもあの世でも行けばいいのよ。」

でも、魔来子は、魔来子さんは、連れてかないですよ！」

佑衣さんは僕を睨みつけている。

その目が赤いのは泣いてたせいかな？

「あの世には行かない。村には行くけど帰ってくるよ、必ず帰ってくるから。魔来子さんも僕も」

「適切なこと、言わないでよ！」

佑衣さんは絶叫。ギョツと握った拳が震えている。

「都合が悪くなると、みんなそう言うの。父さまも母さまもそう。いつも、次は必ずって、いうの。」

でも、その約束が守られたことなんか無かったわ。たったの一回も！」

そ、それは……

僕は魔来子さんが話してくれた、佑衣さんの両親のことを思いだした。

待って、待って、待ち続けて、それでもこなかった、佑衣さんが子供の時の話。

「ラバ、お前だってそう。あっちの世界へ行ったら、どうなるかわかんないんでしょ？」

剣に刺されたら痛くないの？ 槍で突かれたら、血が出るんじゃないの？

弓矢で射抜かれたら、死ぬんじゃないの？

どうして、必ず帰ってくるなんて言えるのよ！！大嘘つき！」

佑衣さんの目には大粒の涙。

でも、佑衣さんの言うとおり、あつちの世界はこつちより危険なんだ。

佑衣さんは行かない方がいい。僕は佑衣さんにこつちに残っていて欲しい。

「二人が帰ってこなかったら、あたし、本当にひとりぼっち。

行っただけだったら、あたし、どうしたらいいのよ！？」

あたしを一人きりにして、あんた、嬉しいの！？」

とうとう、佑衣さんは顔を覆って、泣き始めてしまった。

佑衣さんの気持ちは分かる。

でも、やっぱり危ない目に佑衣さんをあわせる必要はない。

魔来子さんの魔法力と戦闘力があれば、

いや、僕ですら、不要かも知れない。

僕は……佑衣さんを危険に曝したくない。大切にしたい。

そう言おうとしたときだった。

いつの間にかドアのところ立っていた魔来子さんが言った。

「ラバ様、今までのお話、無かったことになっていただけませんか？お嬢様のお許しが出ない以上はあちらの世界に行くことが出来ません。」

それと……ラバ様も、私同様に契約済みの身ですので、お嬢様のお許しが必要なんですけど、

それをお忘れになっておりませんか？

契約の身である以上、勝手なこととはできません」

ま、また、ここで契約が出てきてしまうんですか！？  
でも、確かに僕も魔来子さんも契約の身なんですよね。  
てことは村に戻るのは、やっぱり無理なんでしょうか？・・・

## 15・ひとりぼっち（後書き）

延々続けた第6話の伏線がここで。（笑  
佑衣さんの不安定な気持ちが表示できていたらな・・・

16・「魔法おばさん」と呼ばないで（前書き）

あはははは、とりあえず前半終わり。

いよいよ、次回、門突入から、あっちの世界へ。

書いてても楽しいけど、読み返してもおもしろい。  
完璧に作者の趣味に走ってます。（大笑）

## 16・「魔法おばさん」と呼ばないで

そうだった。僕は佑衣さんに雇われた身だった。

でも、さっき、どっか行っちゃえって言われたような気もするけど・

・

「そうか、あたし、雇い主だったんだ。なら……うん、わかった！」

佑衣さんの顔が輝いた。瞳が強気に輝いている。

「魔来子さん、出発の用意して。食料、水、生活必需品、着替え。3人分よ。

もちろん、携帯用の武器も医薬品も。想定は何日ぐらい？」

「2日間。延長しても3日間でございます。

それ以上では資材も尽きてきますし出直しを検討すべきかと思ひます。

そもそも、この土日でないと佑衣様の学校に差し障りが出ます」

魔来子さんがてきぱきと答える。

「ではそれをお願いします」

かしこまりましたと魔来子さんは部屋を出る。

にこやかな微笑みを残して。

ちょ、ちょっと佑衣さん。

僕は佑衣さんを連れて行くのに反対……

「うつさい、ラバ。もう決めたの。

たとえ足手まといでも、一人で残るなんてやなの。

そもそもあたしよりあんたの方が弱っちいじゃん。  
足手まといはあたしじゃなくて、あんたじゃないの？あんたが残る？」

ぼ、僕のふるさとだ！

村に、あっちの世界に僕が行かないでどうする？

いや、それより佑衣さんの身を守ることが大切なことであって、それをどうするか・・・

「あんたよ」

は？

「ラバ、あんたがあたしを護るの。ご主人様を護るのが、雇われたあんたのお仕事。」

これならどう？なんか文句ある？」

そう言うのと、佑衣さんはニコツと微笑んだ。

カワイイ。

いや、猫かぶってるだけなんだ。本性はもつと凶暴で、わがままで、勝手気ままで、

自由奔放で、泣き虫で、甘えん坊で、友達思いで、強気で、勝ち気で・・・

うわあ、何言ってるんだ、オレ。なんか誉めてないか？

佑衣さんは僕を墮としにかかっている。

連れてっちゃダメだ。万が一護りきれなかったら、一生後悔する。僕がくたばるのはかまわない。でも彼女がそんなことになったら、僕はどうしたらいい？

「ね、ラバ。あたしのこと、命がけで護ってくれるよね？だから行

「つてもいいんだよね？」

両手をキュッて握られた。

柔らかくて、温かくて……

佑衣さんの甘い香りまで一緒になって、僕に迫ってきた。

「……ハイ」

墜ちた。

佑衣さんは甘くない。

そんなことはとくに知っていたつもり。

でも、さっきまでの佑衣さんを見てたら、豹変するなんて夢にも……

「ラバ、あたしの荷物は全部持ってよね。足が痛くなったら、おんぶかだつこよね。」

まずはあたしの命令には絶対服従。反論は無し！わかったわよね！

・  
両手を握ったままの格好で、ああ、その口調はないでしょう……

でも、こっちこそ、佑衣さんらしくて、いいかな。

僕はこっちの佑衣さんの方が、好きなのかも……

もしかして、好きなのか？僕は、佑衣さんが好きなのか！？

「ご主人様の話、聞いてるー？」

僕の人差し指を握って、目一杯力をこめる。

反った指の骨がミシミシって……

「い、痛っ！聞いてます、聞いてます、なんでもきますっ！！」  
わき出した涙で、微笑む佑衣さんが滲んで見えた。  
なんて残酷な微笑みなんだ……

「ひとりぼっちになってしまつという考えで、頭がパニックになつてましたから、  
ご自分のスタンスというものを思い出させてあげただけですわ」

魔来子さんは事も無げに言う。  
魔来子さんの一言で、佑衣さんがすっかり元に戻ったことを聞いた返事。

「さすがは、小さい頃からのお付き合いですね」  
「お嬢様がどうすれば機嫌が直るのか、それとも悪くなるのか、とことん勉強させていただきましたから。はい」

僕たちの前には背負子が3つ。  
水や食料や医薬品の袋。衣類や寝袋の袋。そして武器や弾薬の袋。

「行動時間を長くとるために、明朝、夜明け直前に”門”に突入したいと思います。」

お嬢様、ラバ様、今夜は休養をたっぷり取ってくださいませ」

ブルッ。震えが来た。いよいよ門をくぐるんだ。村に帰るんだ。  
村はどうなっているんだろう。村のみんなはどうしているんだろう。  
こんなに早く帰る日が来るなんて、思ってもいなかった。  
伝説の魔法少女だって、魔来子さんがなって………魔法

少女？

うーん、少女っていうより、魔法おばさ・・・ヤバッ！

「お、お姉さんです！魔法使いのお姉さん！！」

氷の微笑を浮かべた魔来子さんが僕を見つめている。

「お嬢様、どうやって、ラバ様、いたぶればよろしいでしょうか？」

このバカという表情を浮かべて、佑衣さんは僕を見てる。

「あばらの3本も折れば、少しは身にしみるんじゃない？」

「全部へし折るとするのは、如何なものでしょうか」

あ、あんななら、やりかねない！

ぶ、無事帰ってきたら、何本でも折って下さい！！

それまでは、ご勘弁をー！！

16・「魔法おばさん」と呼ばないで（後書き）

もしかすると、幕間劇を挟むかもしれません。  
ちよつと悩み中。

っていつても、明日には決めないと。

## 17・前夜（前書き）

実はこの話、書こうかどうか悩みました。  
結局、書きました。その理由。

魔法の世界（ラバの世界）に現代兵器を持ち込もうとしています。  
剣と弓の世界に小火器と無反動砲を持つていったら、  
弾切れしない限り圧勝ですよ。

そんな勝負の見えた話、おもしろいか？魔法もそこそこやろ？  
（いきなり”バルス”がでてこの世の終わりかあ？）

生かさぬよう殺さぬよう。

でも、どうしてそうするのかを、作っておかないと。  
という、伏線張りの回みたいなもんです。

## 17・前夜

僕は天井を見つめていた。

あばらは折られていないけど、ほつぺたが少し痛かった。

二人がそれぞれ両側のほつぺをつねることで勘弁してもらった。今は。

いよいよ帰る、そう思うと、なんだか興奮して眠れない。

明日の朝は早起きしないといけないのに・・・

静かにドアがノックされた。

僕の返事で入ってきたのは魔来子さん。いつものメイド服。

「お嬢様が寝付けないと言うことで、睡眠薬を処方いたしました。もしラバ様も同様でしたら、と思ひまして」

そう言つて、薬と水の入ったコップを机に置く。

「それと・・・もしよろしければ、少々お話ししたいのですが・・・」

薄暗い照明の中、魔来子さんの顔は陰影が深い。

美人なだけに、こういう効果のもとでは怖いぐらいだ。

「お嬢様のことです。・・・明日、お連れして本当に良いのでしょうか」

「命の危険のことですか？」

「もちろんそれもございます。」

もし、お嬢様が危険に曝されるようなことになりましたら、私は百人でも千人相手でも屠るつもりでございます。お嬢様に指一本触れさすつもりはございません。」

たとえ、そのためにラバ様が犠牲になろうとも私の命がなくなろうと、お嬢様が大切にございます。」

魔来子さんは言い切る。

「魔来子さんの気持ちはわかってるつもりです」

「心配なのは、そういう事態に巻き込まれたときのお嬢様の心です。私から見れば、年端の行かない子供でございます。」

そんな子供が他人とはいえ血を流したり、絶命したりするような場所へ行くこと、

そのこと自体がお嬢様にどのような影響を与えるのか。

誤って殺めるようなことでもあれば、お嬢様の心にどのような傷を負わせることになるのか。

できることなら、今からでもこのミッションを無くしたい。私とラバ様の二人だけとしたいぐらいです」

「本当に、佑衣さんのことを心配しているのですね」

「はい。実際に私の子だと思っております。」

その子が成長するためであれば、あえて苦労させるということもございましょう。

ですが、危険な目にはあわせたくないという親心でございます。

今までも我慢を教えられてきましたが、また今回も辛い我慢を強いられそうですわ」

魔来子さんは微笑む。ちょっとやつれた感じがするのは気のせいだろうか。

「でも、ラバ様には感謝の気持ちで一杯でございます」

え？・・・てつきり、僕は恨まれているのだと思ってましたよ。僕が現れなければ、こんなトラブルに巻き込まれてないのですから。

「ラバ様が来てから、お嬢様は変化なさいました。」

今までは勉強にしても訓練にしても、その目的がわからないまま、単にやるのが目的でしかなかったのです。

でも、ラバ様の目的を聞いてから、お嬢様は自分から打ち込むようになりました。

どこかに自分の存在意義というか、理由というか見つけられたのかも知れません」

「そうなんですか・・・」

「ですから、ラバ様の世界に行きたいというお嬢様をお止めすることが出来ません。」

そんなことをすれば、お嬢様の生きる目標が、また失われてしまいます。

後は、お嬢様を守り抜くこと。これをラバ様にもお願いしたいのです。

ラバ様と私を比較してみますと、私の方が攻撃に向いているようです。

現代兵器に精通しておりますし、それに魔法の力を付け加えることが出来ます。

私が相手をしている間は、ラバ様はお嬢様をお守り下さい。

何があっても攻撃より守り。守りがしっかりしておればこそ、私も安心して、攻撃が出来ます。

どうか、どうか、命がけでお嬢様をお守り下さい。宜しく願います」

いつの間にか、魔来子さんの声は涙ながらになっていた。

「佑衣さんのこと、愛していることがわかりますよ」

「お恥ずかしい・・・こんなところ、お嬢様には見せられませんか」

恥ずかしそうに微笑む。

「こちらこそ、お二人には深く感謝しています。

どこから来たかわからないような奴の言い分を信用して僕や村を助けてくれるというのですから。

もしかすると、僕はお二人をだまそうとしているのかも知れませんよ？」

僕の言葉を聞いて、魔来子さんは笑う。

「あら、一応、人を見る目は持っているつもりですし、ラバ様はそんな詐欺師にも見えませんわ。

あまりにもラバ様は純朴で、無警戒ですし、可愛らしいお間抜けなところですから・・・」

ま、間抜け・・・ホメ言葉にするにはちよつと・・・ははは。

「魔来子さんの気持ちは分かりました。佑衣さんを守り抜く決意が固まりました」

「有り難うございます。宜しく願ひいたします」

そう言って立ち去ろうとした魔来子さんが振り向く。

「そうそう、魔法と言えば、このようなことが出来るようになります」

そう言っ て両手を広げると、まるで羽のようにふわりと動かす。魔来子さんを取り巻く青い光が強まると、彼女はすつと浮かび上がった。

「……浮遊術だ！ トップクラスの魔法使いの技です！」  
優雅に着地した魔来子さん。

「こういう技が不要ならいいのですけれど、全て、あっちにいつてからの話です。」

明日はよい日でありますことを。では、お休みなさいませ」

彼女はドアを閉めて出ていった。

そう、全てはこれからなんだ。まだ何も手にしてない。

佑衣さんを守り、村を救い、三人無事にここへ戻ってくる。

僕はそう決意して、目を閉じた。

## 17・前夜（後書き）

この回の目的。

1・ミッションの明確化。

2・佑衣及びラバの攻撃値を下げておき、ミッションを困難にしておく。

その理由付け。

3・以上の説明を、魔来子の気持ちから説明する。  
できたでしょうか？

## 18・間抜け者の罖（前書き）

第4章、突入~~~~！（パチパチパチ）  
な、なんと、あっちの世界編です。

よくぞ、ここまで続けてくれました。  
よく頑張ってるぞ>作者  
読者も少ないのに。（自虐の笑）

## 18・間抜け者の罠

僕は倒れ込んでいた。もう、残された力はほとんどない。  
……って、荷物が重すぎる。門をくぐるときに全部持たされた  
せいだ。

後ろを振り向いた。門はまだ開いている。

ゆっくりとこれを閉める。ほんの少しだけ隙間を残して。  
この隙間をまた広げて、向こう側に帰らなきゃいけない。

一緒に来た佑衣さんや魔来子さんと共に。

前を見る。彼女たちはもう歩き回って、辺りをうかがっている。

僕も周りを見る。霧の中。

想定どおりに周りは濃い霧に包まれていた。

霧の向こう、ようやく朝日が昇ろうとしていた。

「確認します。荷物は全部そろっていますね。武器、弾薬、医薬品、  
食料、飲料、医薬品、衣類、テント、寝袋……」

僕がやつのことで持ち込んできた荷物を魔来子さんが確認する。  
その魔来子さんはいつものメイド姿。

でも、白いエプロンはアラミド繊維のケブラー49というもので出  
来ているそうだ。

さらにその中には金属プレートを強化プラスチックで固めてあつ  
て、矢も通さないらしい。

佑衣さんの制服も同じ素材のものだ。

頭にはヘアバンド。でも透明だけでヘルメットを被っている。  
カガクという魔法で、僕の耳元の小さな機械から二人の会話が聞こ  
えてくる。

『周りは特に異常なし。見張りがいる様子はないわ』

『門の存在が相手にばれてないのでしょいか。ここには必ず見張りがあると予測していたのですが』

僕もそう思っていた。相手に追われながら、この門に逃げ込んだのだから。

魔来子さんの予想では、この門の周りと、村には絶対に見張りが置いてあると言っていた。

取り逃がした僕が戻ってくるのは、その二つで間違いないからだ。

『とにかく注意しましょう。罠がある可能性が高いと思われます』

『了解』

でも、僕は罠どころではなくなっていた。

感じていた立ちくらみが段々酷くなって、めまいを起こしていた。思わず膝をつく。僕の中に世界が押し寄せてきて、一気に弾けていく。

予測はしていたけど、こんなに酷い気分になるなんて……

「ラバ、ラバ！どうしたの！？」

佑衣さんの声が酷く遠くに聞こえる。

魔来子さんが佑衣さんを押しとどめているのが見える。

後、あと、もう少しだから……もう少し待ってて。

力をコントロールするコツを思い出す。

力で身体全体を取り巻くようにしたら、光が僕を覆って……ほら、もう終わりだ。

「ラバ、………本当に貴方なの？ラバ？」

僕は立ち上がると、顔にかかる髪の毛を手で払う。

「はい、僕はラバです。本当の姿はこれなんです。お嬢様」

そう言っ、佑衣さんを見下ろす。佑衣さんは呆然と僕を見上げている。

そうなんですよ。佑衣さん。これが本来の姿。

身長175cmってとこですか。魔来子さんより少し高いぐらい。長身細身。髪の毛はここんとこ切ってなかったので、結構長くなってる。

服だっ、小学生サイズは卒業。膝までの長い黒のローブ。高いカラ

魔法使いの正式衣装。

「案外いい男ですね。ラバ様は。意外といっは失礼ですが」

「いやあ、魔来子さん。魔法力が十分にあるので、なんか自信も湧いてきますよ」

力を感じているせいか、どんな敵がやってきても一撃で倒せるような気がする。

自信満々。そう、まさしく、そのとおり！

おかげでなんだか、佑衣さんも大人しく見える……

ゲシッ！

「ゆ、佑衣さん、な、何を！？」

佑衣さんの履いているSWATコンバットブーツが僕の脛を蹴った。

あまりの激痛に座り込む。

「フン、イケメンになったからちよつとは変わったかと思ったけど、全然変化ないじゃん。びつくりさせないでよね。いい、あんたがどうなろうと、ご主人様はあ・た・しだからね！」

わかってますよ。わかってますから……蹴る前に言ってくださいよ……………

僕も持ってきた防弾ベストとヘルメットを着用する。

荷物を背負い込む。小学生サイズではきつかった荷物も、今の僕には軽いものだ。

その間に偵察に行っていた魔来子さんがふわりと着地する。  
もうすっかり飛翔術をマスターしているようだ。

「やはり、何力所かに罾が仕掛けてありました。一部は発見して逆に仕掛けておきましたけど、この調子だともっと隠されていそうです」

「でも見張りがいないところを見ると、罾だけ仕掛けて撤退したじゃないですか。敵がいらないのならさっさと村へ行きましょう」

もうここには用はない。一刻も早く、僕は村へ向かいたかった。

「ラバ様、そう簡単ではないですよ。冷静に対応しましょう」

そういう魔来子さんの声を振り切るかのように、僕は一步前に踏み出した。

「ぎゃあああ……………」

……やっぱり魔来子さんの言うことをよく聞いておけば良かった。

ひっくり返った世界を見ながら、僕はそう呟いた。

『でしょう、ラバ様。これからはご注意下さいね。もうしばらくお待ち下さい。今、縄を切りに行きますから』

僕の足首にからみついた縄が、木の上の方まで僕を釣り上げていた。

そう、あっさり僕はワナに引っかかってしまったのだ。

ようやく地上に降ろしてもらった僕に、魔来子さんはさらに絶望的なお知らせ。

「これで、相手にもこちらの存在を知られたと思った方が良さそうです。罠に獲物がかかったという知らせがあったはずです。まもなく、敵がやってくるわけです」

すみません、すみません。

僕が油断したばかりに、お二人にご迷惑をおかけます。

佑衣さん、そんな冷たい目で見ないでください！

「<sup>フー</sup><sup>ビー</sup><sup>ビュッ</sup>間抜け者の罠にひっかかるあんたって、ほんっとのバカね！」

## 18・間抜け者の罖（後書き）

ともあれ、本当にここまで来るとは。

お読みいただいた皆さんに深く感謝です。

これから、ラバ以上のお馬鹿キャラとか、三角関係キャラとか用意します。

（書ききれるか自信はないですけど）

楽しみにしていて下さい。

（自分で自分にプレッシャーかけてどうする！？）

## 19・前哨戦（前書き）

先手必勝！

のはずですけど、おや？

わーい、またバカが登場してきたぞ！（笑

## 19・前哨戦

息を潜め、身を伏せて待つ。

僕の前に囷として座っているのが佑衣さん。

『お嬢様、ラバ様、敵が近づいてきました。用意をお願いします』

僕は銃を握り直す。

敵に当たらなくてもいい。

佑衣さんを守るためだけの銃。

ブービートラップから脱出した後、僕たちは話し合った。

獲物がかかったことを知った相手はすぐにもここに現れるだろう。ここで闘うか、闘う前に逃げ出すか。

逃げるのを主張したのは魔来子さん、闘う方を選択したのは佑衣さんだった。

「いつまでも逃げ切れるものじゃない。大兵力で追跡されたら、それこそ終わり。でも、今なら多分小部隊でしょうし、こちらの武器がどれくらい通じるかテストできるわ。捕虜から情報を得るということだってできるかも。先手必勝で敵の戦意が無くなるようにできれば一番いいと思うけど」

ちょっと考えて、魔来子さんはその意見に賛成した。

そして僕たちは逆に罠を仕掛けて、待ち伏せをすることにした。

ガサツ、ガサツ。

茂みをかき分ける音がすると、そいつらが顔を出した。

巨大なトカゲ、リザードにまたがった装甲兵が一人。  
徒歩で簡易装甲の兵が両側に二人。

三人は手に槍を、腰に剣をぶら下げている。

白い服の佑衣さんをすぐに見つけたのだろう。  
警戒しながら、ゆっくりと近づいてくる。

「こいつが、罠にかかったのか？」

「動かないところを見ると、どこかケガをしたのかも知れぬ」

「村の連中に似ている。ひょっとすると、生き残りかもしれん。生きたまま捕まえて、仲間がいるかどうか、吐かせよう」

お前ら、村について何を知っているんだ！？

飛び出していつて、そう言ってやりたかった。

こいつら、いったい村で何をやったんだ！

”村の生き残り”ってどういうことなんだ？

僕は銃を握りしめる。ダメだ、今はダメだ。

ここで飛び出したら、三人で立てたプランが台無しになる。

我慢だ、我慢しろ！

なおも接近してきた相手に、やっと気付いたというような雰囲気  
で、

佑衣さんが髪の毛にそっと手を当てた。

（合図だ！）

リザードの上に不意に魔来子さんが現れた。

振り向く間も与えずに、その上の兵士ののと元でナイフを煌めかす。  
そいつは声も出せずに絶命する。

魔来子さんはすぐにリザードから飛び降りると、横の相手にナイフを突きつける。

慌てて後ずさりする相手。

と、いきなりその姿が消えた。

土埃が立ち上がり、絶叫が響く。

「自分で作った落とし穴に自分ではまったわね」

佑衣さんが言う。

最後の一人に僕は銃を向ける。

「動くな！動くと殺すぞ！！」

動きを止めた相手の武器を、魔来子さんが慎重に解除する。

「お前はどこの手の者だ？」

「東の国の正規第4軍、戦闘斥候部隊だ。お前こそ何者だ。村の連中の仲間か？」

「うるさい！村はどうした？村のみんなはどうなったんだ！？」

僕の質問を聞いて、そいつの顔に邪悪な笑いが浮かぶ。

「なんだ、知らないのか。村なんて、もうどこにもないぞ。みんなに会いたいのなら、お前も墓場に行くしかないな！」

うそだ、うそだ！！

こいつは僕を混乱させようとしている。

村のみんなが、みんなが……そんな……

きゅっと手を握られた。

「ゆ……佑衣さん？」

「よくわかんないけど、大丈夫。あたしたちがついていからね」

佑衣さんは続けて何か言おうとした。

でも、その時だった。

僕の背筋をビリビリッと電流が流れた。

魔法使い！しかも、強力な奴！！

「来るっ！！」

僕は反射的に佑衣さんを押し倒した。

そのまま身体の下に佑衣さん押し込む。

直近に強力な炎。

チリチリと髪の毛が焼ける臭い。

伏せた顔を上げれば、さっきまでの兵士は松明になっている。

彼だけじゃない。

こと切れて横たわっていた兵士も、落とし穴の中のやつも、みんな炎に包まれている。

「何ですか、何が起こったのですか？」

さしもの魔来子さんもうろたえている。

「ほー、ほほほほ、あら、どっかで見た顔よねえ！」

こゝこの声は!?

## 20・オカマな魔法使い（前書き）

おかしい、ほんとにこいつ、おかしい。  
書きながら笑い転げている。

これが読者さんに伝わるといいなあ。

## 20・オカマな魔法使い

やっぱり、こいつか！

20mほど先の草地の上に、ふわりと浮かんでる、魔法使い。そのケバいメイク、つるつるの頭は昔と変わらない。襟の高い、黒のローブは魔法使いにお馴染みの衣装だけど、はち切れんばかりに、パンパンに膨れあがってる。

「……お前、そんなに太ってたか？」

「うるさいわねえ。村と違って、今はおいしい物にいっぱいこまれているから、つつい、食べ過ぎちゃうのよねえ。魔法に頼っちゃうと、身体動かすことも少なくなってる、どうしても、太り気味で、やっぱ、ダイエットしなきゃダメかしら……」

太り気味じゃなくて、完全に肥満体だろ。

自分に甘い認識も、そのオカマちつく言葉も昔と変わってない。名前が……えーっと、なんだっけ？

「ヤーコブ、あんた、あたしの名前、忘れてるでしょ！」

「ちょっと待て、今思い出すから、ちょっと待て」

お、お、……オネクターブ、オネクターブ・ゾラ！  
長老の一番弟子で、魔法能力は優秀だったけど、いかんせんその性格と、オカマ言葉にみんな辟易してたっけ。

「っほっほほお、そう、村で最優秀の魔法使い、オネクターブ様って、呼んでえ！正確には、村があったころ、なんですけどねえ。ヤーコブ、この意味、わ・か・るう？」

一気に頭に血が上った。さっきの奴らといい、こいつといい、村をいっただうした・・・

ちゃんちゃん。

服を引っ張られた。振り向けば佑衣さん。

「ごめん、ラバ、なんかお話中みたいなんだけど・・・」

「はい・・・」

「・・・あたしも、魔来子さんも、あんたたちの会話が全然わからないの。あんたたち、二人してわかんない言葉を叫んでるの。このままだと差し障りでそうだから、何とかならない？」

え？言葉がわからない・・・？

僕とお二人の間は、翻訳魔法で通じてるはずだし・・・あ、忘れてた。

僕の言葉を日本語に換えることで、会話が成立してる。

つまり、こっちの言葉は日本語オンリーの二人にはわからないんだ。

僕はオネクターブにちょっと待てと合図した。

「ばかばかん、盛り上がってきたところなのにい！」

そつもだえながらも、待ちの体勢。妙なところで律儀な奴。僕は改めて、翻訳魔法を二人にかける。

オネクターブにしゃべってみると合図。

「んもう、一回冷めちゃったら、盛り上げ直すの、大変じゃないの  
お！ヤーコブ、ちゃんと責任とってよねえん」

佑衣さんはこっちを見て、げえつという顔。

あ、それならちゃんと翻訳できてますね。

「なによ、あいつ。あんたの翻訳魔法って狂ってるんじゃないの？  
オカマにしか聞こえないわよ、この中年ハゲデブの言葉」

「翻訳魔法は正常かと思います。この魔法、単に言葉の翻訳にとど  
まらず、感情や性格、地域性まで反映させて訳しているようです。  
あの魔法使いはお嬢様のおっしゃるとおり、オカマのようです」

魔来子さんが肯定してくれた。  
当の本人は怒り狂っている。

「こ、この、麗しきオネクターブ様を、ハゲだのデブだのというのは、許せませんよお！」

オツケー、とりあえず全員の会話は成立したみたいだ。

「オカマというのは許します。もっと言ってちょうだい」

佑衣さんの顔は、怒っているのか、泣いているのか、何とも言えない表情になっている。

「オカマの魔法使いだなんて……こっちってどういう世界なの？」

「で、オネクターブ、話を戻すぞ。お前、村について、何か知っているのか？」

「それよ、それ。そうこなくっちゃ。村はもうないわ。壊滅したのよ。いいえ、壊滅させたのよ、この、あたしが！」

「お、お前だつて、村の出身者だろう！それが、何だつて！？」

「あんな村なんかどうでもいいわよ！この、あたしを、追放したのよ！村一番の、優秀で、美目麗しく、才能豊かな、このあたし、を！！だから、あたしは、村を、壊滅、して、さしあげたの。当然の報いだと思いますこと？ほーほほっほほおほほおお、ごほっ」

こいつが追放されたことは知っていた。

その理由までは知らなかった。関心もなかったし。

おかしな奴だったとは聞いていたけど、ここまで変な奴だったのか。だから、追放されたのか。

そして、それを逆恨みして・・・

「で、でも、長老はお前より強い！それに僕の父さんや母さんがいたはずだ。一人では叶わなくても、みんなでかかれば、お前になんか・・・」

「あたしもそれぐらい、考えますつてよあ。だ・か・ら、先にフェルゼンシュタイン伯爵の東の軍勢に突入してもらったの。軍隊に攻め込まれてオタオタしてる皆さんは、簡単に逝ってもらいましたわあ。るん。そうそう、今、あたくしは、フェルゼンシュタイン伯爵のところにご厄介になってますわん」

「お、お前、自分の仲間を燃やしたってのか!？」

「あらん、役立たずは口を割る前に葬り去るのは鉄則でしょ？もつとも仲間なんかじゃなくてよ。単なる消耗品。使い捨て。ってポイツ！」

こいつのせいで、このアホのせいで村は、村はなくなってしまったのか？

みんなは本当にいなくなってしまったのか!？

もう、頭の中がパニックだ！

こいつを、殺してやる！みんなの、弔いを、今する!!

## 20・オカマな魔法使い（後書き）

オカマの魔法使いは、なかなかいないと思って作りました。  
どうかいたら、ごめんなさい。  
笑っていただければ、最高です。

21・「あたしが魔法少女よ！（ウソ）」

僕が拳を握りしめ、魔法力を集中したとき！

「だめだ、あたし、どうしようもなく、こいつ、ダメだ！」

佑衣さんが叫ぶと、彼女の持っていた銃が火を噴いた！

僕は呆氣にとられていた。

「あたしは、こいつを生理的に受け付けない！！」

佑衣さんは声高に叫ぶ！

腰のところに当てた銃から連続発射！（後で教えてくれたけど「腰だめの姿勢」だって）

「その意見、異論ございません！」

魔来子さんの拳銃も発砲する。

弾丸を必死でよけているオネクタープ。

いや、防御魔法も効いているのだろう。

「ちょっと止めなさいよ。当たったら死んじゃうじゃないの、死んだら痛いでしょー！」

「お前なんか、百回でも千回でも死ねばいいのよ！この、中年ハゲ、脂性デブ！気色悪いド変態！！」

やべっ！

オネクターブはそんなに甘い奴じゃない！  
僕は慌てて防御魔法を唱えた。

キン！

光の壁が周りを囲むのと同時に、その壁にグングニルの槍が突き刺さっていた。

その槍はパツと光になって消し飛ぶ。

「ほほお、ヤーコブ、やるようになったじゃないの。村を見捨てて逃げ出した、弱虫ヤーコブのくせに」

その言葉に、また我を忘れそうになる。

「それより、その女！」

指さす先には佑衣さん。魔来子さんが前に立って、防護している。

「その言葉といい、性格といい、不思議な飛び道具を使うことといい、なによりヤーコブが連れてきた少女……そうね、わかつたわよ。あんたが……あの、伝説の魔法少女ね！」

は、はあ……？

いや、魔法少女は実はこっちの年上の魔……グフツ、痛てえ！  
佑衣さんの肘鉄と魔来子さんの踵が僕を痛めつける。

「ふ、ふ、ふ、ばれちゃあしょうがないわね。さすが、大魔法使い。そうよ、あたしが魔法少女よ！恐れ入ったかあ……！」

大威張りで自慢する佑衣さん。

嘘つきだ、佑衣さん、あんた、大嘘つきだあ！

（はったりと言ってください）  
小声で魔来子さんが抗議。

「さっさと負けを認めて、そこにひれ伏しなさい！命ぐらいは助けてあげてもいいわよ。犬扱いぐらい、してあげる。1分たったら、縛り首だけどね！」

「おだまり、お黙り、お黙りー！！」

茹で蛸のように真っ赤になったオネクターブ。

「小娘、この、あたしに対して、えらそうな口をきいたことを絶対に後悔させてあげるわ。あんたは必ず、あたしの、この手で、殺してあげる」

そう言ったときだった。

柱時計の鐘の音のような、ぼーんという大きな音が響いた。  
いきりたっていたオネクターブが急に落ち着く。

「残念ね。今、ここで決着付けてあげようと思ってたんだけど、邪魔が入ったわ。フェルゼンシュタイン伯爵のお呼び出しなの。すぐに行かないと、ご機嫌が悪くなるから、これで消えるけど、いいかと教えといてあげる。」

これから、フェルゼンシュタイン伯爵の”竜”空中軍がやってくるわ。うまく逃げてよね。あたしがとどめを刺す前にやられちゃうなんて、許さないから」

それだけ言うと、風の音とともに姿が消えた。

「なによ、あいつ……」

そう佑衣さんがつぶやいたとき、消えたはずのオネクターブが舞い戻ってきた。

「ほーほほほほほつっ、あたしとしたことが！お名前、聞き忘れましたわ。ヤーコブはわかっていますから、その魔法少女と年増のおばさん、お名前教えてくださいませ！決して、呪いなんかかけませんから」

「魔法少女の名前は佑衣、年・・・じゃない！そのメイドの魔来子さんだ！」

危ない、あぶない。危うく地雷を踏むところだった。もう既に魔来子さんの銃口が僕を睨んでいる。

「おばさんでも許せませんが、年増は完全に犯罪です。あなたの方が、はるかに年上でございます！」

「おほほほほほおほ、熟した中年の魅力と言ってちょうだい。腐る直前が一番おいしいってね。では、アディオス・アミーゴお！」

「腐れ中年デブハゲー！！」

佑衣さんの叫びは、オネクターブが起こした風の音にかき消されていった。

佑衣さんはヘタヘタツと座り込んだ。

「疲れた。あいつの相手は、すごく疲れる・・・」

「ラバ様、名前教えてよかったのでしょいか。本当に呪いをかけら

れるとか・・・」

「本人がかけないって言っているので、大丈夫でしょう。そう言うところでは嘘はつかない奴なんです。自分の能力に絶対の自信があるので、嘘をつく必要なんかないと思っています奴なんです。」

僕は落ちている荷物を拾った。

「でも、”竜” 空中軍がくるのは間違いないでしょう。それまでに村をこの目で確認したいのです。時間がないと思いますが、お願いします」

21・「あたしが魔法少女よ！（ウソ）」（後書き）

アクセス数減少傾向。見なきゃよかった。  
ちよつと意欲なし。

気分が立ち直ってなかったら、ごめんなさい。

## 22・絶望の淵から（前書き）

この話、書いていたら、涙ポロポロになった。  
津波の被害が頭に浮かんだ。

ラバの感情に浸食されたというのもある。

もし、気分を害されたのなら、お詫び申し上げます。  
そんな写実力ないはずだけど。

## 22・絶望の淵から

わかっていたつもりだった。

松明と化した兵士も、オネクターブも示唆していた。

村が以前とは違う姿になっていることも、近づけばわかってきた。

壊れた家、焼け残った柱。放棄された家財。

そして、いるはずの人たちの姿がない。

敵の姿もないことはありがたいけど。

村の外れに僕たちは立つ。

「私はここで警戒に残ります。ラバ様、時間がありません。できるだけ早く、そして心置きなく、お願いします」

そうですね、魔来子さん。でも、もう、僕、足が震えているんですけど……

その足を動かして、村に入る。

「佑衣さん？」

「魔来子さんが付いてって。一人は不用心だからって」

ありがとう。本当に僕一人だったら、どうなるかわからない。

二人で村の中心部に入る。

記憶がよみがえる。このあたりは友達のいえ。こっちは親戚、そして……

「ここは僕の家……だった」

「……焼けちゃってる」

残っているのは土壁、柱。後はめちゃくちや。あたりを歩き回ってみても、人の気配はない。

なんだろう、この感じ。

大変なことになっているんだけど、まるでそんな感じがしない。まるで人ごとのように見ている自分がいる。

どつかで感情の線が切れちゃってるみたい。小さな時遊んでいたおもちゃが落ちていた。それを見ても、感情がわき上がってこない。

ふと、見上げた。

そこには前を変わらない大木が立っている。

「ああ、これは無傷だ……。うちの裏庭に立っていた木なんだ。この木の下で、みんなで食事したり、友達と遊んだり、こいつにより登ったりしてたんだ……」

みんなの笑顔が、笑い声が聞こえてくるみたいだ。

怒ったり泣いたりしたこと。

一緒に走り回ったり、じゃれ合ったりしたこと。

まるで、そっちが現実で、今、目の前にある方が夢のような気がする。

ふと、気がついた。

佑衣さんの手が僕の手を握ってる。

「ラバ、無理しないでいいよ……」

え？無理って？僕は無理なんか……

「泣きたいときは、泣いた方がいいんだよ」

その言葉を聞いて、僕は膝を折る。

内側でこらえていた物が、一気に吹き上がってくる。

ほこりっぽい地面に、ぽたぽたと染みの跡。

佑衣さんがそつと僕の頭を抱いてくれる。

頭の上にも、温かい水滴が落ちてくる。

（佑衣さんも泣いている……）

そう思ったら、もう抑えが効かなかった。

僕は大声を上げていた。

恥も外聞もなかった。

心のまま、思いっきり泣いていた。

□

□

□

中心部の広場にそれはあった。

以前は集会やお祭りに使われていた広場。

ここに大きな土まんじゅうがあった。

まだ真新しい。

近寄ろうとした佑衣さんを止めた。

「もういいよ、佑衣さん。これ以上いく必要はない。ここにみんな眠っているんだ。これがわかれば、もういい」

僕はそつと頭を垂れた。

佑衣さんも両手を合わせてくれた。

みんなを助けることができなかった。  
村を護ることができなかった。

僕には何もできなかった。  
心には無力感しかない。

これで、佑衣さんや魔来子さんを護るなんて・・・  
かえって足手まといなだけじゃないのか。

『お嬢様、ラバ様。敵が現れたようです。至急お戻りください』

なんか、魔来子さんの言葉が意味をなさない。

このまま、ここで殺されたって別にかまわない・・・

「ね、ラバ、わかるよ。心、折れるよね、あたしにも経験ある」

うん・・・

「でも、覚えてる？あんだ、あたしを護るって、約束しなかったっけ？魔来子さん、そう、うれしそうに言ってたんだけど」

ああ、そう言えばそうでしたね・・・でも・・・

「でももへったくれもない。男が一度約束したことぐらい守れなくて、あたし達だの村のみんなだの護れるって思ってるの？ヘタレだつてことはわかってるけど、時と場合によりけりでしょ！？どうするの、死ぬにしたってこのまま座して死を待つのか？命かけて護ってからののか？どうすんの！？」

言葉と同時に飛んできた蹴りをかわす。

ああ、そうでしたね。

僕にはまだやることがいっぱいあるんですけど。  
精一杯やったら、あとは天に任せましょう。

そうしたら、天国のみんなも笑顔で僕を迎えてくれるかもしれません。  
なるようにしかならないんですね。

ありがとうございます、佑衣さん。

走り始めた僕の顔に笑みが浮かぶのがわかった。

## 22・絶望の淵から（後書き）

ちょっと悪戯をして、活動報告しなかった。

でも、何人が読んでくれた。

アップすることを期待して来てくれている人がいる。

その期待は裏切れない。

やるだけやる。歯を食いしばって最後まで行く。その後は知らないけど。

はは、ラバとシンクロしてる。

23・**”竜”を狩れ！”獅子”を蹴散らせ！（前書き）**

辛かった。前の話は辛かった。

もう、書くのを止めようかと思っただくらい。

（欠番にするとか・・それで、話、通じるのか？）

なんとか、クリアしたら、

やっと心の安寧が戻ってきた。

23・”竜”を狩れ！”獅子”を蹴散らせ！

空を見上げれば、黒い雲霞のよう。

あれが”竜”空中軍だ。

「想定以上の大軍のようです」

「もしかすると、”竜”全軍かも知れませんね」

「あれと闘うのよ、ラバ、大丈夫？」

佑衣さんの問いに力強く頷く。もう大丈夫。やるしかない。

そんな僕を見て魔来子さんは微笑む。

「では、作戦どおりに。私は敵の背後から襲撃しますので、前方は心置きなくどうぞ」

「森の中を動き回ります。空き地では相手の方が有利になります」

「連絡は無線で。さ、やるわよ！」

三人が頷く。よし！

魔来子さんは荷物を背負うと、見つからないように地上すれすれを飛んでいった。

僕と佑衣さんは森の中で待ち構える。

「あの中に、あの中年ハゲデブ、いないかな？いたらいいのに」

「いませんよ。魔法力を見せつけたいから、単独行動してますよ」

僕は大型の銃を構える。グレネードランチャーというそうだ。結構な威力があるらしい。

「これでやつつけます。佑衣さんは撃ち漏らしを頼みます」

「あんたが泣くところ見てたら、腹が据わったわよ。お返ししてあげないかね」

ファインダーの中で敵が大きくなる。竜とそれに跨る兵士。

兜に鎧。腰には剣。手に持った槍や弓矢でいつでも攻撃できる態勢。間違いない、東の国の正規兵ども。

耳元に魔来子さんの声はいる。

『用意できました。相手はこちらに気がついていません。そちらのタイミングでどうぞ』

「いけ、ラバ！」

僕は引き金を引いた。

シュコーン。

ちよつと間の抜けたような感じで弾が飛び出していく。

”竜”軍の真ん中に飛び込んでいくと、次の瞬間、そこには火の玉があった。

燃え上がる竜たち、落ちていく兵士ども。吹っ飛ばされているやつらもいる。

たくさん竜が混乱し、逃げ惑い、ぶつかり合っている。

黒い雲の中に大きな穴が開いている。

「す、すげえ……」

「サーモバリック弾薬。爆風と高熱高压でやっつけるの。魔来子さんが近づくと危ないから、さっさと全部撃っちゃいましょう」

残りの弾が空中で太陽と化す。

それだけで”竜”軍の大半が壊滅したかも知れない。

混乱しきっている相手に、今度は飛翔した魔来子さんが襲いかかる。透明な糸の細かい網を相手に投げつける。

引っかけてもがけばもがくほど、絡まれて、地上に落っこちる。

「かすみ網。空飛ぶ奴を捕まえるには一番いいかもね」

あつちの世界は、平和だって聞いていたんですけど、

こんな魔法を持っているなんて、本当は恐ろしい世界じゃないですか？

逃げ出す奴らもいれば、攻撃を避けて、こっちに襲いかかってくる奴らもいる。

そんな連中には、僕の銃が火を噴く。

もう容赦はしない。

あの土まんじゅうを見たときから、僕の気持ちは決まっていた。

こいつらは報いを受けなければならない、

自分たちの行為の報復を受けなければならない、と。

佑衣さんも撃っている。彼女はゴム弾だけど、竜の羽根を引き裂くぐらいの威力はある。

当たり所が悪ければ、鎧甲の兵士だって気絶する。

敵の姿がほとんどなくなった頃だった。

『新手です。地上部隊のようです。南側から接近してきます』

魔来子さんが無線で伝えてくる。

「どんな奴らですか。何に載ってますか」

『この前のリザードが先導して、その後ろ、大型の四つ足の獣がいます』

”獅子”地上軍だ。

こんなに早く来るとは思っていなかった。

もしかすると、こっちに駐留していた部隊かもしれない。

たぶん、”竜”空中軍と同時に襲いかかる予定だったのだろう。

空の方が早めに着いてしまったということか。

そのタイムラグがこっちに有利に働いたみたいだ。

一緒にやってこられたら、少人数のこっちは不利だった。

こっちの世界では”竜”空中軍は無敵。

あっちの世界には、”飛行機”だとか、”ヘリコプター”という、空中兵力があるというけど、

こっちで空を飛ぶものは、魔法使いぐらいで他にないからだ。

一部では”気球”というものがあるとは聞いているけど、風任せに飛ぶだけでは戦えない。

でも、実は”獅子”地上軍の方が恐ろしい。

獅子そのものの巨大さ、そして獅子も鎧装甲を付けていて防御も強いこと。そしてその機動力。

生身の人間が戦って勝てるわけがない。

僕もそう思っていた。今までは。

でも、もう違う。

”竜” 空中軍ですら、蹴散らした。しかもこっちは無傷。  
佑衣さんや魔来子さんがいれば、無敵。

カガクという魔法が、こんなに強大だなんて思ってもいなかった。  
僕の魔法が全然役に立っていないところが、情けないけど。

”獅子” 共だって、恐るるに足らず！

「ラバ、一番怖いのは油断。いい、気を抜かないでよね！」

23.“竜”を狩れ！”獅子”を蹴散らせ！（後書き）

えー、ネタばらし。（笑）

ここにでてくる現代魔法・・・じゃなくて、現代兵器は全部実在の物。

グレネードランチャー：XM25 IAWS（Individual Airburst Weapon System）

アメリカ陸軍で採用されているエアバースト・グレネードランチャー。

撃っている弾薬：25×40mm低速グレネード、サーモバリック弾。

佑衣さんが撃っているのは9mm機関拳銃。

1999年に自衛隊が採用した9mm口径の短機関銃。

ラバにはH&K MP5。

ドイツのヘッケラー&コッホ（H&K）社の

短機関銃（SMG）。

（引用：Wikipedia）

爆発の様子とか威力とかは想像ですけど。

うーん、やっぱりこっちの世界の方が、絶対に怖い。（笑）

## 24・戦略的転進（要は敗北）（前書き）

おお、気が付けば4章が完ではありませんか。  
村の話、長かったですね。すみません。

でも、物語の発端ですから、しょうがないかな。  
おつきあい下さいまして有り難うございます。

## 24・戦略的転進（要は敗北）

”獅子”地上軍の足音が立てる猛烈な振動に耐えながら、僕は必死でグレネードランチャーの引き金を引いた。高性能爆弾が立て続けに飛んでいく。

効かない。

いや、それで一頭は吹っ飛んでも、すぐその後に続いてやってくる。キリがない。全部を吹っ飛ばすだけの弾薬がない。損害を省みず、どんどん突っ込んでくる。

「何よ！獅子っていうより、イノシシじゃない！」

『お嬢様、適切な表現ですが、状況に変わりありません』

魔来子さんは上空から煙幕弾を落として、視界を遮っているけど、前に進むしか脳がない奴らには効いてない。

『後退を、撤退してください！』

魔来子さんの叫び声を聞いて、反射的に後ろを見た。森が広がっているだけ。身を隠すような岩場も何もない平坦地。

「魔来子さん、すぐ迎えに来て！」

「何よ、ラバ！あんた、もう逃げ出す気？この、ヘタレ！！」  
抵抗する佑衣さんの手を引っ張って、走り出す。  
もう片手には荷物と銃。

どう考えたって、”獅子”どもの方が速い。  
魔来子さん、早く！

僕の願いに答えるかのように、目の前に魔来子さんが着地！

「この先の岩場まで、佑衣さんを連れて、飛んでください！」  
そう叫ぶと、佑衣さんを押しつける。

「ラバ様は？」

「僕はここで時間稼ぎをします。佑衣さんを置いてきたら、迎えに来てくださいね」

呆然と見ている魔来子さんの両腕の中で佑衣さんはもがいてる。

「ちょ、ちょっとラバ、ダメよ、こんなの、あたし、許さない！あたしも一緒に闘う！」

「早く！あいつらが来る！」

魔来子さんが飛翔する。

「必ず戻ってきます。それまでご無事で！」

「お願いします。僕もここで踏みつぶされたくはないですから！」

「ラバ！ラバー！」

佑衣さんの声が遠く、小さくなる。

代わりに大きくなるのは、獅子どもの足音。

なんか、夢で見たな、こんなの……僕は一人で笑った。  
でも、今度は夢と違うぞ。

「さて、オツフェンバッフの本懐、見せてやるとしますかね」  
そう僕はひとりごちた。

さっきまで僕たちがいたところに、わざと置いてきた袋。

その中身は弾薬で一杯。どこをどう刺激してやれば爆発するのか、もう分かっている。

もう少し近づけ、ほら、後ちよつと・・・・・・・・よし！

「雷よ、とどろけ！・・・落ちろ！！」

全魔法力で獅子の足下に雷を落とす。そこには置いてきた現代魔法の弾薬に・・・火がついた。

猛烈な爆発が起きる。火柱、轟音、強烈な爆風。入っていた爆弾が誘爆してる。

一緒に入っていた催涙弾も爆発した。

強烈な刺激にさしもの獅子も足が止まっている。

首を振るもの、地面に顔を擦りつけるもの、逆方向に逃げ出すもの・

・

兵士達も目をかきむしる者や、涙を流す者でいっぱいだ。

催涙ガスを逃れた敵が矢を射ってくる。

「アイギスの楯！」

空中に防御の光が集まり、矢を跳ね返す。

数本の矢が当たっても、現代魔法の防弾ベストが守ってくれている。

「火の精霊、姿を見せろ。そして燃え上がれ！」

「風の精霊、吹き荒れろ！その姿を現し、我が命を聞け！！」

立て続けに魔法を発動する。

燃え上がった兵士達が木立と共に吹っ飛ばされていく。

喘ぎながら僕は片膝を付いた。

「はあ．．．はあ．．．魔法力、使いすぎ。もう限界．．．」  
もうちょつと長持ちするやり方、勉強するんだった。  
やっぱり授業をさぼっちゃいけない。

．．．あ、村の学校、もうないんだな、これが。  
現れた魔来子さんに抱えられたとき、僕は半分気を失っていた。

○ ○ ○

「バカラバ、バカラバ！」

佑衣さんは泣きじゃくって、僕にしがみついていた。

僕が死ぬつもりだって、勘違いしたらしい。

いや、僕が残って足止めするしかないでしょう？そう言ったつもり．．．

「バカーッ！」

至近距離で鳩尾に一発。ウゲ！効くつ．．。

「今度こんなことしたら、許さないからね．．．いい？御主人様として下僕に言ってるのよ！分かった！？」

はい。分かりました．．．とほほ、苦しいのやら、うれしいのやら．．．

三人は高い岩場の上。

足下には、爆発や火炎の跡が見えている。獅子どもの残骸も転がっている。

「文字どおりの”死屍累々”でございますわね」

魔来子さん、ナイス。それ、シャレなんですな。

その敵も撤退したようだ。

遠くには壊滅した村も見えている。

「これからどうしましょうか？ラバ様」

「この先に、村の子供達の遊び場だった洞穴があります。そこで一夜を過ごしましょう」

その時だった。

微かな物音に、反射的に動いたのは佑衣さんだった。彼女のナイフが僕の背後に飛ぶ。

そこには少女が、その胸にはナイフが刺さっていた。その子は音も立てずにゆっくりと崩れ落ちる。佑衣さんの悲鳴が響いた。

## 24・戦略的転進（要は敗北）（後書き）

大丈夫です。この子は死にません。

今は死にそうですけど、ちゃんと元気になります。

うう、22話の後遺症（笑）。

## 25・治癒魔法（前書き）

やつとラバ以外の村の住民登場。

物語をクリアするのにキーを持っている人物って奴ですね。  
ちやんとお話しして、ヒントもらわないと・・・（笑）

## 25・治癒魔法

倒れた少女に駆け寄った僕に、魔来子さんが声をかける。

「抜かないで！出血がひどくなる可能性があります」

魔来子さんもそばに來ると、呼吸や脈拍を調べてる。

「心臓は外れているようです。肺まで影響がなければいいのですが・

・佑衣様、医療キットを取ってください・・・・佑衣様？」

佑衣さんは呆然とこっちを見てる。目がつつろだ。

「佑衣様・・・・・佑衣！」

魔来子さんの怒声に佑衣さんが反応する。大きく見開く瞳。

「起きてしまったことを悔やむのは後です。今できることにベストを尽くしてください！」

その声に、佑衣さんは慌てて医療キットを抱えて持ってくる。

「ナイフを抜いたら、すぐにガーゼで押さえつけてください。いきますよ。3、2、1・・はい！」

佑衣さんは急いで止血テープで傷をふさぐ。魔来子さんが弾力包帯を巻き付ける。

でも、赤い染みがゆつくりと広がってくる。

「あっちなら、救急車を呼んで病院に搬送なんですけど、こっちではこれが精一杯です。輸血とか輸液のキットまでは持ち込んでませんから・・・」

「僕が飛べるのなら、彼女を連れて“門”をくぐるのですが・・」

「無理でしょう。あそこには敵が待ち構えていると思います」  
魔来子さんの答に僕はため息をつく。

「まずは洞穴へ参りましょう。そこでもう少し様子を見ましょう」  
木の枝で作った臨時の担架に少女を乗せると、僕たちは洞穴へ向かった。

暗い洞窟の中、発光器があたりをぼんやりと照らしている。

床にシートを張って臨時のベッド。

そこに寝かせた娘の呼吸は浅く、早い。

額の汗を佑衣さんが拭き取っている。

佑衣さんより少し下の歳ぐらいだろうか。

柔らかい金色の髪。

「たぶん、村の子だと思います。ここへ逃げてきたんじゃないでしょうか」

「何とか助かって欲しいものです。もしかするとラバ様以外では唯一の村人かも……いえ、すみません」

いいですよ、魔来子さん。もう心は耐えられるようになってきます。

「でも、本当に何かいい方法がないのですか。カガクでも魔法でもいいから……」

「科学は手当ての道具がこれ以上ありません。魔法は……魔法？」

魔来子さんが話の途中で折る。何かいい方法を思いついたのだからか。

娘のそばへ行って座ると、じっと顔を見る。  
続けて佑衣さんの顔。

そして、魔来子さんは両手の指輪と、足のアンクレットを外す。  
彼女を覆っていた薄い青い光が消える。

魔来子さんはその道具を娘に付ける。

その子が淡い光に包まれた。

「ラバ様、佑衣様、こっちに来てみんなの手を取ってください」  
娘を取り囲むように三人が座る。

そして、手を取り合い、八本の手が輪を作る。

「佑衣様、ラバ様。この子が完治を願っていること、間違いないですよね」

僕たちは頷く。

「ラバ様、以前おっしゃってましたよね？具体的な魔法のイメージを浮かべることで発動できると」

「はい」

「それが正しければ、そしてあたしの直感が正しければ、ですけど、この子が元気になっているイメージを、三人のイメージをこの子が身につけた魔法道具に注ぎ込めば、治癒の魔法が発動するのではないかと思っていますのです」

ち、治癒魔法ヒーリングですか？

確かにその魔法はありますが、どうやって発動するかは知りませんでした。

そんな方法でうまく発動できるのですか？

「わかりません。ですが、他に思いつく方法がありません。何でもやってみましょう。傷が塞がり、元気に走り回っているイメージを思い浮かべてみてください」

目の前で苦しんでいる少女、この子が元気になるように！  
三人のイメージが混じり合う。

バラバラだった感覚が一体化し、そして少女に降りていく。

そして、彼女を取り囲む黄色の光が、ふわんと強くなる。  
光の中、浅かった呼吸が落ち着いていた、規則正しいものになる。  
苦しそうな表情もどこか落ち着いて、安らかな感じだ。

「やった、治癒魔法が発動したみたいだ！」

「はい、成功のようです」

僕たちは手を離れた。でも、佑衣さんだけはずっとその手を握りしめている。

その様子を見て、魔来子さんは微笑む。

「佑衣様、今夜の番、お願いできますか？」

「喜んで！」

簡単に夕食を済ませて、僕は入り口で見張り番に立った。  
魔来子さんもやってきて、そばに座った。

外は星明かりだけの闇の世界。

「こっちの世界は電気がなくて、本当に暗いのですね」

「でもこれが自然かなあと。あつちの夜は明るすぎますよ」

「本当に……」

魔来子さんはくすりと笑った。

「さてラバ様、これからどうするおつもりですか？あの子は助かる見込みが立ちました。でも私たちが助かる見込みが立ちません」

## 25・治癒魔法（後書き）

後書きって、予告編に使うのか？

ここまで書いてやっとながが付いた。ううん、しまった……

少女の見たものは！そしてラバの身に起こる悲劇とは何か！？

次回：第26話 大魔法使い

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

こんなにかしら……

（ギャクになっただかなあ……？）

## 26・大魔法使い・・・か？（前書き）

少女の名前、クロエ・レ・フィユ。

クロエは『ダフニスとクロエ』から。

一応、オッフェンバッハと関係のある名曲。

レ・フィユはフランス語で少女かな？自信なし。

第二外国語はドイツ語だったんで・・・（汗）

## 26・大魔法使い・・・か？

朝が来た。

僕たちは交代で、少女の看護、入り口の見張り、睡眠を取った。

でも、僕はよく眠れなかった。

昨夜の魔来子さんの質問が頭にこびりついている。

「これからどのようなになりますか？

当初の目標、村の確認と村人の確認は最低限果たしました。村は消えてしまいました。この娘以外の村人も不明。門はたぶん、敵兵に押さえられているでしょう。私ならそうします。つまり、帰る道もないということです。武器、弾薬は底をつきました。食料も残り少ないです。補給がありません。時間がたてば立つだけ、こっちが不利になります。

さらに、どこに行くにしても、さらにあの娘というけが人も付いてきます。まさか、ここに残しておく気はないでしょう。我々は、これだけの不利な状況の中、逆転のための目標を見つけなければなりません」

佑衣さんが少女の横で目を覚ました。

寝ているときでさえ、手を握ったままにしている。

「看護の甲斐があつて傷口はほとんど塞がっていますわ。今日一日あれば、元通りになると思います」

魔来子さんが傷を調べて言った。

佑衣さんは本当にうれしそうな笑顔だ。

そしてその子も目を覚ました。

不思議そうな顔で僕たちを見ている。

「お腹すいた・・・」

最後の食料をガツガツ食っている。

仕方ございません、と魔来子さんは苦笑。

満足して落ち着いた彼女に、僕たちは話を聞いた。

その子の名前はクロエ。

やっぱり村の子だった。

軍勢が来たとき、たまたま山の方に来ていたらしい。

村に戻ろうとしたけど、怖くなって洞窟まで逃げてきたそうだ。

「でも村の近くまでは行っただんです。何人が捕まって、連れて行かれるのを見たら、怖くなつて・・・」

ま、待つて！連れて行かれたのを見た？

「生き残っている村人たちがいるんだ！」

「はい、もちろん殺されたりした人もいっぱい見たのですが、捕まったりして連れて行かれた人も見ました。連れて行かれた人がまだ生きてるかどうかわかりませんが・・・」

いや、それでも、生きている人がいるのなら、助けたい。

「いったいどこへ連れて行かれたのだろう」

「城と行っていたような気がします。どこの城かはわかりませんが・・・」

フェルゼンシュタイン伯爵の城。

きつとそうだ。東の国の領主。この軍勢のボス。そして、あのオネ

クターブの親分。

そこにみんなが捕まっている。

そこへ乗り込んでいつて・・・ダメだ。

カガクという魔法はもうネタ切れなんだ。武器も弾薬もない。どうやって、乗り込んで、尚かつ勝利すればいいんだろう？

「あ、あの・・・皆さんはどういう人なんですか？」

「あ、そういえばこっちの紹介をしてませんでしたね」

こちらは魔来子さん、すぐよく切れるメイドさん。何でも良く知っていますから、聞いてください。

「いえ、そんな。知ってることしか知りませんから。ほほほ」

こっちが佑衣さん。ちょっと年上かな。お姉さんですね。

「ごめんね。あたしが傷つけちゃって・・・」

でも、一晩中看護してたのは佑衣さんですから。許してあげてください。

「はい、佑衣お姉さん。宜しく願いします」

「かわいい！」

佑衣さんはぎゅうって抱きしめてる。

そして、僕は村の住民の、ヤーコブ・ラバ・オツフェンバッフです。

彼女の瞳が輝いた。

「オツフェンバッフの方なんですか！大魔法使いとお近づきになれるなんて……光栄です」

え、あ、いやあ……大魔法使いだなんて……照れるなあ。

佑衣さんがグイツと僕の手を引っ張る。

「クロエ、ダメよ。騙されちゃあ。こいつは落ちこぼれ。学校へ行ってもろくに勉強しないで遊んで、ろくな魔法も覚えてないバカよ」

クロエが僕の反対の手を引く。

「そんなことないです。オツフェンバッフの方はみんな、大魔法使いなんですから。もう、名門中の名門なんです。そんな方が魔法を使えないとかバカとかのはずないです」

クロエの瞳はもうキラキラ。

これって、もしかして、とても嬉しいけど、とても困ってしまう状況という事なんでしょうか？

魔来子さん、笑ってないで、何とかしてください！

## 26・大魔法使い・・・か？（後書き）

予告編というのは、ふりだけすごくて、中身がなくていいんでしょ？（笑）

さて、次回の予告。

クロエが加わり賑やかな一行。しかしラバの胸には不安がよぎる！

次回：第27話 魔法の国の女子会

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性あります。ご了承ください）

誰が待つもんかい・・・

## 27・魔法の国の女子会（前書き）

ハイスピードの回とまったりの回がありますな・・・

一応、あらずじに従って書いてはいます（時々脱線するけど）が、スピード感はその時の精神状態とかで変わりますね。

ああ、ラバを虐めるシーンがでてこない。寂しい・・・

## 27・魔法の国の女子会

なんだかおかしな話になってきた。

クロエから見れば、魔法使いは僕。(当たり前だけど)

魔来子さんは魔法道具をクロエに渡したままなので、魔法が使えない。

クロエは治癒のために魔法道具が必要。

佑衣さんはそもそも魔法少女じゃなかった。

つまり、魔法少女がいなくなっちゃったってこと。

魔法が使えるのが僕だけだって事は……

あれ？つまり僕が魔法少女の役もやることになる？えー！？

『魔法少女のラバです。よろしくねエ。(オネクターブ風に)』

……んなわけ、ねーじゃん！

どうすんだよ、これから……

そんな僕の葛藤をよそに、女三人で文字どおり姦しくしてる。

クロエは佑衣さんや魔来子さんの服が珍しいらしく、聞きまくっている。

「あっちの世界にはね、こういうの、いっぱいあるのよー」

「わあ、いいなあ。クロエも着てみたい！」

「事が終わったら、一緒にあっちにいこう！着せ替えごっこして遊ばー！」

「お茶とケーキもございますよ。是非、女子会を開きましょうね」

「行く行く。絶対行く！甘いもの、だーい好き！」

あのー、まだそんなレベルまで来てないんですけど・・・  
目の前の問題から目を背けてませんか？

「背けてないわよ。そもそもあんたが問題を持ってきたんじゃないの。自分で答えを考えなさいよ」

「そうですね。あくまであたし達はラバ様のお手伝いな訳ですから、やっぱりラバ様が主導していただかないと・・・」

そ、そんな、冷たいことを・・・確かに僕が主人公なわけですけど、

力不足な訳でして、お二人に助力をお願いしてここまでやってきた訳で・・・

「ヤーコブ様、やっぱり主人公なんですね。素敵！是非頑張ってください。ヤーコブ様なら、こんな敵簡単に蹴散らして、みんなを救ってくださいますよね？」

そんな瞳で見ないでください。心が痛みます。

「ヘタレよ、ヘタレ。こいつ。ちょっと魔法を使っただけで、ヘトヘトになってるんだから。血筋が良くても、できの悪い奴がいるでしょ。あれよ、あれ」

「そんなはずはありません。ヤーコブ様は村のみんなを救う救世主なんですよ、きっと」

その純真さが、かえって僕を傷つけます。  
今までの人生を反省するしかありません……

「ヤーコブ様の瞳、ちゃんと魔法使いの瞳になってるじゃありませんか。まだお目覚めになつてらっしゃらないだけで、本当は凄い力の持ち主なんですから。ね、ヤーコブ様？」

「魔法使いの瞳って何よ、ラバ？」

あ、魔法使いの瞳は左右で色が少し違うというんです。  
ほら、よく見ると、僕の瞳、ちよつと違うでしょ？  
僕の目をのぞき込んだ魔来子さんが言った。

「ワールデンブルグ症候群。虹彩異色症というものです。目の虹彩の色が左右で異なっているんですね」

程度の差はあっても、村人全員が持っているんです。これ。  
でも、特に魔法使いは左右の色の差がはっきりしてるっていう噂なんですけど。

「ですから、ヤーコブ様は大魔法使いなんです。あたしはヤーコブ様のお手伝い、喜んでいたします。なんなりとお申し付けください。でも、魔法も武術も何もできない婢女はしためですけど」

「あたしだって、手伝わないって言ってる訳じゃないわよ！ただ、頼り切るなって言ってるだけ。たまには自分で考えなさいよっていうこと」

「ラバ様、問題提起はしましたよね？現状はないないづくしになっ

てきていること。時間は相手に有利に働いていること。

しかも、次の目標もはつきりしましたよね？フェルゼンシュタイン伯爵のお城にいるとみられる村人を助けるんですよね？では、後はどうやるかを決めることになりますが？」

おっしゃるとおりです。でもそれに、うまい手が思いつかないんですよ。

魔法少女すらいなくなってしまうたんでは、切り札も何もない・・・

「愛と勇気でございます」

はあ？愛と勇気？

「あと、友情というのもございますけど、困ったときにはなんと断っても愛と勇気かと」

「血と汗と涙ってのはダメかなあ？人類の英知、夢と希望とか」

「クロエはねえ、うーんと、食べると元気が出る！」

まともりません。

進路が見えません。

どうすればいいんでしょうか！？

「でも、お二人は魔法少女なんですか？すごい。魔法少女って伝説なんでしょう？本当にいるなんて、思ってもませんでした」

「魔来子さんが魔法少女なだけで、あたしは全然。魔来子さんが羨ましいなあ」

佑衣さんは頭を振る。

「いいえ、お嬢様。魔法はコツが分かれば簡単なものですよ。ほら、治癒魔法がそうでしたでしょう？きつと、お嬢様もきっかけがあれば、使えるようになりますよ」

「じゃあ、頑張ってみようかなあ」

気がつくと、三人はじつと僕の顔を見ている。

「魔法少女はいなくなっても、やることが決まっているのなら、実行するだけではないのですか？」

## 27・魔法の国の女子会（後書き）

さて、次回の予告。

悩みに悩んで、ヘタレ、ラバの出した結論とは!?

次回：第28話 降伏の勧め

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

そろそろ、予告ネタがついてきた・・・（笑）

## 28・降伏の勧め（前書き）

もう少しで準備完了。

用意が出来たら、エンディングへ向けて一気呵成に向かうつもりです。

長い話におつきあい下さいまして有り難うございます。  
では、今回もよろしく！

## 28・降伏の勧め

それで本当にいいんでしょうか。

僕が決めちゃっていいんですか？

「あんたが決めなくて、どうするっての？この、ヘタレ！主役の意地を見せなって！」

佑衣さん、もしかして、僕の背中を押していてくれる？

「ここまで来たんですよ。ラバ様のお気持ち、わかっているつもりです。イヤならとくに反対しております」

魔来子さんの微笑み。何度も助けられています。

「ヤーコブ様に、あたし、ついていきまーす！」

クロエは・・・もしかして、脳天気？

信じよう。自分を信じよう。彼女たちを信じよう。

これで今までやってこれたんだ。僕を信用してついてきてくれたんだ。

ここで僕が気弱になってたんじゃあ、彼女たちだってイヤになる。

そうか、僕が腹を決めるまで、待っていてくれたんだ。

僕は彼女たちを見据えた。

「わかった。フェルゼンシュタイン伯爵の城に乗り込もう。そこで村のみんなを解放する。酷い闘い、辛い結果になるかも知れないけど、みんな覚悟はいい？」

三人は肯く。

「やれやれ、ヘタレは覚悟を決めるのに時間がかかるわねえ」

佑衣さんはため息をついた。

「ヤーコブ様はヘタレじゃないです。慎重なだけです」

ああ、クロエ。君は僕をとことんいい方に解釈してくれるだねえ。でもなんだか、佑衣さんが僕を見る目が冷たいんですけど・

「次の問題はどうかやってお城まで行くか、そして皆さんを解放するかです」

そこなんですよ。結局はそこで止まってしまっんです。

そういう僕に、魔来子さんは哀れみの眼差しを向ける。

「いいですか。あらゆる手段を考えて、可能性の低い物を捨てる。残った手段が一番成功の可能性があるので、それにかける。簡単な思考方法です」

は、はあ……で、それは何のことなんですか？僕にはさっぱり……

「ラバ様は普段ならどうやってフェルゼンシュタイン伯爵のお城へ行くのですか？」

「えっと、徒歩ですね。山越えがありますから、まあ急げば3日ぐらいかと……」

僕は指折り数えた。

「他に手段はないのですか？」

「飛翔術が使える魔法使いなら空を飛んで行けば2、3時間ですね」  
魔来子さんの飛翔術。あれなら一気に乗り込んでいける。

「ヤーコブ様、空が飛べるんですね！」

いえ、ごめんなさい。僕は飛べません。

「そうなんですか……ごめんなさい」

クロエの返事に佑衣さんが小さく舌打ちしてる。どうして？

「もう他に手段は思いつきませんか？」

……はあ、すみません。

「なんとまあ、頭の固いお人だこと。ラバ様、もっと柔軟な思考を持たないと、これから村の再興とかいろいろあるのに、やっていけませんよ」

戦闘も慣れてない、頭も固い、ヘタレ、いいとこなしですよ。

「ヤーコブ様を虐めないでください。いいところもいっぱいあるはずですから」

クロエがかばってくれる。

思わずクロエに微笑むと、笑みを返してくれた。

でも佑衣さんは唇を尖らせている。なぜに？

「では、降伏しましょう」

そうですね。降伏……って、コウフク？幸福じゃなくて、降伏？？

敵に降参することですよ。降伏って……

そんなの、ありなんですか！？

---

魔来子さんの説明してくれたプラン。

「村の人たちが城へ連れて行かれたと言うことは、我々が捕らえられた場合もそうなる可能性が高いと言うことです。無傷で捕まって、

敵の手で城へ連れて行かれる。そうすれば自動的に村の皆さんと合流できるわけです。

後はどうやって城を抜け出すかと言うことですが、ここでは城の様子も相手の状態もわかりません。出たとこ勝負になってしまいましたが、これが一番可能性が高いかと」

だから、降伏なんですか・・・思いつきませんでした。

「でも、捕まって殺されるとかにはなりませんか？」

「その時には目一杯抵抗しましょう。一泡も二泡も吹いてもらいます。でも、そんなことにはならないかと思っと思っていますが」

不思議そうな顔をする僕に、魔来子さんは丁寧に教えてくれた。しょうがないわねえという顔つきで・・・。

「我らが魔法少女は、」

ここでクスツと笑う。

「相手の”竜” 空中軍を壊滅させ、”獅子” 地上軍をも混乱状態としました。つまり、相手にとってはこの3人は恐るべき力を持った脅威なのです。それが投降するとなれば、殺すより味方につける、あるいは捕虜として利用価値を探す、そのように考えるのが普通です。」

私なら、簡単には殺しませんね。最低でも城までは連れていき、最高指導者、つまりフェルゼンシュタイン伯爵にお目通りいただきます。そこで殺すのか使うのかを判断していただきますね。

つまり現地サイドで殺すと言う結論を出すことはまずあり得ないと思います」

な、なるほど・・・

「あー、もうイライラする！」  
佑衣さんの叫び。

「この男はバカだってことはもうわかってるけど、優柔不断ってのは何とかしてよ。男なんでしょ。男らしく、もっとぐいぐい引っ張っててよ！」

地団駄踏んでる。

「ヤーコブ様は、ヤーコブ様は……もう少し、強引の方が、クロエの好みです」

はい、頑張ります……って、どうして、佑衣さん、クロエのこと、睨んでるの!？

## 28・降伏の勧め（後書き）

さて、次回の予告。

さあ、逆転の降伏作戦、目論見どおりにいくのかっ！

次回：第29話 お城へ行こう！

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

慣れてくると、意外に楽しい？予告編。

## 29・お城へ行こう！（前書き）

今回のお話し。

口先とハツタリと魔法でどこまで通じるのか。

これだけだと、どっかの政治と同じような気がする？  
ハツタリで政治できるものなら、やってくださいよ。

・・・

た、楽しんでください！（汗）

## 29・お城へ行こう！

先頭のクロエが持っているのは、太い枝に白い布を付けた旗。その後ろに魔来子さんがついていてる。

さらにその後ろに佑衣さんと僕。

なんか、佑衣さんは言いたげなんだけど、僕が話しかけようとするとそっぽを向く。  
なんなんだ？

「ね、魔来子様。この白い旗って何の意味なんですか？」

「あっちの世界ではね、これで降伏の合図なんですよ」

「へえー、ヤーコブ様、こっちでの降伏の合図って、何ですか？」

「あー………何だろうねえ？」

僕は頭をかく。

「ラバは何にも知らないんだから」

佑衣さん、ねえ、本当に僕はなにかしましたか？  
何を怒っているんですか？

○ ○ ○

敵の部隊は村のあった場所にあることは、丘の上から見てわかっている。

そこに向かって四人はどんどん坂を下っていった。

昨日の激戦地には、まだくすぶっている残骸も、銃弾の薬莢も転がっていた。

焦げくさい臭い。かすみ網の破片。全部が戦いの余韻だ。

そこでのっそりと現れたのが敵の兵士。  
土を掘る鍬に似た道具を抱えている。

これから穴を掘って残骸を片づけるつもりなのか。

「おい、そこのお前！」

立ち止まった佑衣さんが声をあげた。

声をかけられた兵士は辺りをキョロキョロ見回している。  
まるで声をかけられたのが自分でないことを確認したいみたいだ。

「そのの、キョロキョロしてる、お前だ！」

ふたたび声をあげる佑衣さん。

その兵士は諦めたように、こつちを向く。

「お、オラに声をかけたのは、お前か？」

「他に誰がいる。耳が遠いのか、それとも頭が悪いのか？」

佑衣さんがにらみつけている。

「あー、両方とも悪いだよ。ついでに、顔も悪いだよ」

「それは認める・・・じゃない！おのれ、私を魔法少女と知つての  
狼藉か！！」

「ま、魔法少女・・・知ってる。でも、そんな小娘なのか？」

「見せてやる。今、ここで魔法少女の力、見せてやる！雷、落ちろ  
！！」

何も起きない、起こるはずがない。

ゴン！

思いつきり、足を踏まれた。魔来子さんが睨んでる。

あ、ごめん。僕が悪いのか・・・

佑衣さんが急に言うから、タイミング、外しちゃったよ。

お願い、もう一回やってくれない？

「あー、ちょっと呪文間違えたから、もう一回ね。・・・雷よ、落ちろ！」

その声にあわせて僕はこっそり魔法を発動する。

巨大な雷が、背後の太木に落ちる。

轟音と、木の裂ける音に思わず兵士は身をすくめる。

「す、すげえな・・・やっぱ、魔法少女なんだな・・・で、その魔法少女がオラに何の用なんだ？」

「降伏してやるから、フェルゼンシュタインのお城に連れて行け！」

あ、あの、佑衣さん。それって降伏した者の言い方とは違うような気がするんですけど・・・

「いいんですか？これで・・・」

「いいじゃありませんか。おもしろそうだから、これでやってみましょうよ」

小声で魔来子さんが答える。くすくす笑いながら。

魔来子さんて、物事をおもしろいの物差しで決める人だったんだ。

あ・・・もしかして、あの人形の件も、おもしろそうだったこと

でやったんですか!?

「今まで、そうやって決めてきたんですか?」

「あら、今頃お気づきになったんですの? おっほほほほ  
勝てない。魔来子さんには絶対に勝てない。」

佑衣さんの方も勝負がつきそうだった。

「どっちだ! 連れて行くのか、行かないのか!?」

「じよ、上司に相談するから、待ってくれ・・・」

「ダメだ、お前が決める! すぐ決める! 今すぐ決断しろ!」

「もう、わめかないでくれ・・・わかったよ。言うとおりにするよ・・・」

なんと、佑衣さんの言うとおりになっていた。

竜が用意されて、それに載ってお城に行くことになりそうだ。

「いい、降伏してあげるんだから、丁寧扱いなさい! 粗相があったら、降伏しないわよ! わかった!?」

「わかった。わかったからおとなしく、こいつの背に載ってくれ。  
後は城までちゃんと案内するから」

完全に腰が引けている相手。

どうでもいいから、早く消えてくれ、そんな感じが伝わってくる。

丁寧に僕と佑衣さん、クロエと魔来子さんがそれぞれ竜の背中の  
のせられる。

そして竜は一気に大空へ舞い上がった。

目の下には、一面の森の緑。その中でどんどん遠ざかる茶色い村。また必ずここに帰ってくるから、そう僕は誓う。

強い風で佑衣さんの長い髪の毛が舞う。

甘い香りが僕の腕の中の佑衣さんから漂ってくる。

（いい匂いだな・・・）

佑衣さんが僕にもたれかかってくる。

「ラバ・・・ちょっと疲れた。休んでいい？」

「うん。佑衣さん頑張ってるから、お城に着くまで僕が護ってるよ」

「ダメよ、それじゃあ・・・お城についても、その後も、ちゃんと護ってよね」

「うん」

なんか今、佑衣さん、気になるようなこと言ったような・・・気のせいかな・・・？

佑衣さんは静かな寝息をたて始めた。

あっちの竜の背中じゃあ、ぎゃあぎゃあ騒がしい。

「なんで、クロエがヤーコブ様と一緒にではないんですか？あっちが いい！」

「まあまあ、クロエ様は私がお嫌いですか？」

「そんなことないけど・・・やっぱりヤーコブ様！」

ば、僕は・・・ヤーコブよりラバの方が慣れちゃったのかなあ。

不謹慎みたいだけど、ずっとこのまま佑衣さんを腕の中に置いておきたいな。  
ごめんね、クロエ・・・

## 29・お城へ行こう！（後書き）

さて、次回の予告。

フェルゼンシュタイン伯爵の城へ乗り込む一行。さあ、そこで見るものは！？

次回： 第6章 城 第30話 謁見

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

予告編・・・なんかおもしろいぞ。（笑）

### 30・お風呂（前書き）

あ・・とうとうやっちまった。

予告編とサブタイトル、変わりました。

「謁見」まで話が行きませんでした。ごめんなさい。

### 30・お風呂

まだ雪が残る白い頂を越え、竜達は東へ飛んでいく。  
ゴツゴツとした岩山が続き、そして一段と高い山の上に大きな城はあった。

二匹の竜はそこへめがけて降りていく。

「佑衣さん、もうすぐ城に着くよ」

佑衣さんが寝ぼけた声で返事をしている間に、  
竜は翼を大きく広げて、着陸の態勢にはいる。  
お城の塔の上、狭い屋上に竜は舞い降りる。  
僕たちの竜のすぐ後に、魔来子さん達の竜も降りてきた。

屋上にいた兵士達が慌てて駆け寄ってくる。

僕たちの姿を見ると、ギョッとして立ち止まる。

降り立った佑衣さんが欠伸とともに大きく背伸びをするだけで、  
兵士達は後ずさりする。

「そうとう、私たちの噂は広がっているみたいですね」  
魔来子さんが囁いた。

パヒューン。

不思議な音がして、男が空中から飛び出してきた。  
ハゲ、デブ、魔法使いの服。あ、オネクターブじゃないか。

「な、なんですか？ 予定外の竜の訪問だなんて・・・ゲ！ あ、あなた達なんですか！？ なんですか？」

「降伏してやったのよ。歓迎しなさいよ」

「おお、魔法少女の佑衣。年増メイドの……えっと？」  
「だあっ！お約束か？」

「魔来子でございます！メイドですが、年増は余計です！！」

「あうう……魔来子ね……で、ヤーコブまでそろって、降伏ですって？」竜”空中軍を壊滅させ、”獅子”地上軍一個中隊も遁走させたあなた達が降伏？訳が分かりません。勝ったあなた達がなぜに降伏？」

オネクターブはオロオロしている。わかりやすいな、こいつ。

「その腐った頭を使って、一生懸命に考えなさいな。答えが出るなんて、期待してないけどね」

佑衣さんがオネクターブを指さす。

「小娘！」

オネクターブが手にした杖で佑衣さんを指す。こみかめに青筋が浮かび上がっている。

「思い出したわ。佑衣、あんたをこの手で殺してやる約束だったわね。今ここでその約束、果たしてあげる」

パリッ！

オネクターブの杖が火花を放つ。魔気が杖に集まってくる。

こいつ、本気だ。ヤバイ。

魔来子さんが佑衣さんの前に立ち、僕は防御魔法を用意する。

僕たちの周りで静電気がパチパチ音を立て、佑衣さんの髪を逆立たせる。

僕の右手に魔力を集中させたとき、一人の男が間に立っていた。

「伯爵様……」

オネクターブが叫んだ。

立っていたのはぼさぼさの白髪の高身の男。服装や装飾は立派だけど、やつれたような顔。目にも生気がない。時折、狂ったような色が混じり込む。

なんていうんだっけ、これ。あっちの世界の映像機械……

「受信状態が悪いBSみたい。もうすぐ、受信できませんって、案内されそう」

そうそう、それ。佑衣さんのつぶやいてる、それが言いたかったんです。

「……おもしろいじゃないか、オネクターブ。降伏してきたというからには、丁寧に扱え。お客様を余のところへ案内しろ……」

「はっ！」

映像は消えた。

「伯爵様の邪魔が入ったから、ここではこれ以上やらないけど、いい？あの約束はまだ有効だからね」

佑衣さんのところに近づくと、杖で佑衣さんを指す。

「フン、減らず口だったらなんぼでもたたけるわよ。やることやってから言いなさい。大魔法使いなんですよ！」

「この、この、このー!」  
と言いながらさらに近づいたオネクターブが鼻をひくひくと動かした。

「あんだ・・・臭いわよ。お風呂、入ってる?」  
佑衣さんは真っ赤になった。

「な、なんですって!? し、失礼な!」

あー、確かにこつちの世界に来てからはお風呂に入っていないなあ。魔来子さんもクロエも急に自分の服の匂いをかぎ始める。

「一応、香水でごまかしているつもりなのですが、やはり臭いますかしら・・・」

「クロエはもう、数日間、お風呂入ってないけど、クロエの家、壊したの、あんだ達じゃないのー!? ひつどーいーっ!」  
ぎゃあぎゃああと三人が喚く。

「えーい、うるさいわ! お風呂に行っちゃいなさい!」

オネクターブが杖をぐるぐるっと回した。

兵士達がわらわらと飛び出してくると、僕たちを担ぎ上げ、場内に運び込む。

ドブン、ザバン、バツシャン!

僕たちは巨大なお風呂に突っ込まれていた。  
兵士達と入れ替わって、たくさんの女たちが現れて、着ている物を剥がされる。

目の前で佑衣さんがたちまち下着姿にされていく・・・

「い、いやーっ！アホラバ、こっち見るんじゃない！！」

慌てて反対を見ると、そっちには既にあられもない姿になった魔来子さんが両手で身体を隠してる・・・

「ラバ様、どうか、目を伏せてくださいませ！！」

「あたしの裸なら見てもいいよ、ヤーコブ様！」

く、クロエ！い、いや、見たいけど、見ちゃいけない！

見たら、それこそ、佑衣さんがどういう反応を示すのか・・・  
考えるだけでも恐ろしい。

必死で目を閉じた僕の手を佑衣さんが引っ張る。

「出てけ、どアホー！！」

素っ裸で外に押し出された僕に、さっきまで着ていた衣類が投げつけられた。

そしてピシヤリと閉まったドア。

僕が悪いんじゃないのに・・・でも、ちょっとだけ、嬉しかったりして・・・

目の前に現れた足を見上げると、腹の出っ張ったハゲ・・・オネクターブ。

「あら、ヤーコブの裸、なかなか筋肉質で締まってるじゃないの。意外にあたし好みだわ。どう、男二人のお風呂つてのも、案外いいかも知れなくてよ？・・・」

か、勘弁してくれー！



### 30・お風呂（後書き）

さて、次回の予告。

お城のお風呂で綺麗さっぱり。気分も一新して、いよいよ伯爵とご対めん！

次回： 第6章 城 第31話 謁見

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

いけいけ、ラバ！どどん、脱げ！！（笑）

### 31・謁見（前書き）

お風呂は楽しかったかな？（笑）

風呂上がりの佑衣さんや魔来子さんは綺麗だろうなあ……

一度、見たいものです。

その時は、佑衣さんに刺し殺されないようにしないと……（爆）

さあ、今日の話はどうなるのかな？

### 31・謁見

風呂から上がった僕たちを、オネクターブが待ちかまえていた。一人一人、新しい衣装を着た僕たちの匂いを嗅いで綺麗かどうか確認している。

佑衣さんはあからさまにイヤそうな顔。

「伯爵様がお待ちかねよ。ついてらっしゃい」

連れて行かれたのは大広間。驚くほど高い天井。そこから差し込む陽光。

白いクロスのかかった長く大きなテーブル。たくさんの立派な椅子。今は誰もいない。衛兵が立っているだけ。

そして、そのテーブルの端に、一段と立派な椅子に腰掛けた人物。あの映像で見た、長身の男が腰掛けていた。

「伯爵様、捕虜を連れて参りました。村の住民、ヤーコブ・ラバ・オツフェンバッフ。同じく、クロエ・レ・フィユ。あちらの世界の住民、阿坂居 佑衣と多那香 魔来子でございます」

大広間につくまでの間にオネクターブに教えた名前。その名を聞くと、伯爵はゆっくりとこちらを向く。

生気のない表情。白い長髪の下の曇った瞳。薄く血の気のない唇。  
(この人は生きているのか・・・?)  
それが僕の第一印象。

伯爵の視線は、僕たちを通り過ぎて、魔来子さんへ。  
そこで止まってじっと彼女を見つめている。

お風呂上がりの彼女は、白いゆつたりとしたドレス。いつもは結い上げている茶色い髪の毛を長く解いている。化粧をしていなくても、十分に美しい素顔。長いまつげ。

「伯爵様、そんなに見つめられると、なんだか怖くなりますわ」  
少しぎこちない笑顔で魔来子さんは答えている。

「・・・似ているな・・・」  
伯爵はそう独りごちた。

「はい・・・？」  
「・・・いや、何でもない。単なる余の思い出、世迷い話に過ぎぬ・・・オネクターブ、この者達を夕餉の宴に招待する。準備するよに・・・もうよい、去ね・・・」  
「は・・・」

「村の人は、みんなはどこにいるのですか！？」  
話を聞いていた僕は思わず口を挟んだ。

「ヤーコブ！」  
オネクターブの制止。

「・・・よい、案内してやれ・・・」  
「は、御意に」

伯爵は椅子を回して、僕たちに背を向ける。  
オネクターブに追い出されるように、僕たちは大広間を出た。

「ふう、もう、あなた達が何かしでかすんじゃないかと、生きた心地がしなかったわ」

ハンケチを取り出すと、顔中を拭きまくっている。

「いつも、あんなに口数が少ない人なんですか、伯爵というのは・

」

オネクターブは首を横に振る。

「とんでもない、もつと話さないわ。”良きに計らえ”。これだけよ。あんなにしゃべった伯爵はここ数年で初めてだわ」

立ち止まった魔来子さんが後ろを振り向く。

大広間の閉まった巨大な扉を見つめ続けている。

「魔来子さん、どうかしたのですか・・・？」

佑衣さんの呼びかけにやっと魔来子さんはこっちを向いた。

「いいえ、私の思い違いだと思います・・・」

そう魔来子さんは呟いた。

オネクターブに案内されて長い螺旋階段を上って、塔の天頂へ。

「魔法を使えば、ふう、こんな、ふう、えらい目にあわなくて、ふう、すむのに・・・」

「だから、そんなデブになっちゃうんでしょ」

オネクターブは佑衣さんを睨みつけている。

その行き止まりの部屋、鉄格子の向こうに、捕らわれたみんなが閉じこめられていた。

声を聞いて、真っ先に飛び出していったのはクロエ。

「みんな、みんな・・・母さま、父さま！」

鉄格子の向こうから、手が伸びてきて、クロエを抱く。

「クロエ、無事でしたのね！」

「生きて、生きていらっしやっただんですね！母さま！父さま！！」

僕の姿を見て、みんなの歓声がわく。

「ヤーコブ！無事だったか！」

だけど、僕の視線は必死で探し求める。

父や、母は……………

「ヤーコブ、ヤーコブ！」

奥からよけるように走り寄ってくる女性。

「母さま、母さま！！」

鉄格子越えに僕たちはしっかりと抱き合った。

母の温かい、優しいぬくもりと香り。ああ、母さま、ご無事で何より……………

「母さま、父さまは？」

「ごめんなさい、ヤーコブ。父は戦闘で……………」

そうですか。村で見たあの様子から、そうかも知れないとは覚悟はしておりました。

それでも、やはり、涙は湧いてくるものですね。

母さまが生きてらっしゃるだけでも、果報者かも知れません。

「ヤーコブ、しかし、貴方も捕まったということですか？」

「こちらの女性はどいう方ですか？」

みんなが口々に尋ねてくる。

僕は衛兵に頼んで、みんなを牢の中に入れてもらっ

「自分から牢屋に入る捕虜なんて、初めてだわあ」

オネクターブは首を振りながら階下へ降りていった。

僕は佑衣さんと魔来子さんを紹介する。

あっちの世界の人と言つと、みんなが驚きの声をあげる。

「魔法少女なんです。このお二人は」

僕の発言に、みんなは一斉に歓声を上げた。

「これで助かるぞ！」

「すぐに出してくれ！村に連れ帰ってくれ！！」

口々にわめき立てる。

魔来子さんは佑衣さんと目を合わせると、ゆっくりと口を開いた。

「私たちは、あっちの世界から来ました。カガクという魔法を持っ

て、皆さんを救いたいというラバ・・・ヤーコブ様の希望を叶える

ために。でも、残念ながら知らせをしなければなりません。私たちは、

皆さんを救うことが出来ません」

### 31・謁見（後書き）

さて、次回の予告。

魔法少女もいなくなる、武器も弾薬もない、しかも「皆さんを救えない」？

いったいどうなる？この話。

次回：第6章 城 第32話 虜囚

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

### 32・虜囚（前書き）

佑衣さん・・・

あんた、魔来子さんから骨の髄まで、自立をたたき込まれたんだろ  
うねえ・・・

強い。

でも、そんな強い子が、ラバには、ふと素顔を見せるんだよねえ・・・  
かわいい。書いて楽しい娘です。佑衣は・・・

### 32・魔囚

”皆さんを助けることが出来ない。”

魔来子さんのその発言に、みんなは押し黙った。

あまりに意外な発言だったのだ。

・・・魔法少女であるにもかかわらず、我々の救世主でない・・・？

「どうして・・・助けに来てくれたのではないのですか？」

「本当に、魔法少女なのですか？あなた達は！？」

みんなは口々に叫ぶ。

僕は両手をあげて、みんなに黙ってもらった。

「彼女たちは本当に魔法少女です。それはこの僕が保証します。でも、いくら魔法少女でも、その力にはもちろん限界があるのです。それをこれから説明します」

魔来子さんが説明を始める。

「私たちは、あちらの世界から、カガクという魔法を持ってこちらへ参りました。それは恐るべき力で、東の国の”竜”空中軍を壊滅させました。また、”獅子”地上軍一個中隊も撃破しました。魔法少女の力を、東の国の兵士達は骨の髄にまで、とことん思い知らされたのです」

みんなはおおっと歓声を上げる。

「しかし、この魔法もそれで尽きてしまいました。今、私たちが持っている魔法は、残りほんのわずかでしかありません。皆さんとあまり大差がない状態なのです」

みんなは下を向いた。

ようやく、僕たちの状況が分かってきたのだ。

「でも、でも、何か希望はないのですか？」

母さまの発言・・・

「あります！」

僕は断言した。みんなの目が一斉に僕を見る。

「目に見えるような力はもうないかも知れませんが、でも、彼女たちは魔法少女です。希望はあります。奇跡を起こす力があるはずなのです。皆さんの協力があれば、きっと奇跡が起きます。起こせます！」

ここが一番大切なところということで、三人の意見は一致した。昨日の夜、クロエが寝入った後で、僕たちは相談をした。

「どうやって、村の人たちを説得しましょうか？」

魔来子さんの悩みは切実な物だった。

武器も弾薬もなくした僕たちは、もはや何もないのと同じだった。あるのは護身用の多少の武器と、僕と魔来子さんの魔法ぐらい。

それすら、お城に行けば取り上げられるだろうし、

僕や魔来子さんの魔法はオネクターブより強いかわからない。

そんな僕たちがいくら、魔法少女と声たかだかに言ってみたところで、信用されるだろうか。

どうやって、村人の信頼を得て、彼らの脱出に結びつけるのか。

「ウソやハツタリでは、すぐにばれてしまいます。そうになったら、絶対に信頼を得ることはできません」

僕たちは肯いた。

「正直に現状を説明し、尚かつ希望を持たせる。皆さんのお力をお借りして、全員で脱出する。これしかありません。この希望を持たせることが出来るのは、村の人の仲間である、ラバ様だけです。よそ者の私たちではできません。ですから、ラバ様、皆様の説得をお願いします」

みんなは僕の話聞いても、不安そうに囁きあっている。

魔来子さんが話し始める。

「これから私たちはこの城の秘密を暴きに行って参ります。私の直感は、この城には、何か、秘密があると言っております。

どういう訳か、伯爵は私たちに興味をお持ちのようです。これを利用できれば、この城の謎を解明することができると思います。その秘密や相手の隙をつくことが出来れば、ヤーコブ様の言う奇跡を起こすことが出来ると考えております。

どうか、皆さんのお力をお貸しください。一人一人が相手の隙をつく、なにかしら武器を用意する、そして時には闘う。そういう努力をして、みんなで力を合わせて脱出する、これしかありません。私たちの努力に皆さんのお力を、どうぞ、お貸し下さい。お願いします」

魔来子さんの発言を聞いても、みんなは押し黙っている。

仕方がないか、信頼を得るには時間がかかるものなのか……そう思った時だった。

今まで黙っていた佑衣さんが、すくつと立ち上がった。

「やるの、やらないの？」

単純な質問に、みんなが佑衣さんを見る。

「ここでこのまま死ぬの？それとも頑張って村に帰るの？」

みんなは顔を見合わせている。

「あたし、こういう他力本願な人たちって大嫌い。自分のしたいことは自分が努力して得るものじゃないの？あんだ達、助けてっていうだけで、何か努力してる？神様が助けてくれるのは、精一杯努力した後でしかないのよ。」

ラバ、こんな連中、助けたって、何にもなりやしない。さっさとあっちの世界に帰った方がいいみたいだわ！」

「なんて事を！」

「やるしかないじゃないか」

「そうだ、こんな娘っ子にバカにされて黙ってられるか！」

みんなは口々に言い始めた。

クロエの父さまが出てくる。

「みんなの気持ちは決まった。脱出できるよう俺たちも頑張る。あんだ達も頑張ってくれ。これでいいか、佑衣・・・魔法少女、佑衣」  
佑衣さんはニコツと笑うと、父さまと握手、そして僕にウィンクした。

佑衣さん、あんだ、ハツタリと駆け引きは天才的じゃないか？

魔来子さんがどうやって、教え込んだのか、聞きたいよ。

もう、僕は諦めかけていたんだから・・・

### 32・虜囚（後書き）

さて、次回の予告。

一度でいい、こんな豪勢な食事をしてみたい！そう思うのは作者だけか？

次回： 第6章 城 第33話 晚餐

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

### 33・晩餐（前書き）

ちよつといろいろあつて・・・落ち込み気味ですが、なんとか第33話あげました。辛いことがあつても、頑張つて書く。これしかないんです。他に方法はないんです。ごめんなさい。つて言つても通じないかも知れませんが、きっとこれでいいんですよ？（遠い目）

### 33・晚餐

僕たちは夕餉を呼びに来た召使いと一緒に牢屋を後にした。

もうその頃では、部屋のあちこちでこっそりと作戦が練られていた。脱出方法、武器の入手方法、人数の確認、誰が指揮をとるのか・・・そんな様子を見て、僕は安堵した。

絶望にうちひしがれているのではなく、運命に前向きに闘うこと。村の人たちがその姿勢を取り戻すこと。

端的に言えば、これがやってきた目的だったからだ。

後はほんの少しの手助けときっかけさえあれば・・・

暗くなり、照明の行き届かない城内は薄暗い。

クロエは僕のそばにくっついていてる。

「ヤーコブ様、なんだか怖いです・・・」

ろうそくの揺れ動く明かりは、自分の影すら怪物のように蠢かす。

「クロエは恐がりなのね・・・」

佑衣さん、ちょっと意地悪モード。

「ラバはビビりだけど、怖くないの？」

矛先をこっちに向けましたか。

「自分の影にはビビりませんが、これからどうなるかはちょっと怖いんです」

大広間の扉をくぐると、そこは別世界だった。

こうこうと煌めくガスランプの明かり。

白い布を多用した室内は反射で明るく照らされている。

大テーブルの上には、ご馳走の山。

花や装飾品が食卓を飾り、食器やグラスが煌びやか。僕たち一人一人に給仕やサービス係が付いてくる。

「オネクターブがない……んですか？」

「そちたちと余だけの夕餉にしると命じた」

普通なら乾杯で賑やかに宴が始まるところだけど、

伯爵のグラスが静かに持ち上げられることでスタート。

僕も佑衣さんもクロエもむさぼり食った。飲んだ。

品がないけど、洞窟で最後の食料を食べて以来、何も口にしていなかったのだから。

次々と運ばれる料理は、豪華で美味。

でも、そんな料理を前にしても、伯爵は静かにグラスを傾けているだけ。

（食べないのだろうか……いや、それより、オネクターブがない、今、

ここで伯爵に襲いかかって、人質にすれば、村の人の解放も、復讐も一気に片が付くチャンスじゃないか……）

グラスを片手に、口いっぱい料理をほおばった佑衣さんが僕に抱きついてくる。

「ラバあ、なんておいしい料理だろうねえ……食べてる？」

赤い顔の佑衣さん、酔っぱらいだあ。また飲み過ぎてる。

「ラバ、あんた、変なこと考えてるでしょ」

しがみついた佑衣さんが小声で囁く。

「気がついてないの？このみんな、服の下に武器を隠してるの」

僕は慌てて周りを見た。

スカートの膨らみ、上着から覗く剣、ズボンの横の膨らみにこやかな表情とは裏腹に、その視線は鋭い。

「柱の影とか壁の向こうにも隠れている雰囲気、ありありよ。ちょっとでも変な動きがあれば、串刺しになること間違いなし。今は・・・」

そういうと、佑衣さんは大声で叫ぶ。

「こんなおいしい料理、こっちの世界に来て初めてなんだから思いっきり食べなきゃ！オネクターブがあんな肥満体になるのが、理解できたわあ！」

騒ぐ僕たちには目もくれず、伯爵はグラスを傾ける。

いや、伯爵の目は魔来子さんに注視している。

魔来子さんはその視線に耐えながら、黙々と食べている。

時折、伯爵の様子をうかがうように視線をあげている。

「・・・・・本当に似ているな・・・・」

伯爵の独り言。

「伯爵様、前にもそのようなことを。私はどなたに似ているとおっしゃりたいのでしょうか」

食べ終えた魔来子さんがグラスを持って問いかける。

「・・・・・昔のこと。我が心にとまった少女がいた。その少女は消えてしまった。

しかし我が心には永遠に残っている。その少女に似ているというのだ・・・・・」

魔来子さんは笑う。

「いくらなんでも、少女と呼ばれる歳ではございませんわ。私ごと  
きでは、

その心の少女にもご迷惑な話でございましょう。他人のそら似とい  
うものでございます」

「・・・そのとおりだ。髪の色も、瞳の色も違う。だが、あときの  
少女が成長していれば、きっとそなたのような美しい女性になっ  
ておるのだろうかと・・・

いや、余迷い事だ。忘れてくれ・・・食事には満足されたか・・・  
では、そろそろお開きということに・・・」

さらに僕たちを驚かせたもの。

食堂の後、案内されたのが、立派な客間の見事なベッド。  
どう考えたって、捕虜と言うよりはお客様扱いじゃないか。

「クロエ・・・クロエ、ヤーコブ様と一緒に寝たいけど・・・  
それ以上に、父さま、母さまと久しぶりに一緒に寝たい・・・ヤ  
ーコブ様、ごめんなさい・・・」

うつん、それが当然だと僕も思うよ。

召使いに案内されて、クロエは部屋を出ていった。

久しぶりにベッドじゃないか・・・

ぐっすりと眠ることが出来そうだ。

あ・・・ベッドが二つ？

で、でも、僕と佑衣さんと魔来子さんの三人だよな・・・？

つまり、誰かは二人一緒に寝ることになるんだよね？

普通、佑衣さんと魔来子さんが一緒だよな・・・

「申し訳ありませんが、今夜は私一人で眠らせていただけませんか？そちらのベッドで佑衣様、ラバ様でお休みいただくと言うことでごめんなさい。今夜は無理を言って申し訳ありません」  
珍しく、魔来子さんがそう主張する。

え、僕はかまいませんが、ゆ、佑衣さんと同じベッドで眠る・・・  
？そう想像した瞬間！

佑衣さんの蹴りが股間に・・・・・・・・ジゴク！な、なんて事を・・・  
・！！

「バカラバは、発情期の犬みたいに腰振ってんじゃないわよ。犬は床で寝ればいいの、床で！」

### 33・晚餐（後書き）

さて、次回の予告。

久しぶりに佑衣さんの蹴りが炸裂！でも、イタイよ、これは・・・

次回： 第6章 城 第34話 幽霊

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更の可能性があります。ご了承ください）

### 34・幽霊（前書き）

落ち着いたと、落ち着いてきたと思います。

無力感はさして違いはないけど、何とかならないレベルでない。

♪時は親切な友達ってやつですね・・・

### 34・幽霊

「佑衣さん、・・・お願い」

「ダメ」

いや、でも床は石張りだし、ここで寝るのは冷たすぎます・・・

「佑衣さん、・・・お願いします。どうか、助けて・・・」

「全っ然、ダメ」

佑衣さんは自分だけ、シーツにくるまって、ベッドで横になっている。

ベッドもシーツも1枚だけというのが、問題なんです。

魔来子さんは隣のベッドで、もう寝息を立てているし・・・

「絶対に何もしませんから、変なことしたら、部屋から追い出してもいいです。ね、もし、風邪でも引いたら、佑衣さんを護ることが出来なくなるかも知れませんよ。お願いします。どうか、僕をベッドにあげてください」

やっと佑衣さんはこっちを向いてくれた。

「ほんとにしない・・・?」

「しません、絶対にしません。したら半殺しでいいです」

「しないのね・・・?」

そういいながら、佑衣さんは枕元に何か置く。

よく見れば、さっきの食事使ったナイフ。

いつの間にパクってきたんですか?

「護身用と思ってね。愛用のナイフ、取られちゃったからこれでも役にたつかなって。いい？ラバ。もし、変なことしたら、このナイフがあんたの喉頸、かつきるからね。わかった？」  
わかりました。半殺しなんて甘いことじゃすまないってことですね。

絶対に、一切、なんにもしません。ホントです。

ようやく背中合わせで僕たちはシートにくるまった。  
柔らかなベッドの感触が有り難い。

でも、佑衣さん、その、つぶやき、  
「つまらない男・・・」  
ってどういう意味なんですか？

ヤバイよ・・・全然寝られない。  
佑衣さんの温かい体温が背中越しに感じられる。  
これだけ密着してるってのは、初めてなんじゃないですか？  
体は疲れているのに、頭は冴えちゃってる。  
寝返りしようとしても、佑衣さんの背中で動けない。  
心臓だけがむやみに大きく鼓動してる。

ふと、佑衣さんの手が動いているのに気がついた。  
僕の手を探し出すと、ぎゅっと握ってくる。  
・・・え、それって佑衣さん、どういことですか？  
もしかすると、そういう意味なんですか！？

「バカラバ、勘違いしないでよ。ドアのところ、気付いてない？」

佑衣さんが小声で囁く。

ドア・・・？

そつと見ると・・・青い光がドアの隙間から差し込んでくる。揺れているように見えるのは、光の持ち主が動いているせいかな。そして、次の瞬間、僕は息を呑んだ。

ドアのところには、青い光と共に、伯爵が立っていた。ドアは閉まったままなのに。

伯爵はゆつくりと動きながら、ベッドを伺っている。顔をのぞき込まれて、佑衣さんの手がギュツと強く握られる。必死で寝たふりの佑衣さん。でも緊張が手から伝わってくる。続けて僕。でもすぐに視線は離れていく。

最後に魔来子さんのベッドをのぞき込むと・・・そこで動かなくなる。

魔来子さんの寝顔を伯爵はじつと見ている。

（ど、どういふつもりなんでしょうか？）

（あたしが知るわけ、ないじゃないの！）

まるで永遠とも感じられるような時間の後、伯爵は動き始める。

ドアを通り抜けたのか、それともそこで消えたのかわからなかったけど、

青い光が消えると同時に伯爵の姿も消えていた。

僕が上半身を起こすと、佑衣さんも一緒に起きる。

「いったいあれはなんだったんでしょうか？」

佑衣さんは僕にぴったりと身を寄せている。

「わかんないわよ。わかるのは、魔来子さんにかくご執心ということ・・・」

「そのようでございますわね」

そう言いながら、魔来子さんもむつくりと起きあがってきた。

わあ、びっくり。魔来子さんも寝たふりだったんですか！

「今夜、きっと今夜はなにかしらあるものと思いましたので、一人で寝させてくださいとお願いしましたが、まさかあのような形で現れるとは思ってもいませんでした。まるで、幽霊でございましたわね」

幽霊・・・死んだ人の魂のことですよね・・・

「では、伯爵は死んでいるのですか！？」

「まさか・・・少なくとも、昼間はそんな様子ではありませんでした。もっと・・・なんでしょう・・・生き霊とも言いますか、何かを私に言いたかったように見えました。それはいったい何でございましょうか・・・」

「魔来子さんに心当たりはないのですか？」

しがみついたままの佑衣さんが問いかける。

「伯爵はここでは絶対権力者なんですよ。その彼が、このような形で会わなければならない理由がわかりません。困りましたけど、困っていてもしょうがないので、眠りましょう。お休みなさいませ」  
そういうと、魔来子さんはさっさと横になってしまった。

僕と佑衣さんは顔を見合わせる。

何という神経の太さ・・・信じられない！

たった今まで、幽霊話で悩んでいた人とは思えない。  
どっか、羨ましい。

「ラバ、あんた、いつまでくっついてるつもりよ？」

え、これって佑衣さんがしがみついてきたハズ・・・

ど、どうしてナイフなんか持っているんですか？

「半殺しがいい？それとも床がいい？床が良ければ、今からでも床で寝てちょうだいね」

お、お願いです。そんな、殺生な・・・！？

### 34・幽霊（後書き）

さて、次回の予告。

幽霊話に決着？！

次回： 第6章 城 第35話・・・

ああ、サブタイトル、まだ未定ですう！すみません。  
刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更・・・するさ！絶対に）

### 35・黒の花嫁（前書き）

最初は普通に城の花嫁衣装としようとしてたのですが、なんかひねろうと思って。文金高島田の角隠しで走っていくイメージは笑えたのですが、いまいち。

次に思いついたのが、黒のウェディング。なんか魔来子さんのイメージにあうなあと思って採用しました。黒も礼服なので、悪くないぞっと。

長い足に黒のストッキング。いいなあ・・・（笑）

### 35・黒の花嫁

「おはよ、ラバ。なんか眠そうね」

ええ、そうなんですよ。佑衣さん。

結局、ベッドにはあげてくれた。

シーツは無し、佑衣さんの足下でだったら寝てよし、という条件だったけど、

意外に佑衣さん、寝相が悪かったんだ！

寝ている最中に、何回蹴られたことか……

ああ、眠い。

「こちらにお召し替え願います」

そう言いながら、召使いたちが衣装を持って入ってくる。

彼女たちに押し出されるように、僕は部屋を出た。

しばらくドアの外で待っていれば、思いもかけない佑衣さんの悲鳴。慌てて部屋に飛び込むと、そこには黒いドレスの魔来子さん。

全身をすっぽりと黒いドレスが覆っている。

手袋や靴、靴下まで黒。頭の上にも黒いベールがかかっている。

「な、何よ、これ……葬式じゃないの？ どういう意味？」

佑衣さんは呆然としてる。

あ……そうか、佑衣さん。それはこっちとあっちの世界の違い。

あっちの世界では、黒の服は葬儀用なんですか。

「これは最高級の結婚衣装なんです。こっちでは  
二人は僕の顔を見る。」

「黒が……ウエディングドレスなの？」

「最高級なのでございますか？」

そついうと、魔来子さんは生地を調べてる。

「そうですね。この手触り、最高級のシルクにも負けておりません。  
細やかな細工が入っております。ベテランの職人さんが丹念に作成  
したものですな」

「驚いた……でも、そういわれれば、色以外はこっちのウエデ  
ィングドレスと違いはなさそう」

鏡の前で魔来子さんは踊ってみせる。

軽やかな彼女の動きに、しなやかに舞うドレス。

「まるで何もつけていないような軽やかさでございます。ちょっと  
胸が窮屈な以外は、サイズもピッタリですわ」

動きを止めた魔来子さんは、僕たちを見る。

「これがウエディングドレスだということでしたら、ますます伯爵  
の真意を知らなければなりませんね」

控えている召使いたちに言う。

「伯爵様はどちらにお見えでしょうか」

「えっと、今の時間ならば、大広間で朝議の真っ最中かと思いき  
が。伯爵様のご命令は、部屋で待たせろとのこと……」

僕たちはその声を聞くと、部屋を飛び出す。

魔来子さんは先頭で黒いドレスをはためかして駆けていく。

「こ、困ります！おやめ下さい！どうか、・・・」

すつと佑衣さんが動くと、一瞬で相手の間合いにはいる。  
のど元にナイフを突きつけている。

「こっちこそお願い。どうか、こっちに手を出さないで。できるかぎり、犠牲は少なくしたいの。お願い、みんな、離れていてちょうだい」

そう言い放つと、すぐに僕たちに合流する。

「あれで、逃げてくれるといいけど・・・」

「一応、警告はしたんだから、もし何かあってもしょうがないわよ・  
ラバ、そろそろ兵士達がくるわよ。用意はいい？」

僕は肯く。

廊下を走って、角を曲がる。その先は大広間のドア。

予想どおり、そこには兵士達が集まっている。

こっちを見つけて走ってくる兵士達。

「ラバ、時間稼ぎ、お願いね」

「佑衣さんこそ、頑張って！」

僕は兵士達に向かって、魔法を起動。

「・・・地の神よ、その力をもって、大地に裂け目を穿て・・・」

「たちまち、床に巨大な亀裂！」

立ち止まる兵士達の間を、佑衣さんが当て身を食らわせる。その前に飛び出した魔来子さんも兵士達をなぎ倒していく。倒れている兵士達を避けて、僕は二人に追いつく。

「幻影なんですけどね、結構効くでしょ」

「いいわよ、ラバ。少し見直したわ」

「では、いよいよ、入ります」

魔来子さんが大広間のドアを開けた。重々しい音と共に、開くドア。テーブルに座った人々がこつちを向く。その中には驚くオネクターブの顔もある。

「伯爵様はいずこでございました」  
見ればテーブルの一番端、一番立派な椅子は空っぽ。

「こ、こいつら・・・だ、誰か、捕らえる！」  
オネクターブの叫び声。パニックっているのだろう、オカマ言葉じゃない。

佑衣さんがテーブルの上に駆け上がる。  
一瞬でオネクターブの喉にナイフを突きつける。

「ドアを閉めろ！」  
顔を引きつらせて、オネクターブが魔法の手を振る。

ドアが、ばたんと大きな音を立てて閉まる。ついでに門までかかる。

「狼藉者が・・・後でどうなるか、思い知るわよ」

「そんな先のことは知ったこっちゃないわ。伯爵はどこよ」

「さ、さあね……知らないわよ」

そういいながらも、オネクターブの瞳は、奥のドアを見ている。やっぱり、わかりやすいなあ。お前……

「魔来子さん、奥のドアの向こうのようです」  
僕がそういったときだった。

「……よい、三人を連れて入れ……」  
伯爵の声がした。

僕たちはオネクターブを人質にして、奥の部屋に入る。

たくさんの本棚、本。テーブルの上にも、床の上にも本や資料。

テーブルの前には立派な椅子。

その椅子に座っている人物。伯爵だ。

僕たちが入っていても、身動き一つしない。

魔来子さんが伯爵のそばに寄る。

伯爵の前に跪き、顔を上げる。

大きく目を見開いた彼女は、叫び声をあげた。

「は……伯爵様!？」

### 35・黒の花嫁（後書き）

さて、次回の予告。

第7章に突入！伯爵の因縁、魔来子の思い、様々な思惑がかけめぐり、

お城は大混乱・・・？

次回： 第7章 姉 第36話 未練

ああ、このサブタイトルでいくのでしょうか！

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

### 36・未練（前書き）

なかなかひねりも何もでてきません。  
淡々と話を進めていっています。

一応、因縁話なんですけどね。（笑）

### 36・未練

伯爵を見上げて、固まっている魔来子さんのそばに僕は駆けつける。

そこで見たもの・・・伯爵とは名ばかりの土偶。

長身、白髪、そして高貴な衣装は確かに伯爵のもの。

しかし、その肌は土気色。唇は白く、瞳はガラスのようにうつろ。その有様はまるで死者。

「これは・・・いったい何だ？」

「伯爵は・・・伯爵に何をしたのですかっ!？」

佑衣さんにナイフを突きつけられたままの、オネクターブに詰問する。

「伯爵は・・・三年前にとっくになくなっているわ  
ゆつくりとオネクターブが話す。

まるで大したことでもないかのように。

「そ・・・そんな馬鹿な。伯爵がしゃべるところを聞いているぞ  
!」

僕は叫ぶ。この城に来たときから、何度となく、伯爵の声を聞いている。

こいつ、また僕らを誑かすつもりだな。

その考えを魔来子さんの声が遮る。

「反魂の術・・・蘇らせたのですか？伯爵を!」  
魔来子さんが引きつるような声を出す。

反魂・・・まさか！死者を蘇らせるような魔術があるのか！？

そんなことが出来れば、この世界の支配者にだってなれるだろう。

死者が蘇り、彷徨い歩き、生者を襲うこの世の地獄。

そんなことになる前に、間に合わなくなる前にこいつを葬り去らねばならない。

その秘術と一緒に・・・

オネクターブは慌てて両手を広げる。

「残念ながら、いかに有能な私でも、反魂の術は無理ですわ。死者は死者のまま。この世の秩序を乱すような術は決してあり得ません」それを聞いて僕はホツとする。

「では、あの伯爵の声は何だったのですか。まさか、こつちの世界にも録音装置や再生合成装置があるはずがありません。どうやって死んだはずの伯爵の声を作ったのですか？」

魔来子さんの問いに淡々とオネクターブが話す。

「あれは・・・伯爵の残留思念・・・いわば、未練ですわ。断ち切ろうとして断ち切れなかったこの世への未練の想い。その想いを使って、この土偶を仮の肉体としたという・・・

ま、私にしか思いつかないような、すんばらしい、技でございましたよっ？」

「なにが、すんばらしい、よー！」

魔来子さんの怒声に、オネクターブも僕も思わず一歩後退する。

「死者の魂を、死者の想いを、どうして呼び覚ますようなことをするの！？どうして、安らかに眠らせてあげないの？未練という、哀れな想いを、どうして利用しようなんて、思いつくの！？」

魔来子さんはいつの間にか、泣き声になっていた。

伯爵の干からびたような両手を握りしめている。

「伯爵がこの世に残した未練というのは何か、知っているの？」

「知らないわよ、そんなこと。そんなことは全然重要じゃないの」  
オネクターブは冷たく言い放つ。

「お家の事情ということなのよ・・・」

伯爵は奥方も娶らなかった。つまり、跡継ぎもいなかったのよ。  
伯爵の死の直後、あたしたち家臣団は相談したの。このまま伯爵の死を公表すれば、周りから攻め込まれて、国が持たない。なんとかして、死を伏せて国を一つにする、良い方法はないかしらと・・・それがこの方法だったのよ。

伯爵がこの世に残した、わずかな思いを使つて、伯爵の人形を動かす・・・この三年間、それは見事に隠し切ったのよ！これがすばらしい方法でなくて、一体なんなんでしょう!？」

オネクターブが熱く語る。ちよつと暑苦しいぞ、お前。

「伯爵には、伯爵の未練には三年間の牢獄なのよ・・・」

この三年間に、あなた達は伯爵の名と声を借りて、自分たちの欲望を満足する方向にしか動いてこなかった。せめて、未練を満足するような事をしてあげることができなかったのかと思うと・・・未練の意味も分らないような人たちに出来るはずはないのだけれど、・・・なんと、哀れでしょう。伯爵様は・・・」

魔来子さんが握っていた手がゆっくりと動く。

魔来子さんの両手を握り返している。

「伯爵・・・伯爵様？」

魔来子さんが見つめる先、伯爵がわずかに動いている。

「・・・お前は、本当にあの少女に似ている。あの少女が生きていて、帰ってきてくれたようだ。私のもとに、ようやく戻ってきてくれたのかと思うと、本当に嬉しい・・・」

伯爵の、抑揚のない低い声が話す。

よく見れば、その瞳はしっかりと魔来子さんを捕らえている。

「伯爵様の未練とは、その少女のことなのですね・・・」  
魔来子さんのつぶやき。

「・・・私は若かった。わずかな供を連れて、山を越え、”村”の近くへ行ったときだ。”村”の近く、森の中でその少女を見た。まるで、天使か、妖精かと思った。それほど美しく、また愛らしい少女であった。

・・・しかし、そこで私はとんでもない間違いを犯した。その間違いが、私を一生苦しめることになるとは思っても見なかったのだ・・・私はその少女を欲した。ただ、単に欲しいと思ったのだ。それ以上のことも、それ以外のことも何も考えずに・・・そして、供の者に、その娘を捕らえよ、と命じたのだ・・・

・・・ただ、そばに置いておきたい、そう思ったただけだったのだ・・・」

### 36・未練（後書き）

さて、次回の予告。

やっと、伯爵のホッネ、ちゅうか、よー考えたら、ロリコン伯爵  
！？（汗）

次回： 第7章 姉 第37話 アンジェリーヌ

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

### 37・アンジェリーヌ（前書き）

直球と真ん中コースで書いてます。

なんの変化球ありません。読みしてる人、そのまんまだよ。（笑）

### 37・アンジェリーヌ

何の思慮分別も持たず、何も分かっていなかった。

若さと勢いに任せて、ただ突っ走るだけだった。

それでよいと思っていた。

何も悪いことはない、当然そう思っていた。

若くして、この国の領主となり、伯爵様と呼ばれることが当たり前で、

何も出来ないことはないと思いきんでいたのだ。

思うがままに振る舞うことが、私の特権であり、  
そうでなければならぬとさえ、思っていたのだ。

年を経た今になって思えば、ゆっくりと待てば良かったのだ。

何一つ焦る理由はなかったのだ。

それとなく、あの少女に近づき、丁寧に話しかけ、話を聞けば良かったのだ。

彼女が心を開き、私が心を占めるようになるまで、いろいろな手練手管を使って、

あわてないで、ゆっくりやっていけば良かったのだ。

いや、その過程を楽しんでこそ、恋と呼べたのかもしれない。

だが、若くて愚かな私は焦った。

矢も楯もたまらなかった。

欲しい。欲しい、この娘が欲しい。

それしか考えなかった。

少女の気持ちなど、何一つ考えなかったのだ。

追っ手を差し向けた私は、すぐにも少女が捕まり、私の元へと来るものだと思っていた。

だから、見失ったと聞いたとき、激怒した。

あの狭い村の、子供一人、見つけることが出来ないのかと。無能と罵り、盲目とあざけり、さらに追っ手を差し向けた。しかし、虱潰しにしてみても、少女は見つからなかった。

私自らも村に乗り込んだ。

ある時は、伯爵と名乗り、大勢の軍勢でもって、村人を脅した。少女の居場所を吐かねば、村を焼け野原にすると。それでも、少女は現れることはなかった。

又あるときは、こっそりと単身で商人と化けて村の噂をこの耳で確認した。

ある噂は、少女は死んだと言っていた。

追っ手を逃れ、山には入り、野犬に襲われたと、

またある噂は神隠しにあったのだと。

永遠に誰の手も届かないような、神の国に行ったのだと。

ある噂は、追っ手に捕まり、山の向こうの国に連れて行かれ、奴隷にされたと言っていた。

そんなことはない、私は奴隷にしたかったのではない、そう叫びたかった。

ようやく、その頃になって、自分の本心に気がついたのだ。

ただ、一緒に話し、笑い、そばにいてくれれば、それでよい。

いや、それが唯ひとつの望みであったのだと、やっとわかったのだ。無くしてやっと、無くしたもののすばらしさを思い知ったのだ。無くさなければ分らないとは、なんと愚かであろうか……

彼女は死んでしまった。

いや、死んでいなくても、私の手の届かない所へ行ってしまった。  
もはや、証拠も何もいらなかった。  
それだけで、私には十分だった。

彼女がいなければ、私には生きている意味などない。  
あの微笑みがなければ、生きる価値などない。

政は家臣に任せた。

何をおこなっても、興味は湧かなかった。

毎日がむなしく過ぎ去っていく。味気のない日々。  
時折聞く噂に、心を騒がせては、何もない手の中をのぞき込む日。  
その中には、絶望以外何もなかった。

時間が癒してくれる、そう思った時もあった。

だが、後悔が強まることはあっても、癒されたことなどなかった。  
悔悟の念だけが募る。

あの少女が生きてさえいてくれれば。

長い金髪、角度によつて、色の変わる煌めく瞳。愛らしい唇。  
そこから発せられる可愛らしい笑い声。

私は己の愚かさから、全てを失ってしまったのだ。

生きてさえいてくれれば、今頃、

そなたのように美しい女性となつて、私のそばにいて  
ほほえみかけてくれたであろうに……

「伯爵様は、それ以来、その少女には逢われていないのですね……」  
魔来子さんの問いかけにゆっくり肯く。

「・・・もはや、我が人生に何の意味もない・・・  
ただ、死という安らぎが来ることを待つだけであつた・・・  
そなたを見るまでは・・・」

「そなたを見たとき、忘れようとしていた、あの少女を思いだした。  
もしかすると、神は最後の時に、そなたを寄越したのかも知れない、  
と。」

そなたは、髪の色も瞳の色も、なにより名前が違つても、  
私の記憶の中の少女と同じ印象なのだ。

その声、その微笑みが・・・

甘く、辛く、苦い記憶が甦る・・・

閉じようとしていた心に痛みが走る・・・

そなたに感謝せねばなるまい・・・

魔来子さんは涙を拭っている。

「伯爵様は、その少女の名前はご存じなのですか？」

ゆつくりと伯爵の唇が動く。

「後で噂で知つた・・・アンジェリーヌと・・・

何という、愛らしい名前であつたことか・・・」

魔来子さんはゆつくりと肯いた。

「アンジェリーヌ・・・その少女の名前が、アンジェリーヌ。

つまり、アンジェリーヌ・エバ・オッフェンバッフのことですね」

伯爵はわずかに肯いた。

### 37・アンジェリーヌ（後書き）

さて、次回の予告。

どうして、魔来子さんはアンジェリーヌのことを・・・

次回： 第7章 姉 第38話 指輪

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

### 38・指輪（前書き）

この指輪は魔力はないみたいだけど、本当はすごい魔力があるんですよ。だから心臓に直結しているという薬指にはめるんですよ。知っていました？

### 38・指輪

アンジェリーヌ・エバ・オッフエンバッフ・・・  
オッフエンバッフ！？

「ラバの名字じゃないの。それ・・・どういうこと？」

もちろん、オッフエンバッフは僕の家だ。  
そして・・・アンジェリーヌは、忘れた姉のこと。

ずーと昔、僕がまだ5才にもなっていないころ。  
姉がいた。僕はその姉になついていたらしい。  
でも、いつの間にか姉は消えてしまった。  
僕は寂しくて泣いていたらしいけど、それは小さな頃の話し。

だいぶ経ってから、ふと、姉のことを、両親に尋ねた。  
返事は、どこかへ行ってしまった。  
きっと死んだに違いないと・・・  
両親の顔をよぎった表情に、ぼくはそれ以上聞いてはいけないと思  
った。

そして、できるだけ話題にすることを避け、忘れるようにしたんだ。

その姉の名前が、ここで出てくるなんて・・・  
姉が消えてしまった訳は、伯爵が原因だったのか！？  
でも、その姉は一体どこへ行ってしまったというんだ。  
それは伯爵もわからないと言っているし。

「でも、どうしてその名を、魔来子さんが知っているの？」  
佑衣さんも訳が分からないという顔。

それは僕も一緒なんですけど。  
魔来子さん、あなたは一体何を知っているんですか？

「これを．．．．これをそなたに．．．．」

僕たちが呆然としている間に、伯爵はわずかに手を動かしている。  
その指が持っているものを、魔来子さんの左手の指にはめている。

「あの、これは？．．．．．なんということを。伯爵様．．．．」

魔来子さんはむせび泣いている。

「これでよい．．．．これでもう、思い残すことは何もない。ありがとう．．．．」

あの少女の面影を宿す淑女．．魔来子とやら、深く礼を言う．．  
「」

「伯爵様！」

魔来子さんが涙声で叫んだ。

握りしめていた伯爵の手が、ゆっくりと下に降れる。

その手からは少しずつ、パラパラと土が落ちていき、やがて伯爵の全身が埃と化する。

全てが落ち着いたとき、そこには伯爵の服とわずたかく灰の山があるだけ。

その灰もふわふわと飛び散りながら、どこかへ消え去っていく。

「伯爵の未練が消えてしまった以上、もう土に帰ったということよ  
オネクターブが無感情に言う。」

その声を聞いて、泣いていた魔来子さんがスクツと立ち上がった。

「オネクターブ、そなたは絶対に許しません！」

伯爵の想いを愚弄したこと。伯爵の傀儡を作り、利用し、私利私欲のために伯爵の名を使ったこと。

伯爵の名で、村や南の国に侵攻し、多数の死傷者を出して、悲しみを広げたこと。

フェルゼンシュタインの名において、そなたに重罪を申し渡します  
！」

そのリンとした声に、その場の全員が身動き一つできなかった。  
何という迫力。

たしかに元々魔来子さんは迫力あったけど、さらに威厳が加わっている。

「な、何のこと？あんたに何の権利があつて、そんなことを言う  
の？」

さしものオネクターブも目を白黒させている。

「これをご覧になってくださいませ」

魔来子さんは左手をみんなに見せる。

その薬指には、金色に輝く太めの指輪が！

あんなの、いつはめたんだ？

「そ、それは、伯爵家の結婚指輪！」

オネクターブの震える声。

「さっき、伯爵がはめていたのは、あれよ！」

佑衣さんが叫ぶ。

け、結婚指輪……！？つ、つまり……

「魔来子さん、結婚したということ……なんでしょうか？」

魔来子さんは微笑んでいる。

「ええ……気がついたら、無理矢理という感じはありましたけど、伯爵様にこの指輪を頂いてしまいました。

頂いた以上は、私はフェルゼンシュタイン伯爵の妻でございます。本人が亡くなっているからには、未亡人でございますけど。

妻である以上は、伯爵の権利、義務を負う責任があると思っております。

伯爵の名を汚すような者は、直ちに成敗せねばなりません。オネクターブ、覚悟はよろしいですか」

「な、なにを、なにをあなたは言っているんですか？訳が分かりません！

伯爵は三年前に亡くなっているんですよ！その人と結婚できるわけがないじゃないですか！？」

頭を抱えて喚いている。

「その亡くなった人の想いを甦らせ、傀儡を作ったのはあなたでしょう。その傀儡の伯爵様から頂いたのですから、間違いなく結婚は成立ですわ」

魔来子さんは言い放つ。

「皆さんの中で、この伯爵家の指輪に逆らうおつもりがあるのなら、今この場に出てきてくださいませ。私が根性を試めさせていただきます」

僕はその時に、やっと周りに気がついた。

いつの間にか、扉の所に人垣が出来ていた。

朝議に来ていた家臣たちだ。

その家臣達も魔来子さんの指輪を見て、ひそひそ話している。  
やがて一人が進み出てきて言う。

「我々家臣団は、指輪をお持ちのそなた、魔来子様を、伯爵の奥方と認めます。

伯爵が亡くなっていることが公になった以上、あなた様がフェルゼンシュタイン家のご当主でございます」

「な、何を言ってるんですか？そんなどこの馬の骨ともわからぬ女を奥方だの、当主だの、  
なれる訳ないじゃないですか！？」

オネクターブが青ざめている。自分の不利が実感できたようだ。

「あら、どこの馬の骨ではありませんことよ。私は、皆さんのよく  
ご存じの女性でございます」

・・・いったい魔来子さんは何を言っつもりなのですか？  
佑衣さん、魔来子さんって、いったい何者なんでしょうか？

### 38・指輪（後書き）

さて、次回の予告。

ひえゝ、魔来子さんが奥方様になっちまったい。（笑）

本当にこの話、どうなるんだ？ 魔法少女はどこへいった？（爆）

あ、いなくなってるんだっけ。（笑）

次回： 第7章 姉 第39話 魔来子さんの過去

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

### 39・魔来子の過去（前書き）

魔来子さんの過去話、いかがでしょうか。

参考になっているのは、幼児虐待、ネグレクト育児放棄の話です。

なんでも読んでおくものですね、

こんなところで役に立つとは思ってもしませんでした。

### 39・魔来子の過去

・・・不穏な噂は何日も前から聞いておりました。

曰く、人質の少女を捜している。

引っ捕らえて、城へ送り込み、奴隸として働かせる気だとも、いずことも知らぬ所へ売ってしまふ、などということ。

でも、当の本人はその日まで何一つ知らないでいたのです。

あの日、慌てた様子で母さまは言いました。

すぐにお逃げなさい、捕まってはけません、

父さまも母さまも大丈夫だから、一人でお逃げなさい、と。

すぐに一人で村を逃げ出し、山に隠れました。

何も持たず、何も知らずに。

犬どもの鼻を逃れるために、水に潜り、

リザードどもからは森に隠れ、必死で逃げました。

頭の中にはただ一つ、噂に聞いた門がありました。

門をくぐって逃げれば、そこには平和な世界があるとの噂。

それだけが逃げ込むことが出来る場所だと思ったのです。

山に隠れ、森を抜け、何日もかかって、ようやく門にたどり着きました。

少しだけ躊躇しました。ここをくぐった向こうは見知らぬ世界です。

果たして生きていけるのだろうか。

そして、こちらに戻ってくる日はくるのだろうか。

しかし、遠くで兵士達の物音がしたとき、意を決して門に飛び込んだのです。

門のあちらは静かな林の中でした。

追っ手も、犬もリザードもない、平和な世界でした。でも、まったく違う困難が待ちかまえていることをすぐに思い知りました。

まず言葉が全く通じなかったのです。

翻訳魔法をきちんと修得していなかったため、身振り手振りでは口々に意思が通じなかったのです。

容姿も他人と異なっていて、とても目立つ姿や服装でした。

身元も寄るところもない、浮浪児、ホームレスでした。

怖そうな大人、権力の匂いのする大人からは必死で逃げました。捕まったらどうなるか、わからなかったからです。

空腹を満たすためには、盗みや万引きをするしかありませんでした。公園や物陰でこっそりと食べながら、何度となく泣きました。

あちらに帰りたい、帰って母さまや父さまと一緒に暮らしたい。

そう思っただけでなく、門の前にたたずみました。

でも、門のあちら側には、犬や兵士がいるかもしれない、

せつかく逃げてきているのに、捕まってしまうかも知れない、

捕まったら、殺されてしまうかも知れない。

そう思うと、門をくぐる勇氣はありませんでした。

そして、ある日、とうとう大人に捕まりました。

その女の人は、何か言っていました、ほとんど分かりませんでした。

捕まった手をふりほどいて逃げようとしたが、大人の力にはかないませんでした。

そしてその人は、グイグイ引っ張ると、ある立派な建物に連れて行っただけです。

そこではまず、お風呂に入れられました。

髪は汚れ、服は着たきりのボロボロ。垢がこびりついているような、もう、それはそれは汚い格好だったそうです。

そしてその次には、立派な食事でした。

今にして思えば特に立派でもなくありふれた食事でしたが、その時にはこんなにくさん、美味しそうな食事は見たことがありませんでした。

でも、すぐには食べることが出来ませんでした。食べていいのかどうか、分からなかったのです。

食事を指さし、口に指を持ってきて、「……いいの？」とだけ、片言で言いました。

その女の人は微笑んで大きく肯いてくれました。それから、ようやく食べることが出来たのです。食べながら、頬を温かいものが流れていくのが分かりました。

それからその家での、その女の人との生活が始まりました。言葉もわからない、住民票もないでは学校にも行けませんでしたから、

その家で必死で言葉を勉強し、習慣も覚え、やっと普通の生活ができるようになりました。

会話が成立するようになると、どこから来たのかを聞かれました。違う世界から来たこと、こちらでは一人きりであることを答えました。

どこまで門のことを信じてくれたかは分かりませんが、でも、ひとりぼっちであることには同情してくれました。そして、盗みで空腹を満たしていたことも話したとき、

その人は一緒に出かけると言いました。

そして盗んだお店で一緒になって頭を下げてくださいました。

なんでも、万引きは知っていて、見て見ぬふりをしてくれたそうです。

こんな娘がするなんて、なんか事情があるのだろう、と。

その話を聞いて、こみ上げてくる涙が止まりませんでした。

一生懸命に頭を下げて謝りました。お礼を言いました。

このお礼は、他の誰かに返してあげてね、そう優しく言ってくれました。

そして、ちょうどその頃、その家では生まれたばかりの女の赤ちゃんがいたのです。

育児係に手を挙げました。弟の世話を村でしていたので、慣れたものと思ったのです。

気むずかしく、ワガママで、やんちゃで、強情っぱりで、いたずら好きで、

思ったよりも遙かに大変なお世話でした。

でも、その子は、とても愛らしく笑う子でした。

この子に、頂いたお礼を返そう、いっぱい返そう、そう誓いました。そしてその子と一緒に生活する日々が続いたのです。

自分がなぜ追われたのか、いつ戻る日が来るのか、わからない日々でしたけど、

お嬢様と暮らした日々は毎日がとても充実して、楽しい日々でした。生活することに一生懸命で、魔法のことはすっかり忘れてしまいました。

あちらの世界では使うこともなく、不要でしたから。

その代わりに、知識や技術、武器や武術をその娘と一緒に学びまし

た。

いつか、いつか、村に帰る日が来るときのために。

そう、その少女とは、私。

あちらの世界では、多那香 魔来子と勝手に名乗らせていただきま  
した。

たまたまTVから流れてきた言葉を真似しただけなんですけど。

魔界から来た子だなんて、如何にもの名前でしょう？

こちらの世界では、アンジェリーヌ・エバ・オッフエンバッフ、本  
人でございます。

### 39・魔来子の過去（後書き）

さて、次回の予告。

オネクターブ、よく我慢したね、魔来子さんの長話を・・・（笑）  
そろそろ最終活劇に行きますかっ！

次回： 第7章 姉 第40話     ・・・うう、未定。  
刮目して待てっ！

#### 40・戦闘開始（前書き）

この話、考えてて、

魔法の呪文で思いついたのが、「エロイヌエッサイム」

・

うーん、何が起ころんだらう？（笑）

## 40・戦闘開始

えっと……待ってくださいね。

頭は理解しているんですけど、その意味が理解できてない……  
魔来子さんがアンジェリーヌで、

アンジェリーヌの姓がオッフェンバッフと言うことは……

「魔来子さんはあんたの姉さんということじゃない」  
……やっぱりそうですね、そうなんですよね！

「どうして、僕は姉さまに気がつきなかつたんでしょう？」

「あたしに言われてもわかんないわよ！このバカラバ」

「ほんとにバカなヤーコブよね！」

……オネクターブ、お前にまで言われたくない。

魔来子さんは微笑むと、片手を振った。

かすかな赤い光が魔来子さんを包むと、彼女の茶色い髪が  
柔らかくウェーブする輝く金髪に変わる。

そして両目から何かを取り出す。

「あちらの世界には、毛染めとかカラーコンタクトレンズがあつて  
魔法が使えなくても変身は簡単ですよ」

こつちを見る魔来子さんの目は、片方が青、もう片方が黄色、  
両目の色が違う……魔法使いの目だ！

間違いない、オッフェンバッフの印、村人の印。  
姉さまが、いなくなつた姉さまが目の前にいる……。

本当に、魔来子さんが姉さまだつたんだ……

つい、目頭が熱くなる……

「麗しき姉弟の再会の場面を邪魔して悪いんだけど、あたしも話に加わっていいかしら。長話が終わるまで待っててあげたんだから、もうそろそろいいよね」

なんだ、オネクターブ。さっさと尻尾を巻いて逃げ出したのかと思ってたのに。

「年増メイドの魔来子がアンジェリーヌだってことは認めるけど、伯爵の妻だとは認めないわ。いくら指輪をしてたって、死人に口なし。ここで伯爵と一緒にあの世に旅立っていただければ、あたくしの壮大な夢になんの影響もないわ。ご理解いただけるかしら？」

「もちろんわかりましてよ。私とて、伯爵様をここまで愚弄した張本人を無傷でこの城から出す気はさらさらございません。覚悟はよろしいかしら」

魔来子さんの微笑みは氷の微笑。

「では、開始ということではよろしいわね？」

魔来子さんは肯く。

と、いきなり、オネクターブは佑衣さんに掌を突きつける。

「魔法少女、佑衣！」

佑衣さんの身体がいきなり硬直する。やば！こいつ、暗示にかけやがった！

「あんたの敵はラバよ、やっておしまい！」

佑衣さんは僕を見ると、いきなりナイフで斬りかかってくる。それを紙一重でかわす。

「佑衣さん、佑衣さん、しっかりして！くそ、オネクターブ、汚いぞ！！」

「あら、ちゃんと試合開始を確認したじゃないの。なにが汚いもんですか。恨むんなら、自分の油断を恨みなさい」

「確かにハゲデブの魔法使いの言うとおりね。ラバ様……いえ、ヤーコブ、佑衣様のことはまかせたわ。私はこの、変態デブの相手をしますので、佑衣様のお相手、お願いしますわ」

ちよ、ちよつと魔来子さん、いや、姉さまか、ああ、なんかややこしい。

佑衣さんの突き、けっこう厳しいんですけど。

「ああ、もう、佑衣さん、しっかりしてくださいよ！」

「うるさい、このバカラバ！死ね！！」  
ナイフだけじゃなくて、足技も繰り出してくる。

「大丈夫ですよ。ヤーコブ。子供サイズの時はいざ知らず、大人サイズになった今なら十分かわしているじゃないですか。ちゃんと佑衣様の攻撃を急所をハズして受け止めていたことはわかってますよ」  
オネクターブの魔法の杖から発射される、炎の弾を避けながら、魔来子さんは笑って言う。

「姉さまにはかないませんねえ。しっかり見てたんですね」

「早く佑衣様にショックを与えてやってください。それで正氣に戻るでしょう。さあ、このハゲデブ！お返しよ！」

魔来子さんの両手が印を結ぶ。

空中に現れた氷の固まりがオネクターブめがけて落下する。

「この、このっ！」

オネクターブの防御魔法が氷をはね飛ばす。

・・ショックか、しょうがないな・・・

「佑衣さん、ごめんね！」

佑衣さんの突きをかわして、背後に回り込む。

くるりと振り向くと、佑衣さんを背中から抱きしめる形。

両手の所に当たる、膨らみの感触・・・柔らかくて、いい気持ちだな・・・

「ひっ、ひい、き、きゃあああ！」

佑衣さんの悲鳴が響いた。

「こ、この、この、エロイヌ。とうとう本性を見せたわね。

あたしの胸を、触った、いえ、揉もんだ、弄いじった、翳なぶった、まさぐっ

た、揉みしだいた、乳首まで刺激した、感じたじゃない！エロラバ、ど変態ラバ、お前なんか、死ね、死んじゃえ！」

えーっと、正気に戻った・・・んでしょうか？

あれ、さっきと言ってることが変わってないような・・・？  
暗示から解放されてない？されてる？どっちー！？

「なに訳のわかんないこと言ってるのよ！そこに直りなさい、ご主人様に痴漢行為をした罰、与えてあげる！」

あー、なんか正常みたい。

佑衣さんは平手で僕の頬をパチンと叩いた。

「いい、人前であんなハレンチなこと、するんじゃない！わかった、ラバ！？」

はいはい、いえ、正常になってくれれば、頬の一つや二つ・・・

「良かった。正気に戻りましたのね。では、佑衣様、ヤーコブ、牢屋の皆さんを、解放に行っていただけますか？途中、邪魔もあるでしょうから気を付けて」

魔来子さんの声を聞いて、僕たちは部屋を飛び出した。

家臣達もわらわらと部屋から逃げ始める。

「ちょ、ちょっとお前達、待ちなさい！衛兵、あいつらを捕まえなさい！」

「変態デブ、あんたの相手はこっちょよ！お間違えにならないで！！」  
僕たちの背後で爆発音が連続した。

#### 40・戦闘開始（後書き）

さて、次回の予告。

いよいよ魔法使いどうしの対決ですか！

次回： 第8章 激突 第41話 救出  
刮目して待てっ！

#### 41・救出（前書き）

第8章に入りました。残り、後10話ほど・・・

なんか、ちょっと寂しい気持ちもしてきます。

けど、がんばろー！

お読みいただき、感謝申し上げます。

楽しんでくれたら、嬉しいです。

## 41・救出

いきなり目の前に飛び出してきた兵士に佑衣さんが蹴りを食らわせる。

倒れ込む兵士達。

兵士が落とした剣を拾い上げる。

「ラバは剣？それとも魔法？」

「得意の魔法でいきます」

「頼むわね！って、このスカート、動きにくい！」

佑衣さんは持った剣で、自分のドレスを引き裂く。

たちまち腰まで露わに・・・

って、それ、短すぎます。下着まで見えてます。

「エロラバ、見るんじゃない！見えても見えてないふりしろ！あたしより、相手に注意を向けてて！」

そう言い捨てると、佑衣さんは猛烈に走り出す。

僕も必死でその後を追う。

見えないふりって、難しいですよ。

目の前で佑衣さんのお尻が・・・

っと、そんな場合じゃない。

「光の楯！」

佑衣さんに襲いかかってくる矢を跳ね飛ばす。

すぐに矢の来た方へ向かって炎の弾。

飛び道具がない僕たちにはちよつと不利な状況かな？

「なんとか接近戦に持ち込むところまで、ラバ、頑張つて！」

その言葉を待っていたかのように、兵士どもが現れる。

これなら、味方に当たるから矢も飛んでこない。

その兵士達に向かって、佑衣さんが剣とナイフで飛び込んでいく。

剣がきらめく。兵士の持っている楯と佑衣さんの剣が派手な音を立ててぶつかる。

パキン！

佑衣さんの剣が折れた。

「ちえ！なまぐらの刀はこれだからイヤになる！」

勢いのまま懐に入り込むと、掌底で相手のあごを跳ね上げる。

そのまま次の相手にぶつけると、飛び上がって剣を避ける。

そして後ろ回り蹴り！数人がぶっ飛んでいく。

すぐに剣を拾い上げると、振り下ろしてきた相手の刃を受け止める。

「お前の相手は、僕だ！」

そいつの首根っこに僕は静電気の弾を食らわせる。

たまらず気絶する相手に、佑衣さんは駄目押しの蹴りを一発。

「急ぎましょう。村の人に危害が加えられるかも知れません」

「わかってるけど、相手が多いわよ」

その言葉どおり、新手がやってくる。

僕は呪文を唱える。

「ラバ、使い過ぎないでよ！この前みたいにダウンしてもらっては困るんだから！」

「はいはい、ちゃんとセーブしてますから」  
通路を水平に放電が走る。

稲妻の応用。でも、この方が、相手に存分に当たってくれる。  
ほら、全員ノックダウン。

倒れている相手の間を僕たちは走り抜ける。

階段を上がる、通路を駆け抜ける。

魔法の感覚を伸ばしておけば、通路の先で待ち伏せしている相手の  
殺気が分かる。

佑衣さんを止めて、そこに衝撃波を送り込めば、全滅。

上からの矢は魔法で防御。

逆にそこにむけて氷と炎を飛ばす。

攻撃がひるんだところを佑衣さんが駆け上がり、相手の陣地に飛び  
込む。

肘うち、膝げり、踵落とし。

佑衣さんの身体がくるくると廻れば、相手が数秒で沈黙する。

「もう少しで牢屋だ！」

見上げたとき、そこにも異変が起きていた。

兵士同士が闘っている。

村人の姿も見える。村人達も剣やナイフを持って、兵士に襲いかか  
っている。

それを手助けしている兵士や使用人達。

「みんな！どうしたんですか？」

僕の声に反応したのは、クロエ。

「ヤーコブ様、あたし達の味方になってくれる兵士さん達もいるん  
です！」

僕たちが駆け上がったとき、もうその戦闘は終わっていた。

村の人たちやその味方が、敵を制圧したらしい。

兵士達や召使い達が僕たちに挨拶する。

「新しい領主様が決まったとの話を聞きました。

我々はその領主様につくことにしました。なにとぞ、「ご命令を」

「魔来子さんの事よ」

そついうと、佑衣さんは微笑む。

それだけではなかった。僕たちが取り上げられていた服や、道具までそこにあった。

運んできた召使い達が口々に言う。

「女城主様になったというのは本当ですか？」

「素敵な女性という話ですけど、一度お目にかかりたいです」

「あんなハゲデブなんかより、その方がよほどいいわ」

僕と佑衣さんは顔を見合わせる。

「・・・オネクターブ、お前、人望がないぞ。わかるけど・・・」

「やっぱり、これよ、これ。これでなくっちゃ」

佑衣さんは着慣れた制服姿。

数少ないあつちの武器を身につけている。

「城の外へみんなを誘導してください。道は分かりますか？」

「もちろんです。敵が少ない通路を使っていきます。お二人はどうされますか？」

「クロエはヤーコブ様についていきます！魔来子様の所へ案内して

ください。

命を助けてくださった魔来子様を、今度は私がお助けします！」

クロエが叫ぶ。

そばにいたクロエの父さまは一瞬困った顔をしたけど、すぐに僕に声をかける。

「クロエを預けます。私は村のみんなを誘導していきます」

そして、佑衣さんを見つめる。

「あなたのおかげでみんながその気になりました。そして、今逃げ出すことが出来そうです。」

感謝申し上げます。魔法少女、佑衣様」

佑衣さんは微笑む。

「全部片づいて、生きていたらその時、お礼を聞かせて。それまでは油断しないで。みんな、無事に連れ出してちょうだい」

「分かりました！」

僕、佑衣さん、そしてクロエの三人が階段を駆け下りる。

目指すのは激しく爆発音のするところ、中庭だ！

## 41・救出（後書き）

さて、次回の予告。

魔法対決の描写かあ・・・書けるかなあ？（笑）

次回： 第8章 激突 第42話 対決！魔法力  
刮目して待てっ！

## 42・対決！（前書き）

ちょっとサブタイトル変更。

ここらから先は実はアイデアだけある状態で、

下書きもすごく簡単なモノしかないので、話がどう転がるのかわかりません。

予告しなきゃいいのにつてか？・・・そうですね。

## 42・対決！

中庭は戦場だった。

そこではオネクターブと魔来子さん、いえ姉さまが闘っている。

オネクターブの杖が振られ、きらめく都度、炎が、氷が、光が襲いかかってくる。

魔来子さんが敏捷にそれらをかわしていく。

ただ、オネクターブが攻勢で、魔来子さんは避けるのが精一杯か。魔法の闘いに慣れている分、オネクターブの方が有利みたいだ。

どっちも致命傷は負ってないけど、体力か、魔法力が尽きれば負けだ。

「この・・ちょこまか逃げるじゃないわよ！」

「あら、逃げなければ、やられてしまいますわ。こうやって、隙をうかがっていますのよ。油断なならないで下さいな。ほれ、ほれ！」

・・口と体力は魔来子さんの方が有利だなあ。

その二人を遠巻きにして、兵士達が見守っている。

有利な方につこうって気だな。

「洞が峠を決め込んでいるわね」

「それって、日和見ってことですよね？」

それでも僕たちの姿を見つけると、槍や剣を構える連中もいる。その中でも一段とでかい奴がこっちにやってくる。

「お前が、あの、魔法少女ってやつか。ただの小娘じゃねえか。ここでやっちゃったら、俺の名も有名になるってことだな」

そういうと、剣をこっちに突きつける。

「これ、ちょっと規格外の大きさじゃないの。こんなの、あり？」  
そう呟いてる佑衣さんを背中にかばう。

「僕は魔法使いだ。ちよつかい出すと、痛い目に遭うぞ」

「遭わせてみるや、へなちょこ魔法使い」

いきなりの突き。僕たちは左右に分かれてかわす。

佑衣さんが飛び込むと、相手の向こう臍に一発！

そして、手に持っていた武器を相手に突きつける。

パシッと音がした。

でも、効いてない。

「うそっ！スタンガンが効かない！」

そう叫ぶ佑衣さんに相手の蹴りが入る。

必死に両手で受け身をとるも、佑衣さんはうめき声を上げて吹っ飛んだ。

壁に衝突して倒れ込んでいる佑衣さんに僕は駆け寄る。

「佑衣さん！大丈夫ですか？」

口から垂れている血をぬぐってあげる。

「力任せの一発だけど、効いたわ。スタンガン、バッテリーが切れてるみたい。」

使う前にラバで実験しておけば良かった」

そうですね・・・って、それ、勘弁してくださいよ。

調子に乗った相手がどんどん攻めてくる。

かわした佑衣さんが相手の急所を蹴り上げる。  
それも効いてない。防護されてるみたいだ。  
かえって、相手の攻撃に曝される。

「危ない!!」

僕が佑衣さんの前に飛び出す。

相手の蹴りが僕の顔面にヒット!

今度は僕が吹っ飛ばされる。

頭がフラフラする。うわあ、佑衣さんの蹴り以来だ。血の味……

「ラバ、大丈夫? しつかりしてよ!!」

佑衣さんが駆け寄って僕を抱きしめる。

「佑衣さん、なんかいい現代魔法、ないですか?」

勝利を確信したのか、ニタニタ笑いながら近づいてくる相手を見て、僕は言う。

「最後の……ほんとに護身用のやつがある……  
けど、これ、ほんとに……死んじゃう……かも……」

ああ、佑衣さんは本当に優しい人なんだ。

こんな世界に引つ張ってきちゃいけない人なんだ。

僕は深く反省しなくちゃいけない。

でも、佑衣さん、今は生きるか死ぬかの選択だから、迷っていい。  
れない。

やらなきゃ、やられちゃうんだよ。こつちの世界は。

「やるわよ、ラバ。肩貸してね」

僕たちは立ち上がって、相手と向かい合う。

相手は剣を構えると、勢いよく飛び込んでくる。

と、佑衣さんは僕の肩に片足をかけて、大きくジャンプする。相手の頭よりも高く。

驚いて見上げる相手の頭の上で、何かがきらめく。

そのきらめきは細い糸となって、相手の首に掛かる。

佑衣さんの全体重がその糸にかかる。

彼女が着地したとき、首を締め上げられた相手はぶっ倒れていた。

着地してもふらついている佑衣さんを抱え上げたとき、中庭でも魔来子さんが飛ばされていた。

オネクターブの大笑いが響く。

「おっほっほほほ。口ほどにもない。さっさとお亡くなりなっていただきましようか！」

その指輪を渡してから、逃げ出していただくという選択肢もなんならあげましようか」

僕たちの戦いの間、陰に隠れていたクロエも近寄ってくる。

「もうやだ・・・」

僕の隣で佑衣さんが呟く。

「佑衣さん・・・？」

「あつちの世界もイヤだったけど、こっちもイヤだ。こんな殺し合ったり奪い合わないやいけなんなんて、大っ嫌いだ。どうして仲良く暮らせないの？一緒に暮らせないの？」

僕は何も言えない。

「クロエ、お願い、あなたの魔法道具、貸して」

クロエは身につけたままだった魔法道具マジックアイテムを佑衣さんに渡す。

「佑衣さん・・・それをどうするの？」

だって、あっちの世界で試したとき、佑衣さんは魔法道具は使えなかったはず・・・

「クロエの傷を治したとき、魔法の感覚が分かったような気がする。その感覚をあたし、この道具で増幅してみる」

佑衣さんが魔法道具を付け終わったとき、僕は今まで感じたことがない感覚にたじろいだ。

佑衣さんを白い光が包んでいる。この光の感覚、攻撃でも防御でもないけど・・・

・・・なんて、なんて辛い感覚なんだ！？

## 42・対決！（後書き）

さて、次回の予告。

佑衣さん、やっぱり魔法少女・・・？

次回： 第8章 激突 第43話 佑衣さんの魔法  
刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 43・佑衣さんの魔法（前書き）

ああ、何とか今日に間に合いそうだ。  
ほぼ、24時間遅れのうぶです。

### 43・佑衣さんの魔法

佑衣さんを中心にして白い光がまるで、霧か雲のように周りに立ちこめていく。

その中にいると、なんだかとても、悲しく、切ない気持ちになってくる。

こんな、魔法があるのか・・・？

妙に静まりかえった世界。

魔来子さんやオネクターブですら、何が起こったのかわからずに戦いを中断している。

僕の目の前で、まるで何かが起こるかのように、霧が渦を巻く。

そして、そこに姿を現したのは・・・

「ち・・・父さま!？」

僕はあまりの驚きにしりもちをついた。腰が抜けた。

頭から血を流し、服は血だらけ。

瞳はあらぬ方を見て、ゆっくりと歩を運んでいる。

父さまだけじゃなかった。

あたりはいつの間にか、血だらけの人、手足を無くした人、矢が刺さった人など、

様々な人たちが立っていた。

村の人ばかりじゃない。兵士達もいる。敵も味方もみんながふらふらと歩いている。

「なんだ、これ・・・何が起こってるんだ？」

「ゾンビでございますか？これは・・・まるでホラー映画でこ

ざいます」

魔来子さんまでが理解不能という顔。

恐る恐る手を伸ばしてみる。僕の手は父さまをすり抜ける。

実体はないんだ・・・イメージ投影だけなのか。でもおかしい。

佑衣さんが引き起こしたイメージなら、佑衣さんの知っている人しか出せない。

佑衣さんは父さまを見たことはないはずだ。どうやって・・・

「たんなる記憶の投影ではなく、この地、人の思念を写しているとか・・・？この映像を知っているのは・・・オネクターブなので？」

それでなのか、この人たちが歩いていく先はオネクターブなんだ。

「こないで、こないでください！えーい、汚らわしい！！」

自分に迫ってくることに気がついたオネクターブは杖を振り回して、振り払おうとしている。

魔法を使っても何も効かない。

映像には物理攻撃も魔法攻撃も効かないんだ。

先頭がオネクターブに迫る。杖を掴んで放り投げる。

単なる映像じゃない！オネクターブに対しては実体なんだ！！

必死で逃げるオネクターブを集団で追いかける。

僕たちは佑衣さんのそばに寄った。

佑衣さんは小さく呟いている。

「・・・怖い、寂しい・・・一人はいや、一人で死ぬのはイヤ・・・辛い、苦しい・・・」

「驚きました。佑衣様は・・・死ネクロマンサー霊使いだったのですか。佑衣様は今、お亡くなりになった人たちの思念を具象化しているのかと思います。簡単に言えば、恨み辛みをはらすとする想いの代弁者ですわ・・・」

ついに捕まったオネクターブが哀れな悲鳴を上げている。

「た、助けて・・・お願いだから、助けてくれー!」

「佑衣さん、そろそろ魔法を解除しましょう」

「佑衣様、佑衣様?・・・なんだか様子が変ですわ!？」

僕たちの呼びかけに佑衣さんは無反応。

相変わらずつぶやきを続けているだけ。

しかもよく見れば、その瞳は焦点を失っている。

「魔来子さん、どうしよう?佑衣さんは・・・自分を失っている!」

「魔法の虜です。これでは、文字どおりのミイラ取りがミイラでございます!」

僕は佑衣さんを揺すった。グラグラと揺れるだけで意識は戻ってこない。

だからか、だからこんな死霊使いの魔法なんて使う人はいなかったんだ。

一歩間違えれば、自分が死霊の想いに取り憑かれてしまうから、危なくて使えないんだ!

「佑衣さん、しっかりしてよ!・・・このままじゃあ、佑衣さんは死霊の仲間入りだ!」

「非常手段でございます・・・佑衣様、いえ、佑衣、覚悟しなさい！」

魔来子さんはそう言うつと、佑衣さんの頬を一発平手打ち。

それでも効かないとわかると、左右の連続平手打ち。

佑衣さんの頬がみるみる赤くなる。

あまりの激しさに見ているこっちが痛くなってくる。

「・・・い、いた・・・いたい・・・」

佑衣さんがつぶやく。

「ラバ様、代わってくださいませ！思いっきりやらないと効きません！」

「佑衣さん、ごめん！」

僕はそう叫ぶと、右手を思いっきり振り下ろした。

頬に届く直前に佑衣さんの左手が僕の手を受け止める。

「佑衣さん！？」

「痛ったいわね！血が出るじゃないの、この、バカラバ！！」

佑衣さんの右手拳が僕の顔面を捕らえる。

ぶつ飛ばされながら、よかつた、帰ってきた、と思ったけど、

あれ？頬を叩いてたのは僕じゃなくて魔来子さんのはず・・・？

また、損な役割を受けてしまった様な気がする・・・

「佑衣様、気がつかれましたか？」

「ええ、魔来子さん・・・って、何？これ・・・あたしが引つ張り出したの？この人たち」

「そうです・・・今はとにかく、静かに眠っていただくように、お願いしてくださいな」

魔来子さんの言葉で、佑衣さんは念じ始める。

白い光とも霧ともつかぬものがゆつくりと消えていく。それとともに、人々の姿が透け始めていく。

「皆さんの想い、しっかりと受け止めます。どうか、安らかにお眠り下さい」

誰もいなくなった中庭を、僕たちは横断した。

目標は倒れているオネクターブ。目だけきよろきよろさせている。

「ま・・・魔法少女、佑衣。あんた、死霊使いだっただのね・・・恐ろしい技を・・・」

「あんたが、全部の原因を作ったんじゃないの。あたしはただあの人たちの想いを見せただけよ」

「もう勝負はついたようですね。降伏なさいませ。命までは取りません」

「イヤですわ！命のある限り、とことん抵抗するわ！」  
オネクターブは呪文を唱え始めた。

### 43・佑衣さんの魔法（後書き）

さて、次回の予告。

え？魅力って・・・どういうこと？（笑）

次回： 第8章 激突 第44話 ヤーコブの魅力  
刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 44・ヤーコフの魅力（前書き）

次話で第8章も終わり。

第9章を5話書いたら、『魔法少女』も終了です。

悪役を引き受けてくれたオネちゃんも成敗されちゃうし・・・

でも、どりさんの話は簡単には終わらないかもね。（笑）

もう少し、波乱起こしてから・・・

#### 44・ヤーコブの魅力

オネクターブは呪文を唱えながら、空中に飛び上がる。

中庭の上空にとどまると、そこでさらに呪文を唱え続ける。

杖の両端に火花が飛ぶ。

魔法の気がどんどん集中してくるのが分かる。

それとともに城全体が地鳴りに包まれる。

「あいつ、何をするつもりなのよ」

「何か強力な魔法で、我々を、いやお城ごと吹っ飛ばそうって感じですね」

「そんなことができるんですか？」

「いや、オネクターブの底力というのは計り知れないですから」

魔来子さんがふわりと宙に浮く。

「私がなんとしても止めて参ります。皆さんは安全なところに待避してくださいませ」

そう言ってさらに浮き上がろうとした魔来子さんを佑衣さんが止める。

「魔来子さん、まさかと思うけど、あの約束、忘れてないわよね？」  
「なんですかという顔をして、魔来子さんが見る。」

「みんなであっちの世界に戻るという約束。それにあっちで女子会やるって決めたよね？」

「そうです！クロエ、楽しみにしてます！！」

クロエの叫びに魔来子さんは肯く。

「はい、覚えております」

「だから、必ず生きて戻ること！たった一つの冴えたやり方なんて、許さないからね！！」

魔来子さんは微笑むと、宙に飛び上がった。

佑衣さんはそれを見て、クロエに話しかける。

「この魔法道具、あたしには使いこなせないみたい。クロエが持っていて」

そう言つと、クロエに魔法少女の道具アイテムを渡す。

僕は佑衣さんに話しかける。

「あの、さっきの、たった一つの冴えたやり方ってなんですか？」

「ラバは、何にも知らないんだから、ま、こっちの世界じゃないからしょうがないけど、命と引き替えにするってこと。差し違えるって言えば分かる？そんなのダメって言っただけ」

それを聞いて、僕は上空を見上げる。

魔来子さんがオネクターブと闘い始めてる。

姉さんはそんな覚悟だったのか・・・

「あたしたちも見ているだけじゃなくて、何か手助けできないかしら。特に魔法使いのラバ、あんた、何とかしなさいよ。あんたも一応、オツフェンバッツの末裔でしょ？魔来子さんの弟なんでしょ？」

確かにそうですけど・・・ああ、もっとしっかり勉強しておけば良かった。

神様、もうさぼりません。一生懸命に勉強も魔法も頑張ります。だから、何かいい考えを思いつかせてください。

・・・一個だけ、考えあるけど、これは本当に最終手段だし・・・

僕は隣のクロエを見た。

魔法道具を身につけた彼女からは、わずかな黄色の光。

「そうか。ね、三人手をつなぎましょう。あの、ケガを治した時みたいに」

僕の言葉で、クロエ、佑衣さんと両手をつなぐ。

「オネクターブをぶっ叩くイメージを作りましょう。

心の底からイメージを作れば、何かが起こるような気がします」

三人の魔法力が手を導体にして飛び交う。

三人の見上げる先にいる、オネクターブをぶっ叩く！

そして、その力が最大限に上がったと思ったとき、

「あー!？」

口から疑問符が飛び出した。

いきなり空中に取っ手のついた巨大な網が出現すると、オネクターブをバシンと叩く。

「きゃん！」

オネクターブは地面にたたきつけられる。網は一瞬で消える。

「な、何だったんですか？今は・・・」

僕と佑衣さんは顔を見合わせる。

でも、クロエは喜んでいる。

「やりました、やりましたよ！ヤーコブ様！ぶっ叩いてやりました！」

・・・つまり、クロエ、君があのだきな・・・あ！

「ハエ叩きか！あれ？」

「え、だってぶっ叩くっていうのはそう言う事じゃないですか？」  
クロエ、君という子は・・・なんて、素直なんだ・・・？

オネクターブは再度宙に飛び上がる。

それを見て、佑衣さんがニヤツと笑う。

「ね、クロエ、今度は奴の足を引つ張るわよ。いい？」

「はい、足を引つ張るんですね！」

そして、今度は巨大な手が出現すると、オネクターブの足を引つ張り、地面に叩きつける。

佑衣さんは笑い転げてる。

「足を引つ張るっていうのは・・・アハハ、そう言うことなんだよね。クロエには・・・ハハハ」

ダメです。僕も、笑いがこみ上げて止まりません。

「あ、あんたたち、バカにするんじゃないわよ！いいかげんにしなさいよ。何よ、この馬鹿げた魔法は！？」

「馬鹿げたってなんです！クロエは、真剣です！！」

僕はチラリを上空を見た。

このバカ騒ぎに巻き込まれなかった魔来子さんが魔法を唱えてる。

後少し、時間を稼げば……

「オネクターブ、これを見るー!!」

僕は服を脱いだ。

特に上半身の筋肉を強調するポーズ。

佑衣さんが真っ赤になっ僕を見る。

クロエもほんのりと朱に染まる。でも、その瞳はうつとりしてる。  
いや、それよりも、オネクターブは……

「な、何よ、ヤーコブ、こんなところで……いえ、それはいいと思うけど、なに？あたしに見て欲しい訳？んもう……二人つきりなら大歓迎なのに」

「お覚悟ー!!」

魔来子さんの叫びと共に、巨大な火柱が立つ。

防御の間もなく、オネクターブに落っこちる。

一瞬で黒こげになるオネクターブ。

「し……しまった……ヤーコブの筋肉に……見とれて、  
気が削がれた……」

ばたんと倒れ込む。

「やった、やりましたよ！佑衣さん！」

なぜか佑衣さんは渋い顔。

「あなた、お風呂の時、こいつとなんかあったんでしょ？怪しいと思っただよね……」

え？な、何のことです、それって？

うそ、そんな目で見ないでくださいよ。違います、違いますってばあー!!

#### 44・ヤーコブの魅力（後書き）

さて、次回の予告。

魅力ってそういうことだったんですね。（笑）

次回： 第8章 激突 第45話 オネクターブの最後  
刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 45・オネクタープの最後（前書き）

オネクタープ様。長い間、有り難うございました。

最初の粗筋ではあなたはいませんでした。

でも、あなたのおかげで、お笑い要素がドンと増えたような気がします。

最初の間までは、きっと行き詰まりしてたでしょうね。

どうも、有り難うございました。合掌。

## 45・オネクターブの最後

「ラバ様のご趣味がこんなところで役に立つとは思いませんでしたわね」

魔来子さん・・・姉さままでそんなことを言うんですか？  
勘弁してくださいよ・・・

「で、こいつ、どうするのよ。まだ息あるわよ。トドメ刺すの？」  
佑衣さんは足下の黒こげオネクターブをコンと蹴る。

「あら、トドメを刺すだなんて、女の子の表現ではありませんわ。  
私に良い考えがございますわ」

そういうと、魔来さんは落ちていた針金を拾い上げると、魔法を吹き込んでいる。

それを円形にすると、気絶したままのオネクターブの首に緩く巻き付ける。

「あ、ラ、ラバ、あれって・・・？」

「そうですよね、首の輪っかですよね！」

真っ青になって僕と佑衣さんは小声で話す。

あの、二人ともオシッコまみれになった、悪夢のような輪っかが・・・

そして、魔来子さんの嬉しそうな顔が、さらに恐怖感を増す。

「ささ、オネクターブ様、目を覚ましてくださいなっ！」

魔来子さんがピシヤンと頬を張る。

「ま、魔来子！覚悟はいいですか！？」

「はいはい、いいですよ。どうぞ、やってくださいな」

オネクターブは両手を突き出す。

でも、何も起きない。

首をひねったオネクターブはどんどん呪文を唱えるけど、何も起きない。

「なぜ？一体何が起きたんですか？どうして魔法が効かないのです？……この首の輪はなんですか？……ぎゃあー！」

首輪に触った途端、パシッと音がして、オネクターブは慌てて指を離した。

「首の輪っかに触ったりすると、首輪が縮むようになっております。つまり、取ろうとすればするほど、首が絞まるようになっております。気を付けてくださいね。それと、その首輪、オネクターブ様の魔力を吸い取るように魔法をかけました。その首輪をしている間は、魔法が使えないと言うことです」

魔来子さんは涼しい顔で説明する。

「なんですって？……ちょ、ちょっと取りなさいよ、こんなの……ぎゃああー！」

両手でひっぱたために、電撃が加わった悲鳴。

さらに首に絞まってきた実感がこもっている。

「あらあら、今お話ししたでしょ？これ以上首が絞まったら大変ですわよ」

「お願い・・・外してちょうだい・・・魔法も使えないんじや、どうにもならないわ。これからどうすればいいの？」

「普通の人として生きてください。魔法使いじゃなくて・・・なまじつか魔法の力があつたばかりに、こんな事になつてしまったんですから、これからはただの人として頑張ってくださいね」

「そ、そんな・・・あたしは、魔法なしで生活したことなんか、今までないのよ。どうやって生きて行けというの？・・・」

オネクターブは涙を浮かべている。

「村を追い出されたときだってそうよ。変態とかオカマとか言われただけど、あたしは自分に正直に生きてただけよ。あたしの魔法能力の高さをやつかんだ連中の仕業よ。村を追い出されから、苦労してなんとか食いつないで、東の国にたどり着いて、そこでも最初は白い目で見られて、やっと宮廷に入り込んで、その魔法使いに抱えられて、ようやくここまで来たっていうのに、どうしてこんな目に遭わなくちゃならないのよ！？あたしは、ただ幸せになりたかっただけなのよー！！」

オネクターブの叫びに魔来子さんは微笑みを浮かべる。

「オネクターブ様、力があるということとは、何をしてもよい訳ではありませんのよ。力がある者は必ず力のない者からやつかまれます。何かと邪魔をされます。意地悪を受けると言ってもいいですわ。ですから、力のある者は謙虚に下がっている必要があるのです。表に出て力をふるえば、ある者は恐れ、ある者は妬みます。決している結果は生みませんわ。それをわきまえていらっしやらなかったのではありませんか？」

それを聞いて、佑衣さんも下を向く。

そうだよ、佑衣さんもあのとき、いじめっ子の挑発にのったばかりに、

友達を無くしたんだよね。

佑衣さんは力があるから、その力をみせちゃ駄目だったんだ・・・

「もう、オネクター様は魔法の力がありません。他人と協力して仲良くして、生きていく方法を見つけてください。後になって分かります。それが一番いい方法だったということが・・・」

オネクターは涙を拭いている。

「本当？・・・本当に、それが幸せになる方法なの？」

「はい。私が保証いたしますよ」

オネクターはゆつくりと立ち上がった。

「これ以上お願いしても、外してくれそうにないし・・・魔法なしで生きていく方法を探してみるわ・・・」

ゆつくりを歩を進める。

「あー！まだるっこしい！！こんなに自分の足で歩くのなんて、いつ以来でしょ！魔法が使えるようになったら、魔来子、佑衣、ヤーコブ、あんたたちに絶対に復讐に来るわ！覚えててなさいよ！」

オネクターが振り向いて叫んだ。

「残念でした。忘れちゃいますー！」

僕たちは声を合わせて叫んだ。

オネクターの姿が消えて、しばらくした頃、兵士が駆け込んで

きた。

「南の、南の国の使節団がやってきました！」  
魔来子さんの顔が引き締まった。

## 45・オネクタープの最後（後書き）

さて、次回の予告。

いよいよ最終章。まとめに入りましょうか。

次回： 第9章 宴 第46話 和平交渉  
刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

## 46・和平（前書き）

今回、ちょっと固いですか？（笑）

でも、案外、魔来子さん、カッコイイと思うんですけど。

こういう魔来子さんも最後までには書いておきたかったということ  
で。

完璧に作者の趣味に走ってます。ハハ、ごめんね。

## 46・和平

お城の大広間。東の国の家臣団や村の人たちも集まっている。壇上にスクツと立ち上がっているのは魔来子さん。

その前には南の国の使節団が深々とお辞儀をしている。

「ようこそ、東の国へ。私が当主、フェルゼンシュタイン伯の妻、アンジェリーヌです。フェルゼンシュタインが亡くなりました今、私が当主を勤めさせていただいております」

「我々もその噂を聞きました。噂の真偽を確かめ、和平の道を探るべく、ここへ参った所存でございます」

魔来子さんも深々とお辞儀する。

「それはわざわざの遠出、心痛み入ります。こちらでも早急に和平を求めるつもりでございました。今、南の国に侵入しております軍隊は即時停戦するつもりです。順次撤退を計るつもりですが、そちらの施設等にご迷惑をかけていると思います。これらの部隊はご迷惑の修復を行いながら、東の国の領土に戻すつもりでございます。もし、そちらに異議がございませんでしたら、ただちに和平条約を締結しとございます」

魔来子さんの発言を聞いて、団員たちが驚きの声をあげる。

「おお、そこまでお考えでございましたか。和平条約の締結にはこちらでも異存ございません。ただ、その条件としては、賠償金の請求と”村”の領有、そしてこの地への南の軍の駐留でございます」  
魔来子さんの顔に微笑みが浮かぶ。

「和平条約に条件を付けるとはなかなか商売上手でございますね。」

でも、その正直さには感心いたします。では、こちらも正直にお答えします。

賠償金は応じません。国庫にそれだけの財源がございません。そのため先ほど、修復を行いつつ撤退と述べました。いわば、労働による損害賠償を行うことを提案したわけです。二重に賠償を行うつもりはございません。

次に”村”の領有は拒否いたします。そもそも、”村”は東の国のものではございません。ここにいらつしやる村の人の国でございます。”村”がどこに属するのかは、村の人たちが決める話でございます。ただ、私も村の出身でございますが、村はやはり自主独立でありたいと思います」

僕は肯く。僕の周りでも何人かが、そうだと話している。

「最後の南の軍隊の駐留ですが、お断りいたします。南の国との戦争で負けたわけではございません。勝ったわけでもない国の軍隊が我が物顔にやってくるのを傍観しろとおっしゃる？とんでもございません。東の国は不屈でございます。そのような屈辱を飲めとおっしゃるのであれば、私と戦争する覚悟でお願いします。

ただ、私とその仲間は東の国の軍を壊滅に追い込んだ、”魔法少女”でありますことを、お忘れ無く。なんでしたら、これから南の国に乗り込んで、その力、お見せしましょうか」

その言葉を聞いて、僕は慌てた。

魔来子さん、でも、もうあっちの世界の力は、カガクの力は弾切れなんですよ。

「バカラバ、馬鹿正直にもほどがあるわよ。ハッターよ、ハッター。でも、よく効くと思うわ。この脅しは」

佑衣さんが囁く。

佑衣さんの言うとおりだった。

南の国の使節団はがやがやと話し出す。

どうやら、思ったとおりにはいかないことがわかってきたようだ。この奥方は見た目ほど甘くないぞ、そう言っているようだ。

「わ、わかりました。”村”の件も駐留の件も断念いたします。ただ、何らかの実を取って、和平条約の締結に……」

「なんと小賢しい！」

魔来子さんはピシャリ。

「小人は目先の利に迷って大局を見失うとは聞いておりましたが、そのような方であったとは。いいですか、皆さんの目の前には和平という大きな実利がぶら下がっているではありませんか。その収穫こそが本当の実利ではありませんか。それを小さな利益を得んとして、和平条約そのものを吹っ飛ばすおつもりですか？」

「よろしいですか。無条件で和平条約を結ぶのですか？それともこのまま戦争状態を続けたいのですか？直ちにお返事いただきとうございます。返事の内容によっては、私自ら、南の国に乗り込んで力を見せつける所存でございます」

わかってきましたよ。やっぱり佑衣さんの先生は魔来子さん、いや、姉さまなんだ。

ハッタリと言い、相手に有無を言わせない所と言い、どう見たって、佑衣さんは姉さま直伝。

「わかりました。なんと言っても、和平は両国の求め、望みでございます。無条件で和平条約を結ぶことといたします」

「それはよろしゅうございました」

魔来子さんはニッコリ微笑む。

「これから私の、国家元首としての戴冠式がございます。その式場にて、和平条約の発表が出来ること、それは両国の国民がきっと、心の底から喜びの声をあげることになると信じております。では、その時までどうぞ、ごゆるりとお休み下さいませ」

魔来子さんの声を聞いて、使節団の人たちは退席する。

最後の一人が部屋を出て、扉が閉まる。

椅子に座り込む魔来子さん。

心底から疲れたという感じ。

「ふうー、なかなか狸よね・・・ま、国際政治つての舞台裏なんて、こんなもんなんでしょうけど」

佑衣さんが呟く。

「こつちの焦りをかき取られないようにするのが大変でございますした。あの手の連中は、そういう臭いに敏感でございますから・・・」

「焦り？焦りなんてあるんですか？」

僕はびっくりした。焦りがあるのに、あんなに自信満々に見せることが出来るなんて。

「佑衣様が学校を休めるのは最大で今日まででございます。何もかも今晚中に片づけないと、明日は無断欠席となってしまうです。勉強をしっかりとないせんと、ラバ様のような、不出来の生徒になつてしまいます」

うわあ・・・、そんなこと、言わないでください。

僕と佑衣さんは同時に頭を抱えて、しゃがみ込んだ。

## 46・和平（後書き）

さて、次回の予告。

いよいよ魔来子さん、国家元首です。でも、佑衣さん、なんか不安げな？

次回： 第9章 宴 第47話 戴冠式

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 47・戴冠式（前書き）

ああ、あんまり戴冠式じゃなかったなあ。

最初のイメージは王冠を頂く式典を書こうと思ったんだけど、

一体誰から王冠をいただくの？って考えたら、

あっさり、その後からになってしまいました。

魔来子さんの演説が長いですけど、勘弁してください。

書きたいのは、佑衣さんの心情ですから・・・

## 47・戴冠式

大広間は眩いばかりの輝きに満ちていた。家臣たちも、南の国の施設たちも、村の人たちもいっぱい入っている。

入りきらない人たちは中庭に集まっている。

みんな、お目当ては新しい国王、王女さまだ。

奥の扉が開いて、魔来子さんが現れる。

白い長いドレス。

金色の髪の毛は形良く結われ、そのてっぺんには銀色のティアラ。

その姿に、会場は低いどよめきが沸く。

「私、アンジェリーヌ・エバ・フェルゼンシュタインは今宵、今は亡き伯爵の地位と権利、そして責任を引き継ぎ、国民の皆さんの期待と希望に対して、最大限の努力を払いますことを、誓います」

魔来子さんは微笑む。

その姿は国中に映し出されている。

その声とともにあるいは街角に、あるいは巨大化した空中に立つて、国の人すべてが見ることができるよう、魔法が動員されている。それは村でも同様。

「また東の国以外の国とも、共栄共存を図り、すべての皆さんが幸福と平和を感じることができるよう努力する所存です。特に今回、大きな被害を被った村と南の国に対しては、最大の誠意を払いたいと思います。」

私はこの国の出身ではございません。村の出身でございます」

また、おおという声上がる。

「ですから、村が壊滅的な被害を被ったことに関しては、本当に心が痛みます。しかし、過去をどれだけ悔いても、また謝ったとしても前には進みません。これからの未来を、どのようにして二つの国が、その国民が築いていくか、それが大切だと考えております」

魔来子さんは周りを見渡す。

その視線は魔法を通じて、すべての人々に語りかけているかのようだ。

「それは南の国に対しても同様でございます。どうか、私を信頼してください。東の国、南の国、そして村の人々が仲良く、平和に暮らしていけること、それが私の何よりの願いでございます。

実は私は、こちらの世界ではなく、あちらの世界で苦労して育ちました」

三度目のどよめき。今度はあちこちで、魔法少女の言葉が飛び交う。

「村にいるときに伯爵に追われることにより、あちらの世界へ飛び込みました。あちらの世界では、人の怖さ、世間の恐ろしさを思い知りました。そして同時に、人の優しさ、ふれあいのすばらしさを知る経験を得ました。

こちらへ帰ってくる時に、帰る理由を考えました。逃げなければならなかった理由も知りとうございました。それ以上に私のような不幸な子供を作りたいくない、そのような世の中を作ることができないでしょうか。そう思ってこちらへまいりました。こちらでは、伯爵が愛ゆえに私を追ったことを知りました。私は伯爵を許しました。

そして、その希望どおりに妻を名乗る決意をいたしました」

魔来子さんは悲しげに微笑む。

「どうか、今回の戦いをお許し下さい。例え、伯爵の名を使った狼藉者の仕業であろうと、伯爵の目が行き届かなかった事は事実です。その妻の責任として、復興と、発展に心から努力いたします」

深々とお辞儀をする魔来子さん。

静まりかえっていた会場は次第に拍手に包まれていった。

僕も佑衣さんもクロエも拍手をしていた。

「有り難うございます。私は王女としてこの城にて執政を執り行います。その第一歩として、南の国との和平協定を調印いたしました。東の国の軍隊は復旧事業を行いつつ、ここに引き返してくるようになりました。その土地の人たちと仲良く、深い信頼を得られるように命を出したところです」

魔来子さんの話は続いていた。

でも、僕は佑衣さんの様子が気になりだしていた。

さっきまで明るく微笑んでいた佑衣さんが、なぜか不安げな表情を浮かべていたからだ。

（なにか、気になることでも？敵か？）

僕は魔法の感覚を伸ばしてみる。

いや、敵はいない。生き残った村の人たちが幾重にも魔法の感覚で取り囲んでいるし、衛兵たちもいる。どこにも入り込めるような余地がない。

（じゃあ、あつちに帰ることも考えているのかな？学校が不安なのかな？）

僕は佑衣さんの不安を全然見当違いに考えていた。

「村の出身であるが故に、村の全責任も私が負います。村の執政代理に我が弟、ヤーコブ・ラバ・オツフェンバツフを指名いたします。今回の騒動でも、村の命を受けて、あちらの世界に飛び込み、魔法少女を連れて帰るなど、その勇敢さを行動にて証明しております」

クロエは僕を見て、ニツコリ微笑んだ。

僕もクロエに微笑みを返す。

「・・・そんなの、そんなのって・・・」

佑衣さんのつぶやきに慌てて振り向く。

佑衣さんは真っ青になっていた。

「佑衣さん！どうしたの？」

僕の問いかけに、一瞬僕の顔を見た佑衣さんは、すぐに踵を返すと小走りで会場を後にする。

僕は慌てて佑衣さんの後を追った。

一体彼女に何があったんだろう？

その途中で、壇上の魔来子さんと目があつた。

なぜか、一瞬、魔来子さんは悲しそうな表情を浮かべたような気がした。

「佑衣さん、佑衣さん、待ってよ！」

僕は走りながら佑衣さんに呼びかける。

前を走る佑衣さんの長い黒髪が揺れている。

周りの人たちは彼女を避ける。

あの娘が魔法少女だ、とのつぶやきと共に。

ようやく、佑衣さんに追いついた僕は肩に手をかけて振り向かせた。

「佑衣さん、どうしたの？せっかくの魔来子さんの話の途中・・・

」

そこまで言いかけたとき、僕の言葉は止まった。

佑衣さんは、大粒の涙をこぼしていた。

#### 47・戴冠式（後書き）

さて、次回の予告。

佑衣さん、どうしたっていうの！？それはね……

次回： 第9章 宴 第48話 決意

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 48・決意（前書き）

50話使ってきて、結局書きたかったのはここからの3話分ですね。

まあ、どんな話してもクライマックスとエンディングを見れば、だいたい内容は分かりますから、当たり前の話ですけど。

そう言うわけで、あと、3話です。よろしくです！

## 48・決意

「ラバは、ラバは魔来子さんの話を聞いて、何にも思わなかったの？」

「え……みんなのための平和な国作りという、すばらしい展望としか思わなかったけど……」

「こんなこと言っちゃいけないのはわかってる。自分でも、子供だっと思う。けど、言わないでいられない。あたしはこれからひとりぼっちになっちゃうんだよ！」

佑衣さんは泣きながら訴える。

え、あ……そうか。

僕と魔来子さんは古里に戻ることになるけど、佑衣さんは違う。

そして、その時は佑衣さんは一人になってしまう。

「ラバの嘘つき。魔法少女になったら願い事が叶うって言ったじゃない。それは確かに、そんなこと本当になるなんて信じていなかったわよ。でも、もし、叶うのなら、パパとママに戻ってきて欲しいって、最初は思ったの。」

でも今は違う。戦いが終わって、平和な村が戻ってきたら、魔来子さんとラバとあたし、三人であっちに戻って行って、あの家で、前みたいに暮らせたらいいな。それぐらいなら叶うだろうなって、思ってたの。三人で楽しく毎日を送りたいって……

でも、魔来子さんは東の国の王女様、ラバは村の執政者ですって！？それじゃあ、一緒に帰っていけないじゃない！このままこっちにいるってこと？あたしは一人で帰っていけないの？

でも帰っていった先ではあたし一人なのよ。たった一人で生活することになるの。起きて、学校へ行って、ご飯食べて、寝る生活をたった一人でするのよ。あの、一人だけの犬小屋で……」

あ、だから佑衣さんはあの立派な家を犬小屋って言ってたのか。どんなに立派な犬小屋でも、たいてい犬は一匹で暮らしているからだ。

「どうしていつもあたしはひとりぼっちになっちゃうの？ 小さな時からそうだった。パパもママもみんなして、あたしを無視するの。気がつけばいつもひとりぼっち」

僕の目の前にいるのは小さな女の子。

お人形を引き裂きながら泣いじゃくっている女の子だ。

……どうして、誰もいないの？ パパやママはどこへいったの？ どうして会いに来てくれないの？

「教えてよ、ラバ。どうしてみんなの願いは叶うのに、あたしの願いは叶えられないの？ どうしようもない魔法しか使えないから？ 結局、魔法少女じゃなかったから？ 魔法少女だなんて、大嫌い！ もう、言わないで！ ほっというて！ あたし、ひとりで生きてくしかないんだから！！」

佑衣さんはひとしきり泣きじゃくった。

「わかってるわよ。こんなの、あたしのわがままだったこと。魔来子さんもラバもあたしなんかより、この国のことや村のことが大切だもん。それはわかってるけど、でも、寂しくて悲しい。とつても……」

僕は佑衣さんを抱きしめた。

「ちょ、ちよつとラバ……」

いつもなら、言葉より先に手が足が飛んでくるのに……  
そう思いながら、僕はさらに強く抱きしめる。

「佑衣さん、僕は約束したよね。佑衣さんを護るって。今でもその約束は有効だよ。僕は佑衣さんを護る。護りたい」

「ラバ……」

そう言つと、佑衣さんは僕にしがみつく。

「ラバは、間抜けだけど、ほんとに優しいんだよね……よかった。ラバと知り合えて、ほんと、よかったと思う。ありがとう、ラバ……」

「佑衣さん、僕は君のそばにいる。これからずっとそばにいる。村のことなんかどうでもいい。佑衣さんの方が大切だ。村は僕じゃなくても誰かがやれる。でも、佑衣さんは僕が支えないとダメなんだ」

佑衣さんは僕の言葉で一層強くしがみつく。

「あたしはもつと大人にならないといけないんだ。そのための試練なんだと思うよ。うん、きつとそう。だから、あたし、頑張る。ラバ、本当に有り難う」

佑衣さんは僕から離れる。

「戻ろう。魔来子さんにもラバにもきっちり言わなきゃいけないことがある」

僕や姉さんに言わなければいけない言葉？

僕は首を傾げながらも、佑衣さんについて、会場に戻る。

魔来子さんの就任宣言が終わって、祝賀パーティに映っていた。魔来子さんは盟主の椅子に腰掛けて、いろんな人たちからの挨拶を受けている。

僕と佑衣さんが魔来子さんに近づいていくと、自然と人並みが左右に分かれる。

・・・あれが魔法少女の佑衣様だ・・・  
そんなつぶやきが聞こえてくる。

「どちらへいらしていたのですか？佑衣様」

「ラバと・・・ヤーコブといろいろ話して、励ましてくれたから、魔来子さんに言わなくちゃって」

「はい、それは何でございましょう？」

佑衣さんは大きく息を吸い込んだ。

「多那香 魔来子さん。私、阿坂居 佑衣はあなたをクビにします  
！」

それを聞いて、魔来子さんはあっけにとられた顔をした。

佑衣さんは僕の方を向いて、さらに叫ぶ。

「ヤーコブ・ラバ・オツフェンバッフ！あなたもクビにします！お二人とも、これからはご自分の好きなことをしてください！村でもどこへでもお好きなところへ出かけていってください。私のことは気にしないでいいから。これが私からお二人に言いたかったことです！」

## 48・決意（後書き）

さて、次回の予告。

ああ、トリオもいよいよ終わりですか。寂しいなあ・・・

次回： 第9章 宴 第49話 別れ

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

#### 49・別れ（前書き）

「別れてないじゃない！」

はい、ふりです。（いや、その・・・）

こつちの世界との別れとか・・・

まあ、とにかく、ハッピーエンドを。（汗）

## 49・別れ

「今まで私を育ててくれてありがとう。わがままな娘で大変だったと思うけど、とっても感謝しています。これからはこちらの国と人を育てていってください。魔来子さん、あなたならきっとやり遂げることができます」

佑衣さんはペコンと頭を下げる。

上げた顔に張り付いている笑みはぎこちない。

「ラバ。とても短かったけど、すごく楽しかった。生きているって実感を感じさせてくれたこと、お礼言います。あっちの世界だとそんな感じは全然ないと思うけど、それでもいい思い出として、大切にしていきます。これからは姉さんを支えて、村を、みんなを復興してください。」

ありがとう、魔来子さん、ありがとう、ラバ。そして、そして……」

無理していた佑衣さんがとうとう泣き始める。

「さよなら、ラバ。魔来子さん。好きでした。大好きでした」

「待つてよ！佑衣さん。僕は佑衣さんを護る。佑衣さんについていく。村のことは村の人に任せる。僕は村の人を信頼してる。でも、佑衣さんのことは放置できない。だから、姉さん、悪いけど、村には帰らない！」

僕は叫んだ。

「ラバ、そんなのダメだよ……」

「うるさい、佑衣さん。僕は決めたんだ。だから、黙ってて」

佑衣さんは口を閉じると、僕の手を握った。

僕も握り返す。

魔来子さんが何か言いかけたとき、人混みの中から女性が出てくる。

「はいはい、こういう時は年長の者の言うことを聞くものよ」

・・母さま。

こうして見ると、姉さまと母さまは似ている。

柔らかそうな金髪。すべてを見通していそうな澄んだ瞳。

そして、とおりのよい高い声。

「ヤーコブ、あなたの気持ちはわかりました。この娘、佑衣様の手をしっかりと握っていなさいね。決して離すんじゃないよ」  
そう言うのと、にっこり微笑む。

「父さまと同じで、優柔不断でなかなかはっきり言わない子だから。佑衣様のこと、好きなんでしょう？」

な、なんてことを！？

顔がいきなり熱くなるのがわかる。

「え、い、いや、あの、好きとかじゃなくて、護りたいって思うだけで、契約だし・・・」

「契約はさっき解除したわ！」

佑衣さんは僕を睨んでる。

「それでも、ラバ、あたしを護りたいって、言ってくれたじゃない。どうして護りたいって言ったの？ウソなの？」

いえ、ウソじゃないです。その気持ちは本当です。でも、それは・

「ほら、言わないでしょう？父さまもなかなか言わない人でね。言わせるまでに苦労しましたわ。変なとこだけ強情で。女の子にとっては、一番大切な言葉なのにねえ」

「言いなさいよ、ラバ、言うの。あたしを護りたい理由を聞かせなさい。でなきゃ、護らせてあげない」

ああ、そうきますか。笑顔が見たい、そばにいたい……でもそれって、やっぱり……

「父さまそつくりの優柔不断男は放置して、我が娘、アンジェリーヌ。魔来子様っていったほうがいいかしら。すぐく突っ張ってどうしてかしらって思ってたんですけど、伯爵様にそうしろって言われたのかしら」

「い、いえ。そのようなことは全くありません……」

「そうね。ようやくその理由がわかったわ。あなたも娘と別れるのが辛くて仕方がないのね」

魔来子さんがうるたえるのがわかった。

「このままだと佑衣様と別れなきゃいけないことがわかってるから、自分の気持ちを殺して、為政者に徹しようってことなんですよ？」

でもね、魔来子様。自分の娘の母も勤まらないような人が、国の母なんて勤まるかしら？あなたもまだまだ修行が足りないようです

ね。佑衣様が十分大きくなるまで、あちらで一緒に修行に励んではいかがですか？」

「母さま……」

「それまでの間、こちらのことはこちらの人にお任せしてはどうですか？あなた一人が頑張るものではないでしょう？それに、もう”門”は逃亡者の逃げ道ではなくなったのですよ。あちらとこちらの往来になったのですから、いつでも自由に通過できるのではないですか？」

「そうよ、魔来子さん！」

佑衣さんが明るい声。

「お昼間だけ、こっちに仕事に来て、他の時間はあっちで生活してもいいじゃないの！」

「さ、魔来子様、あなたの可愛い娘さんがこんなに呼んでいるのですよ。あなたが本当にしたいことはなんですか？亡き旦那様の後を継いで、王国を発展させることですか？それとも、かわいい娘さんたちと暮らすことですか？」

母さまと魔来子さんは微笑みあう。

「魔来子さん、魔来子さん！」

その中に佑衣さんが飛び込む。  
魔来子さんにしがみついている。きっと昔からそうしていたんだろう。

魔来子さんも抱きしめている。

「答えは出ましたわ。母さま、有り難うございます」

「さて、優柔不断さんの返事はあったのかしら？」

「ラバ！いい加減にしてよね！どうしても口に出来ないっていうのなら、半殺しがいい？ぶん殴られるのがいい？それとも蹴り？さあ、どれか選びなさいよ！！」

・・・神様、僕はどれを選んだらいいんでしょうか？

## 49・別れ（後書き）

さて、次回の予告。

長らくご愛顧いただきましたお話、とうとう最終回となります。

次回： 第9章 宴 第50話 後日談

刮目して待てっ！

（サブタイトルは変更する可能性があります。ご容赦下さい）

## 50・後日談（前書き）

とうとうと言うか、やっとと言うか。ラストです。

約2ヶ月間、書き続けてきたと言う感じで、たどり着きました。

10万字越えも、50話の話しも初めてで、

予定どおりにたどり着いたのが信じられませんが、

これもひとえに応援してくださった皆様のおかげとっております。  
有り難うございました。深く感謝申し上げます。

## 50・後日談

クロエはケーキにかぶりついている。

その様子を見て、魔来子さんは笑いながら紅茶を運んでくる。

そう、約束どおりのお茶会だ。

「学校へ行ったらね、みんなが取り囲んで、昨日の欠席、どうしたのとか、今日来るかどうか心配だったとかいろいろ言ってくるの。お人形の子も、話してくれるし、今度交換しようって。

そうそう、あのいじめっ子たちだけど、あたしのこと、姉御って呼ぶの。チビッたことがみんなにばれて、なんか威厳なくなっတာ、あたしに付いていきたいんだって。煙草とナイフはなしってことで了解したの。あたしの言うことに絶対服従なら、いいかなって思っ。格闘技クラブか何かでもやってもらおうかな」

佑衣さんは笑顔。

「あっちの様子はどうなの？魔来子さん」

「はい、とりあえず私が不在の際は、村を母さまに、東の国はクロエの父さまに代理をお願いしております。代理と言っても、毎日のようにあちらには行っておりますから、そうは負担にはならないかと。そうそう、”門”そのものは解放状態になっておりますから、あちらは東の軍隊が護っております。こちらは阿坂居家の土地として買収してしまいましたので、もう他人が近づくことはないと思いますわ」

そうか、だから僕も魔法感覚が十分に戻ってきているわけだ。とはいってもヘタに使つと、この家の防御機構が働くのは十分分かってるけど。

そんなことを考えていた僕は、いつの間にか佑衣さんと二人つきりになっていることに気が付かなかった。

「これ、ラバへのプレゼント。受け取ってくれる？」

ちよつと照れたような感じで、佑衣さんが差し出したのは指輪。うーん、魔力も何にも感じない。本当にただの指輪ですね。銀色の輪に小さな綺麗な小石が光ってますけど。

「あたしの指にもはめてくれる？」

あ、ペアなんですか。いいですけど。

僕は何も考えないで、お互いの指に指輪をはめる。

その指輪を見て、ニツコリしている佑衣さんが聞いてくる。

「ね、ラバ。教えてよ。最初、公園であつたとき、あたしを魔法少女にっと思つたんだよね？結果としてそれは外れだったけど、どうしてあたしを選んだの？」

「いえ、見たときに、この娘だつて思つたんですけど……まあ、自信あつたんですけどねえ？おかしいなあ……って、別に根拠とかつて聞かれてもなにもないんですけど」

僕は首をひねる。

「それってもしかして……魔法少女じゃなくて、ラバの一目惚れ？」

は、はあ！？一目惚れ？

い、いや、そんなことは……あるのか？

あのときの感覚は、恋心だったのか？

「ラバはお間拔けで、優柔不断で、ヘタレで、どうしようもないって時々おもうけど、でも、ラバがあたしを選んでくれたのがうれしくて、あたし、頑張ることが出来たと思うの。だから、あたしもラバを選びたいの」

佑衣さんの目が真剣だ。

「あたしはラバのことが好き。ラバはあたしのこと、どう思ってるの？」

そう言うとき佑衣さんの顔が近づいてくる。

目を閉じて、唇を軽く突き出して・・・それって、もしかして、キスですか？

えっと、えっと、そんな、僕は初めてで・・・

あの、どうすればいいんですか？

オロオロしている僕を佑衣さんは睨みつける。

「いい加減にしてよね！女の子の方からこれだけ、モーションかけてるのに！魔来子さん、このグズ弟、なんとかしてよー！」

物陰から魔来子さんとクロエが出てくる。

「ああ、ラバ様・・・いえ、ヤーコブ、男ならやるときはやらないと。据え膳食わぬは男の恥と言いましてよ」

「ヤーコブ様、クロエも男らしい方が好きです」

え・・・二人して覗いてたんですか。

「せつかく、婚約指輪もはめたというのに、それでは佑衣様があまりにお可哀相で・・・」

「はあ？婚約指輪？・・・あ、この指輪って、え、そういうものだっただけですか？」

慌てて外そうとする僕を佑衣さんが止める。

「なによ、ラバ。指輪外すんなら、覚悟しておきなさいよ！！（怒）」

そんな様子を見て、魔来子さんは笑いながら用紙を取り出す。

「ラバ様の新しい雇用契約書は、解雇期限が設定されておりません。つまり、無期限永久に佑衣様とご契約と言っことで、よろしいですか？」

僕は、僕は・・・笑っている佑衣さんも大好きだけど、こうやって怒っている佑衣さんも実は大好きなんですよね。

だから、こうやって怒鳴られているのが楽しかったりするんですけど・・・

どうかおかしいかな？僕・・・

「そんなに佑衣様がおイヤなら、あたしがヤーコブ様の相手になりますう！」

「あ、クロエ様、それはいけません！」

「ちょ、ちよつとクロエ。指輪、返しなさいよ！」

「・・・ええ、これが好き。このバカ騒ぎが好き。」

だからこっちの世界でよかったなっと思っていますよ・・・

・

## 50・後日談（後書き）

どうも、有り難うございました！（ペコ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9563s/>

---

魔法少女と呼ばないで

2011年6月26日03時38分発行